
獣神戦隊マイスマン

桃川 弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

獣神戦隊マイスマン

【Nコード】

N4725G

【作者名】

桃川 弥

【あらすじ】

目覚めよ、『神話の人』！

太古の刻より蘇った「幻妖帝国神魔」。彼らは再び地上の覇権を手にしんと、かつての帝国の地日本への侵攻を開始した。時を同じくし、重度の特撮オタクな高校生《星川輝夜》は、ある日親友と共に地球を守護する獣神の転生者であると告げられてしまう……。平穏な日常と何はともあれ受験合格のため、彼は仲間と共に神魔との戦いに身を投じていく！！

《現在、文章修正中》辛口批評お待ちしております。

プロローグ（前書き）

とにかく、本編はまだ始まってません。次からです…。

プロローグ

燃え盛る焰の中、9歳前後の少年が苦しげにうずくまっている。煙を吸っているせいか、その四肢には力がない。傍らには少年の母とおぼしき女性が胸から血を流し、倒れ伏していた。

親子二人を囲む焰はいよいよ勢いを増していく。その時、僅かながら母親の指が動いた。些細な変化に気付いた少年は小さな声で呼びかける。

「……お母、さん？」

「かぐや……。そこにいるの？」

「お母さん！」

弱々しく呼びかける母の姿に、たまらず少年はしがみついた。幼いながらも彼は悟っていたのだろう。母の命が残り僅かであることを。それでも現実を受け入れられず、かぐやと呼ばれた少年はただただ母に縋ることしかできなかった。

「かぐや、よく聞いて。例えこの先、何があつたとしても、貴方は……生きなければ、ならないっ」

息も絶え絶えに彼女は愛息の頬に手を寄せる。その頬には止めどなく涙がこぼれていた。

「お母さんも一緒だよな？ 僕だけじゃなくてお母さんも……一緒に」

——生きようよ。

次に来る言葉がわかっていても、彼女には応えられなかった。質問には応えず、母親は黙って首に掛けていた紅い宝玉を息子の首に

掛ける。その際宝玉が紅く輝き、その中で焰が龍のように蠢いた。

「かぐや。貴方が生まれた時、これを小さな手で、握り締めていたの。」

何があっても、これだけは手放してはいけません。っ……ごほっ！」

「お母さんっ！　お願い、死なないでえ！」

血を吐きながらも彼女は最後の力を振り絞り、呪文のようなものをぶつぶつ呟くと右手を少年の額に当てた。掌から白い光が放たれ、少年の体は糸が切れた人形のようにくずおれる。

「輝夜^{かぐや}。どうか……生きて」

——守って。この星の生きとし生けるもの達を。

その言葉を最後に、地獄の焰が全てを焼き尽くした。

この日、少年は全てを失った。この日、少年の宿命は回り始めた。そして9年の歳月を越え、再び宿命の齒車は回り出す。同じく宿命を背負う若者達と共に。

第1話 目覚めよ、神話の人！！ パート1（前書き）

本編スタート！

ですが、まだ日常編になります。

第1話 目覚めよ、神話の人！！ パート1

母さん……母さんっ！！

目覚めると見慣れた屋根裏の天井が眼に飛び込んできた。時刻は午前6時少し前。他の家族が起き出している気配は無い。

またこの夢か。汗ばむ前髪を拭い、青年は溜め息をついた。

母が死んでから九年。彼——星川^{ほしかわ} 輝夜^{かくや}は父方の叔母夫婦に引き取られていた。当初こそ頻繁に母の夢を見ていたが、慣れない叔母家族との生活に必死になっている内に夢を見ることはなくなっていたのに。

「最近になって、どうしてまた……？」

考えていてもしょうがない。さっさと学校行く準備でもするか。そう気持ちを切り換え、輝夜はベッドの側に置いてある眼鏡を手にとった。

一通り準備を済ませ下のリビングまで下りていくと、輝夜の予測通りまだ叔母家族は起きていなかった。寝ている隙にさっさと朝食を準備し、口の中にかき込む。

彼が食べ終わると同時に、中三になる従弟の陽一^{よういち}がリビングに来た。輝夜の顔を見るなり、嫌そうに口を歪める。血の繋がりがあるとはいえ、この家で輝夜は厄介者でしかなかった。

元々輝夜の父と妹である叔母は、彼の結婚を機に付き合いが悪くなっていた。と言っても、兄である父が原因ではなく叔母の方の気持ちの問題らしいが、詳しいことを聞けぬまま月日だけが過ぎ去っていた。

「ちつ……まだ居がった」

鬱陶しげな態度を隠しもせず、陽一は極力輝夜と眼を合わせぬようキッチンに向かう。叔母が輝夜に冷たいため、当然他の家族達も同じように接していた。いつものことだ、気にしても仕方ない。自分にそう言い聞かせながら、輝夜もまた陽一を無視し通学鞆を手に取り肩に掛ける。

玄関まで進みスニーカーを履いていると、ドドドと後ろから凄い足音が近づいてきた。慌てて振り向けば、彼の腹部に小さな影がタツクルをかました。

「カグヤ兄ちゃん！ おはよー」

「優希……、相変わらず激しいな」

「僕の愛だからー！」

輝夜の腰にしがみつく少年は満面の笑みを浮かべ眼を輝かせた。

優希だけがこの家で輝夜の唯一の味方だった。小三になる従弟は、物心ついた頃から遊んでくれていた彼を実の兄以上に慕っていた。

成績優秀で期待の星である陽一に対し、大した特徴のない優希に両親が何の期待もしていなかったことも理由だろう。自分に無関心な両親に、成績をネタに馬鹿にする実兄。そんな中で優希のありのままを認め、実の弟のように可愛がってくれた輝夜を兄のように思うようになったのは当然と言えるかもしれない。

「またヨウ兄^{にい}がやなこと言った？」

「どうして？」

「なんとなく。わかるよ、ずっと一緒にいるんだし」

「まったく優希には敵わないな」

眼鏡の奥で眼を細め、輝夜は喉の奥で笑う。一度くしゃりと義弟

の頭を撫でると、毎朝恒例の行事よろしく右手を上げた。

「じゃ、行ってくる」

「うんっ、行つてらっしゃい！ 気をつけてね？」

「ああ、わかってるよ」

一纏^{まと}めにした肩に付くざんばらな髪を揺らしながら、輝夜は自転車にまたがって学校を目指した。

第1話 目覚めよ、神話の人！！ パート1（後書き）

いきなり、どうかのシリアスなホームドラマになってますね（汗）
軽い紹介のようなもので、次回から学校編です。
これからコメディ出したいな。

第1話 目覚めよ、神話の人！！ パート2（前書き）

学校編、またの名を自己紹介編です。
まだ日常だけど、色んな伏線あり。
変身は次回からになります。

第1話 目覚めよ、神話の人！！ パート2

どこにでもありそうな高校の授業風景。学ランの男子に対し、何故だか女子は紺のブレザー。私立に対し、流行もへったくれもない公立校のダサさを強調しているようだ。

黒板の前では、初老の男性教諭が一本調子でつらつらと源氏物語を朗読している。念仏のような声を右から左に聞き流し、輝夜は窓から覗く桜並木に視線を落としていた。軽い気分転換の後、ずり下がった厚い眼鏡を押し上げ、教科書と黒板に眼を通す。

あー、退屈だああ。そろそろ終わろうぜ？ 俺、早く智史とゲ
ーセン行きたいだけど……。

大学受験がかつてるとはいえ、正直遊びたい気持ちで一杯なのだ。こっそりノートの下から覗く特撮ヒーローの下敷きで、何とかモチベーションを高める。

いけないいけない……っ、こんな事では憧れのレッドから叱られる！

少々ズレたベクトルでもって、彼は残り少ない集中力を覚醒させた。肩に掛かる黒髪がはりと前に落ちてくる。鬱陶しげに耳に掛けながら、もう一度黒板に集中する。

「はい、では今日はここまで！」

男性教諭の切り上げる声とほぼ同時に終業のチャイムが鳴り響き、一同礼をする。それが終わると、先ほどまで静かだった教室にざわめきが戻ってきた。各々隣の席の友人と談話したり、凝った肩をほぐすなどして授業中の疲れを取る。

「輝夜！」

廊下側の席から、色素の薄い髪に緑のかった茶色の眼の男子生徒がやってきた。その顔立ちは優しげな歌のお兄さんといった感じだ。

「おー、お疲れさん。HRが終わったら例のゲーセンに行かないか？」

「あー、悪いね。今日父さんから呼び出しくらってるんだ。ハァ…」

溜息をつき肩を落とす彼を慰めるように、輝夜はポンポンと軽く肩を叩く。

「どんまい、智史」

輝夜の親友でもあり、悪友でもある結城智史は父親に頭が上がない。彼の話し振りから聞くに、素晴らしい人で尊敬できる父親みたいなのだが、勉強と常識面に関してはとことん厳しい方のようなうだ。

こんな父親だったら、俺絶対逃げ出す！ まあ逃げ出さずきちんと向き合うところが智史らしいっちゃあ智史らしいが。

「まあ親父さんからなら仕方ないよな。で、呼び出してことはやつぱ成績？」

「いや、そうじゃないみたいなんだ。職場の方に真っ直ぐ来いって輝夜の事も話したら是非来てほしいってさ」

「え、何で俺も？ それに俺の事って何を話したんだ？」

「前に輝夜が言ってただろ。俺も智史みたいに不思議な玉を持つてるって。それで父さんが興味持ったみたいで」

ふーんと聞きながら、そう言えばそんな話もしたつけと輝夜はぼんやり思い出していた。二人がだいぶ親しくなってからだが、お互いに同じような玉をもっていることに気づき更に親しくなったのだった。

輝夜が紅い玉であるのに対し智史は漆黒の玉という違いこそあったが、いずれにせよ生まれた時持っていた点は共通している。

「そういえば、智史の親父さんって確かどこかの研究所で働いていたよな。世界の神話にまつわる研究が多かったような気がするけど」「うん、世界神秘科学研究機構って組織の本部。研究内容に関しては僕も詳しくは教えられてないんだ、機密事項って奴さ」

なるほどねと相槌を打ちながら、輝夜は教科書を通学鞆に詰めていく。

キンコンと再び鳴り出したチャイムが五分休みの終わりを告げた。また後でと言いながら他の生徒達と同様に智史も慌ただしく自分の席へ戻っていく。全員が席に戻った頃、古典の教師と入れ替わるように入ってきた担任が教卓に着いた。

改めて全員を見渡すと担任の鬼嶋おにじま——通称鬼がわらはその名に違わぬ厳つい顔を引き締め話を切り出した。

「今日は全員の耳に入れてもらいたいことがある。最近、この周辺地域で小学生から高校生を中心に誘拐事件が起きている。決して自分だけは例外だと思わず、なるだけ他の生徒の下校時間に合わせて帰るように。また部活動で遅くなる人は必ず友人と帰るか、保護者の方に迎えに来てもらうようにな」

更にと鬼がわらは話を続け、輝夜と智史にその視線をロックオンする。

「帰りに寄り道なんてのも御法度だ。まあこれだけ騒がれているのだから、間違っても自ら危険を冒す真似はしないと思うが……」

さっきまでゲーセンに行こうとしていた自分としては冷汗ものだ。そんなに自分たちは信用ないんだろうか？

「わかってるな、星川？」

訂正。特に俺が信用ないようだ。つか、わざわざ名指しで呼ぶな！！

鬼がわらの一言に、クラス中がどつと沸きあがる。輝夜は不満気にじとりと鬼がわらを見やると、不貞腐れたようにそっぽを向いた。

この話を最後にHRが終わると、輝夜は智史と共に下駄箱へと急ごうとした。しかし、人が急いでる時に限って邪魔する奴がいるのだ。当然、この高校も例外ではなく――

「よお、星川。人を無視するたあ、随分とデカクなったもんだな。いや、図体だけは無駄にデカかったか」

にやにやと薄ら笑いを浮かべ、輝夜より僅かに長身の男子生徒が待ち構えていた。心底嫌そうに顔を歪める輝夜達を面白い玩具でも見るように眺める。

来やがった！俺が帰る時間に鉢合せするとは今日は厄日か！？

この男子生徒の登場に丁度周りにいた女子達がきゃっきゃっと黄色い声を上げる。

隣のB組からやってきた男子生徒は空蓮寺くうれんじ勇人。はやと肩よりも短いブ

ラウンのウルフカットに、程よく焼けた小麦色の肌の色男だ。雪のように白い肌の輝夜とは雰囲気も対照的である。もちろん人気も……。

大きな二重の紫の眼は元々釣っているが、今は輝夜という獲物を前にますます意地悪気に釣り上がっている。

「一体何のようだ、空蓮寺。それとも生徒会長と呼んだ方がいいか？今日の俺は遅刻もせずしつかり授業に打ち込み、これから清々しく爽やかに下校しようとしているのだが？」

「何か用がなければ話しかけるなと誰が決めた？俺が今話しかけてんだ。帰らずそのまま付き合え」

出たあああっ！！ 出ましたよ、この俺様節！ どんだけ上から目線なんだよ、お前は！

しかも、何故いつも俺がターゲットなんだ！？ はっ！ もしや、俺が瓶底眼鏡で特撮オタクだからか……？

もしもなにもその通りだからなのだが、本人はオタクである事に気づかれていないと思いついて入っている。あれこれと脳内で葛藤を続ける輝夜の耳に不機嫌そうな声音が響いてきた。

「おい、いつまで俺様の返事を無視すりや気が済むんだ。答える気がねえなら連れていくぞ、いいな？ 結城」

「待てよ、空蓮寺！ お前、どうして輝夜にばかりいつも突っかかるんだよっ」

「知るか。こいつを見ると、何か無償にイライラするんだよ」

「ならさっさと離せ！ 俺は智史と用事があるんだよ！！」

輝夜の言葉を無視し、空蓮寺は無理やり輝夜の首根っこを引きずっていく。

そんな様子を女子達は、カッコいい空蓮寺君……とか何であんなダメガネばかり構ってもらえんのよおっ！　とか悲喜こもごもに声を上げる。そんなに言うなら変わってやる、いつでもOKだぞ。

中にはそのまま押し倒しちゃえばいいのに、というかなりアブナイ要望も含まれていたが聞かなかったことにしておく。何とか空蓮寺の魔の手から逃れようとする輝夜だが、男子も含め周囲は別の意味で盛り上がっていた。

くそっ……人を置いて勝手に盛り上がるな！　大体お前ら、人としておかしいだろ！？

よし、こうなったら大人しく生徒会室にまで付き合い、隙を見て逃げ出そう。うん、そうしよう！

僅か一秒で以上の計算を弾き出し、すっかり諦めたように力を抜く。殊勝な輝夜の態度に空蓮寺も気を良くしたのか若干手の力を緩め（それでもしっかりと掴んでいるが）、生徒会室まで連行しようとした。

だが、空蓮寺いいい——！！　という怒声と共に凄まじい轟音を立てて、廊下の奥から二人の女子生徒が走ってきた。

「待ちなっ、空蓮寺！　あんたまた星川にちよっかい出してんの！？　一体いくつのガキだっつーの。そんな暇があるならさっさと生徒会の仕事手伝え！！」

勝気でやや釣ったアーモンド形の琥珀の眼にショートヘアの少女が、来て早々派手な啖呵を切った。

赤みのかった焦げ茶の髪は勢いよく跳ねており、少女の快活さを表してるようだ。相当走ってきたのだらう。ぜえぜえと息を切らしながらも、空蓮寺を睨みつけることだけは忘れない。

彼女は生徒会書記の白鳥世那^{しろとりせな}。輝夜のクラスメートだ。日頃は向日葵を思わせる明るい笑顔が、今は鬼も真っ青なお顔に変貌している。

「怪我はない？ 星川君」

もう一人の大和撫子と言うに相応しい日本美人が、さり気なく空蓮寺から輝夜を解放する。その涼やかな風の声が、輝夜を癒すように包み込んだ。

「香月さん……！」

優しく微笑む天使を前に、輝夜は感極まったように声を詰まらせブンブンと強く首肯した。

生徒会副会長である香月沙夜子^{かつき さよこ}は学園一の美少女で、男子女子を問わず慕われている。マドンナ的存在だ。翠のかった黒髪に、角度によつて赤く見える黒い眼。一度見たら、誰もが振り返らずにはいられない。各言う輝夜もその中の一人だったりする。ちなみに彼女も同じクラスだ。

「ちょっと星川！ あんたも、いつまでこいつの言いなりになる気？ちゃんと抵抗しないから、空蓮寺のアホがのぼせ上るだろっ」

沙夜子に心配されて少しポーっとしてた輝夜は、世那の一声に現実に取り戻された。

「白鳥……。俺だつてちゃんと抵抗はしてるぞ。

ただ逃げるタイミングを逃してると言うか、いつもあいつのペーすに巻き込まれるんだよ」

「それ、単にあんたがドジなだけじゃん」

グサッ！！ 輝夜^{きらや}の精神ポイントが50減らされた。プライドも100下がった！

世那の容赦ない物言いに凹む輝夜の耳に、空蓮寺のゲラゲラという馬鹿笑いが突き刺さる。こいつだけはいいい加減ぶん殴らねえとなと拳を握り締める輝夜。素早く拳を鳩尾に叩き込まんとするが、一歩早く世那の拳骨が空蓮寺の頭にクリティカルヒットした。そのまま頭を抱え空蓮寺は大人しくなる。

周囲のギャラリ―は世那の鬼神の如きお顔に静まりかえっていた。少しは溜飲が下がった輝夜だが、本当は思いつきり殴りたかったのが本音だ。

空蓮寺を下した世那はくると輝夜の方へ向かい、彼の制服に付いた汚れを沙夜子と共に払ってやった。それから、呆れたように顔を突き合わせる。

「星川さあ、少しは自己主張つての？　そういうこと覚えた方がいいよ。」

なんでも我が儘聞いてやるのは優しさでも何でもない。ただのお人よしだ……」

いつになく押さえた口調で世那は言う。正論なだけに、一つ一つの言葉が彼の胸の内を揺らす。

「世那、言い過ぎよ。元はと言えば強引な空蓮寺が悪いんだからね？」

「沙夜子の言いたい事はわかるよ。でも、星川もあいつにいいように振り回され過ぎだから……。見てるこっちが、悔しくなるんだよ」

悔しくなる。その言葉は、何故か輝夜の胸の奥深くに残った。

「輝夜！」

野次馬の波を潜り抜けて、智史が三人の元へたどり着く。今頃か

よと言わんばかりに世那がじとりと智史を睨みつけた。蛇に射すくめられた蛙のように、智史は思わずたじろぐ。

「ったく、何ボヤボヤしてんだよ！ 結城が突っ立ってる間に、またこいつがバ会長に連行されそうになってたじゃん。あんたもしっかりしなさいよっ」

「うっ……返す言葉もゴザイマセン」

ただでさえ鋭い世那の眼光がさらに増し、智史は冷汗を掻く。

「いや智史だつて庇ってくれてたしっ、俺が空蓮寺を付け上がらせてるのが悪いわけだから」

「全くだよ。今回は私達が来たからいいけど、いつもいつも助けがあると思うんじゃないよ」

「わかってる」

話を切り上げ、智史と共に下駄箱に向かおうとする輝夜にずっと黙っていた沙夜子が声を掛けた。

「待って星川君。私、いつも思ってたんだけど、どうして本気で空蓮寺を倒そうとしないの？」

本当は強いはずなのにどうして……」

「強いって俺があ？ 俺、香月さんが思ってるような強い奴じゃないんだけどなあ」

ハハハと困ったように笑いながら傍で困惑する智史を促し、沙夜子達へ挨拶を返したところで下駄箱の方へと歩いて行った。

「ねえ、沙夜子。さっきの星川が強いっての、どういう意味？ だ

「いたいいつも空蓮寺にやられてるのにどうしてそう思っただ？」

二人が去った後、世那は心底わからないといった調子で沙夜子に尋ねていた。首を捻り考える世那に、沙夜子はぽつりと呟く。

「星川君のちょっとした身のこなし、どう見ても素人の動きじゃないわ。それに、ときどき眼鏡から覗く目つきが鋭いから……」

「ええっ、あいつがぁ？」

今の世那にはそれがどういうことかわかっていなかった。指摘した沙夜子でさえも、それを知るのは少し先の事になる。

第1話 目覚めよ、神話の人！！ パート3（前書き）

いよいよストーリーが動き始めます！
その分、結構長いですが…。

第1話 目覚めよ、神話の人！！ パート3

——世界神秘科学研究機構本部

研究の主要な部分を扱う第一研究室に於いて、一方は白衣のもう一人は地味な焦げ茶色のスーツを纏った男達が言い争っていた。両者一步も引かず、他のメンバーは固唾を呑んで様子を見守っている。

「結城博士、本当に息子さん達をここへ来させるおつもりですか？アレは危険すぎます！　いくら彼らに『転生者』の可能性があるとしても……」

「だとしても、やるしかないんだ！　もはや一刻の猶予も残されていないのだから。」

人類史上最悪の危機に気付いているのは各国政府と、その機関である我々のみなのだよ」

「しかし……しかし、彼らはまだ子供です！！

未来ある若者の命を、御子息の命をあなたは危険に晒すのですか！

？」

「桐嶋君……」

激昂する若き研究員の発言に結城博士も僅かに瞳を揺らすが、その感情の揺れを押し隠すように冷徹な眼を向けた。

「神魔は復活したのだ。」

君も目の当たりにしただろう、太平洋上で奴らの居城が浮上する様を！

そして神魔皇帝を名乗る者がかつての帝国の地である日本を明け渡せと迫った事も……」

「だからって、僕には彼らを犠牲にできない。

いくら古代の書に書かれている守護獣神しゅごじゅうしんの生まれ変わりかもしれないくても。

博士、考え直してください！彼らが該当するという根拠がどこにあるというのです!？」

「根拠、か。それなら問題ない。しかし……——」

言い淀む結城博士に、桐嶋はしかし何だと言うのかと答えを待つ。果たしてその口から出た答えは。

「今度ばかりは、私の推論が外れてくれる事を願うよ……」

その横顔には国を守る立場と一人の親としての葛藤が滲み出ていた。

桐嶋を初めとする研究者達は、その横顔にもう何も言うことができなかった。

結城博士はそのまま何も言わず桐嶋の元を通り過ぎ、廊下に出たところで携帯電話を取り出した。ディスプレイに息子の電話番号が映しだされる。

耳に当て呼び出し音が途切れるまで、しばらく彼は天井を仰いでいた。

輝夜と智史が学校を出て外にある駐輪場まで来た時、智史の携帯電話が鳴り響いた。

バッグからホワイトのシンプルなものを取り出して開き、耳に当てる。

「もしもし。急にどうしたの、父さん。
うん、今友達と一緒にだけど…え、すぐ二人で来てほしい？
あーうんうん、わかった。伝えとくよ、じゃあ」

プツリと電話を切り、智史は輝夜の方へ顔を向ける。

「どうした？ 何か用事でも入ったか？」

「いや、父さんが今すぐにでも来てくれって。輝夜にも伝えておいてくれってさ」

「それ急いだ方がいいのか？」

輝夜の質問に首を縦に振り、自転車の鍵を鍵穴に掛ける。
続いて輝夜も鍵を外し、智史の案内で二人は世界神秘科学研究機構へと急いだ。

自転車を走らせること一時間。

街中から少し外れた山側にその施設はあった。

一応街はあるのだが、若干中心地から逸れるため田圃や畑などが
辺りに点在していた。

建物全体は白いためか、ガラス張りの入口らしきものが異様に目立つ。

門は嚴重に閉ざされ、誰かの紹介なしには入れない場所であることは一目瞭然だ。

自転車から降りて、それを手で引きインターフオンの前で止まる。

「うわー、何か特撮ものに出てくるヒーローの本拠地って感じだな
ー！」

「全く、相変わらず輝夜はヒーローもの好きだな。

この間も後樂園遊園地に行きたいって駄々をこねてたし」

「う、うるさいな！ 男ってのは心にいつまでも少年の部分を持つ

てんだよっ」

「はいはい」

呆れるように肩をすくめた智史はむくれる輝夜をおいてインターフォンを押した。

すぐさま受付の人が応答する。二言三言話すと、二人に対する確認が終わったのか門が開いた。

自転車を引き内部の駐輪場に駐車すると、智史の後を付いていくように輝夜も続いた。

一番大きな建物の中に入ると、エントランスホールに四十代半ばと思しき茶色のスーツの男性が待っていた。

どことなく落ち着いた態度が智史と被るが、雰囲気はこちらの方が厳つい。

智史は静かに歩み寄った。

「待っていたぞ、智史。それに星川君。こうやって顔を合わせるのは初めてかな？」

いつも息子が世話になってるね」

「い、いえこちらこそ！ 初めまして、星川輝夜といいます」

「今時の子にしては礼儀正しいねえ」

「そんなこと、ないですよ」

普段家で褒められることがないため、輝夜は照れ隠しもあり恥ずかしそうにはにかんでいた。

軽い自己紹介が済むと、結城博士は二人を第一研究室まで案内してくれた。

智史もここに入るのは初めてだと言う。

聞けば国家機密な内容も扱っているためだとか。

身内であっても大した徹底ぶりだと輝夜は関心する。

第一研究室の自動ドアが開き、内部の全容が明らかになった。

部屋の中央には天井まで届く円柱上のケース……と言っても円の直径は一メートルぐらいのものが配置されていた。

中には日本、中国を始めとする東洋から西洋の神話の生き物がホログラムで宙に映し出されている。

ざっと見たところ5体か…。

周囲は円柱を囲むようにパソコンや輝夜達には見覚えのない機器まで設置されていた。

他の研究者達は自分の配置に着き、それぞれデータ整理や観測などに忙しそうだ。

「どうかね？ 神話研究の最先端を見るとするのは」

「凄いです……。本当に日本でこんな研究があっていたんですね」

普段はお目にかかれない研究機器の集大成を見たような気分になり、軽く眩暈がしてきた。

ちらりと隣の智史を伺えば、彼もまた膨大な研究の一端に触れた衝撃からか、口を開けて円柱に注目している。

そんな二人の様子に結城博士はさも可笑しそうに肩を震わせていた。

博士の笑い声に、二人ともちよつと気まずそうに居住まいを正す。

「さて、いつまで立っているのも何だし、少し遊んでみようか？」

「へ？」

突然妙な事を言い出した結城博士に二人は間の抜けた声を上げる。

二人の様に頓着することなく、博士は円柱の前にある銀色の三角柱の台にある緑のボタンを押した。

すると台の表面が引出ひきだしになっていたのか、右側に銀の蓋が移動し、台の中に納められているモノが明らかとなった。

——それは金色に輝く美しい細工がなされた腕輪だった。

太さはせいぜい三センチで、模様だけを見ればお寺に置いてそんな仏具そっくりだ。

気になる点を言えば、一か所だけ何か丸いものをはめ込むような窪みがあることだけだった。

「綺麗だろう？この中から直観で好きなデザインの腕輪を選んでくれ」

「え、でもいいの？父さん」

「そうですよ。いくらなんでもこれはちょっと……」

「二人とも遠慮する必要はない。」

ここにいる全員の許可を得てやっていることだ。さあ、選んでくれ」

そう言われたら二人に断る理由はなかった。

実は内心この腕輪が気になってたまらなかったのだ。

まず最初に智史が腕輪を手にとった。

そこには亀に蛇が巻き付いたような動物が彫られていた。

甲羅の部分に丸い窪みがあるようだ。

「次は輝夜だよ」

「おう。えーっと、どれにしようか……ん？」

じーっと腕輪を眺めていると、一番左の腕輪がきらりと紅い光を放ったように見えた。

気のせいかと思ったが、再び彼を呼ぶようにはつきりと紅い光を瞬^{またた}かせる。

呼ばれているような気がして、輝夜は今度こそ迷わず手に取った。右腕に装着すると最初から自分のものだったように自然と収まり、付けたところから温かいものが身体に伝わる。

智史と同じものかと思いきや、彼人には天使の羽を持つ龍が彫ら

れていた。

ちようと龍が鉤爪で握る宝玉らしき部分に窪みを見つける。

そっぴやこの窪み、俺と智史の持つてる玉と同じ大きさだよな。
もしかして埋めることができたりして……？

同じことを考えていたのか、智史は漆黒の玉を取り出し窪みに近づける。

輝夜も首に掛けていた紅い玉を窪みに埋めてみようとした。

その時、吸い寄せられるように玉が窪みに力チリと埋まり、それぞれの玉が輝きを放ちだした。

余りの強い閃光に部屋中の人間達が眼を覆う。

閃光の洪水が止んだ頃には、先ほどの光が嘘のように玉は穏やかな光を宿すだけだった。

「やはり……二人が『転生者』だったのか」

どこか悲しげに呟く結城博士に二人は我に返る。

「転生者って、いったいどういうことなんだよ。

まさか輝夜まで連れてくるように言ったのは……！」

「察しの通りだ、智史。

お前達が転生者であつた以上、これからは否応無しにでも神魔に関わってもらねばならない」

「神魔？ 何だよ、それ。だいたい僕達はこれから受験で忙しくなるんだよ？

勝手に訳のわからないことに巻き込まないでほしいな。そうだろう、輝夜」

いきなり話を振られて輝夜は慌てた。

ただでさえ転生者だの神魔だの、新しい情報に脳のスペックが付いていこうと必死なのに。

どうしよう、頭から湯気が出そうです。

助けを求めるように、傍にいたもう一人の白衣の男性に眼を向ける。

彼も二人の高校生達を庇うように結城博士の元にやってきた。

「博士、だから言っただでしょう。僕は反対だと。

彼らにはごく普通の高校生として過ごす権利があるんです。

それを僕達の都合で振り回す訳にはいかない」

「桐嶋君、この期に及んでまだそんなことを……。

彼らが転生者であるからには、否応無しに神魔との戦いに巻き込まれてしまっただぞ！

奴らが彼らの存在に気付くのは時間の問題だと言っのに」

どうやら桐嶋という人は俺達の気持ちを汲もうとしてくれてるようだ。

だけど智史の親父さんが言うに、俺達はしんまとかいうのに狙われてるらしい。

と、言うことは……――

「俺達には身を守る力が必要ってことですか？ 違いますか？」

「ああ……その通りだよ、星川君。

勝手を言わせてもらえば、君達に人類の平和を守るため闘ってほしい。

実質神魔に対抗できるのは、君達『神話の人』しかないんだ！！」
『神話の人！？』

まるで某戦隊ヒーロー誕生編のような急展開に二人は驚愕する。
待ってくれ、これって爽やかな学園ラブコメじゃなかったっけ？

（そんな設定はありません）

「ちょーおおおつと待ってください！！

何でいきなり個人から人類レベルにまで話が飛んでるんですか！？
もつとわかりやすく説明してください、頭が爆発しそうですっ」

「そうだよ、父さん！

僕は兎も角、輝夜の頭が爆発したら親御さん達に何て言い訳すればいいのか…」

「おい、お前楽しんでるだろ？この状況を思いつきり掻き回そうと
してるだけだろ！？

少しは真剣に考えようよ！下手したら俺達、受験どころじゃなくなるぞー！」

「その前に命の心配しようよ」

至極最もな突っ込みに返す言葉もない輝夜。

こんな状況でも冷静な親友に、少しは慌てるよと思いつながら口元
を引きつらせる。

二人の漫才に突っ込みすら入れず、静かに待つ結城博士達もある
意味凄いが。

このままでは埒が明かないと結城博士が話を切り出そうとしたそ
の時――。

突如研究所内の巨大スクリーンに異様な風体の男が映し出された。
狼に似た顔に口元からは鋭い牙が覗く。体色は闇よりも深い漆黒。
その二メートル近い体躯を己と同じ闇色の鎧で包み込んでいる。
感情の見えないアイスブルーの眼が輝夜達を見下ろした。

「約束の時が来た。Drユウキ、お前の返答を聞こう。

お前達人類が、我ら神魔一族の支配を受け入れるか。それとも抵抗

するか」

「受け入れた場合、どうなる？」

厳しい態度で交渉に臨む博士に、神魔と名乗った男は無情にも残酷な返答を寄こした。

「人類は神魔一族の奴隷として、終世仕えることになるう。」

光栄に思うがいい、貴様ら劣悪種でもこうして生かしてやるうと言
うのだからな」

「ふざけるな！！ 我々はお前達の玩具ではない！」

「なるほど……それでは返答は」

「NOに決まってるだろ、おっさん」

第三者の乱入に神魔と結城博士達は声の主へ視線を注ぐ。
輝夜だった。

「おい、その狼男！黙って聞いたりや劣悪種だなんだって随分な
言い様じゃねえか。」

お前みたいな性悪野郎に扱き使われてたまるかよ！！

毛皮にするぞ、着ぐるみが！」

「小僧、言わせておけば……！！！」

青筋を浮かべる狼男に輝夜は挑戦的な態度を崩さない。

その堂々たる姿に、普段の彼とは別人のようだと智史は眼を見張
っていた。

「交渉は決裂だな、ユウキ！ 我らを愚弄したこと後悔させてやる
う。」

出でよ、屍鬼達！ ここを奴らの血で染めろ！！」

研究室の扉側から黒い雷が発生する。雷から異形の魔物が次々と姿を現した。

数はざっと数えて十五体か。

ふしゅうと不気味な声を上げる鬼のような姿で無防備な輝夜達に迫りくる。

「せいぜい見苦しく這い蹲^{つくば}るんだな。

仮に生き残れたとしても、貴様らに待つは地獄よ。

大切な者達が奪われる様を、自らの無力さを嘆きながら見てるがい！ クッハハハハ……」

陰惨な高笑いを上げながら神魔は画面から姿を消した。

それと共に画面の照明もプツンと立ち消える。

「すいません、俺のせいで」

「君が謝る必要はない。何れにせよ、神魔達は最初からこうするつもりだったのだから」

「それよりも今は、どうやってこいつらを倒すかだろ？」

「博士……、智史」

責任を感じる輝夜に二人は励ますように頷く。

周囲を見渡せば、皆それぞれに箒やら椅子を手に持ち、臨戦態勢を整えていた。

「逃げてください、結城博士。僕達だって、とうに戦う覚悟はできてるんです！

早く息子さん達と一緒に！」

「何を言ってるんだ、桐嶋君！ 何の力もない君達をここに残せるか！！」

激昂する結城博士に、後方の女性研究員が声を荒げる。

「行ってください！！　ここは私達に任せて。

貴方ひまうがには、彼らを守る義務があります」

「日向君……」

「私達は、大丈夫ですから」

未知の恐怖を前にしながらも、彼女は穏やかに微笑んだ。
輝夜の中で、その笑顔が死ぬ前の母と重なる。

「嫌だ……」

知らず、彼は口に出していた。

眼鏡越しの眼が鋭くなる。紅茶色の眼に強い光が宿った。

「もう死なせたくない、誰も。

そんなの……そんなの嫌だああああ！！」

腕輪に宿る宝玉が紅い閃光を放った。

輝夜の瞳の奥で紅い火花が走り、その眼が紅玉のように変化する。

「獣神覚醒じゅうしんかくせい！！」

無意識に一つの言霊を発し、輝夜は炎に包まれた。

炎は鎧のように輝夜を包み込む。輝夜はその中で龍の咆哮を聞いた。
た。

異形の者達は凄まじい閃光に眼を背けよるめくことしかできない。
閃光が収まると共に、炎の中から一人の騎士が姿を現した。
姿こそ戦隊ヒーローに近いが、その身体は頑丈なプロテクターの

ようなもので覆われている。

その面は龍の顔をかたどっており、頭部の側面には天使の翼のようなものが付いていた。

カツンカツンと音を立て、真紅の騎士が進み出る。

屍鬼達には見覚えがあつた。

忘れもしない。神話の時代に自分達を蹴散らし、勇猛果敢に守護獣神を率いたあの神！

「きつ貴様は……まさか！？」

輝夜は皆を守るように屍鬼達の前に立ちふさがる。
そして右手を天に掲げ、左手を腰の横に構え名乗りを上げた。

「我は勇猛なる炎の騎士、マイスレッド！！
貴様らの野望、ここで潰えさせてもらおう！」

一時は恐れを成したものの、積年の恨みを果たさんと鬼どもは次々に襲いかかってきた。

「ハッ！ハッ、トアッ！！」

圧倒的不利な状況の中、動じることなく輝夜は一体ずつ相手をする。

鳩尾、頭蓋、顔面に容赦なく拳を叩き込み、突進してくる鬼を軽く跳躍し避ける。

並みいる敵の攻撃を受け流し、止めに回し蹴りで一気に雑魚を片付けた。

だが彼の攻撃を掻い潜り、背後に回っていた屍鬼が鋭利な爪で輝夜を狙う。

「輝夜！」

智史の悲鳴が上がる。

だが奴の攻撃を予測していたのか左手で爪を掴み、逆に背負い投げで蹴散らした。

「絶・龍炎刃！」
ぜつ・りゅうえんじん

手に炎が集まり刀へと姿を変えていく。

集まった炎が四散すると、紅い刀身の日本刀が姿を見せた。

柄を握り締め軽く跳躍し駆け出すと、風のように縦横無尽に残る敵を切り裂いていく。

切り裂かれた所から炎が噴きあげ、敵は灰になり砂のように崩れさつていった。

倒し終えるのと同時に輝夜の変身が解ける。

呆気ない終わり方に一同は拍子抜けし、緊張が解けたことでその場に座り込んでいる人もいた。

一番最初に我に返った智史が急いで輝夜の元へ駆け寄る。

「輝夜！ 大丈夫か、怪我は！？」

「おい落ち着けて。それよりあの格好に対しては何も突っ込まないんだな」

「え？ ああ、そのこと？」

確かに驚いちゃいるけど、何で父さんが僕達を呼んだのかって理由はこれでわかったし。

もしかして、僕も君みたいに変身できるのかも……」

「変身、かあ……まさか俺がこんなヒーローみたいなことする破目になるなんて」

我が身に起きたことが信じられず、輝夜は頭を横に振る。

それでも、今度こそは誰も犠牲にせず守り切れたことに安堵していた。

もう大切な人が死に逝く姿は見たくない……。

改めて守り抜いた人達の笑顔を胸に刻む。

部屋こそボロボロだったものの、和やかな空気が彼らを包みこんでいた。

だが、けたたましいサイレンと共に入ってきた通信により一時の平和は破られる。

ツーツー……こちら桜ヶ丘支部！本部、応答願います！

「こちら本部の結城だ。いったい、何が起こった？」

神魔が桜ヶ丘小学校へ教師と生徒数名を人質に立てこもっている模様。

なお、警察や機動隊は神魔の衛兵達相手に苦戦を強いられてるようです。

対神魔部隊の要請を願います！

「……わかった、すぐに出動させよう」

それを最後に通信が切れた。

「父さん、対神魔部隊というのは」

「お前達のことではない。我々が独自に作り上げた防衛隊だ。」

しかし、神魔との最初の交戦の際ほとんどの隊員が倒され、残る僅かなメンバーも重症を負い動くことができない状態だ」

「じゃあ僕達を呼んだのは……」

「神魔を倒せるものは、伝承に残されている守護獣神しかない。だから僕達は該当する転生者を探し求めていたんです」

智史の問いに桐嶋が答えた。

一方、輝夜は通信で聞いた小学校の名前に血の気が引くのを感じた。

桜ヶ丘小学校は義弟の優希が通っている所だ。

おまけに今日はクラブ活動の日。丁度今の時間はそうじゃないか！

慌てて輝夜は出口へ向かおうとする。

それを智史が押し留めた。

「待て、輝夜！ 君一人でどうするつもりだっ」

「離せよ、智史！ 弟がっ…優希がまだ学校にいるんだよ！」

「それでもっ、君一人を行かせる訳にはいかない！

僕も連れて行け。僕も力になれるかもしれない」

「智史……」

複雑な感情を宿した眼を向ける輝夜に、智史はふっと力強い笑みを浮かべる。

「別に僕は、一言も戦わないとは言っていないぞ」

「……わかった。」

智史、俺に力を貸してくれ！」

「そっこんなくっちゃ！」

共に頷き戦う決意を固める二人の視界に黄色の閃光が走った。
振り返ると残る腕輪の一つが輝きを放っている。

「持っていったってやるといい」

「父さん」

「きつと、役に立つだろう」

導かれるように腕輪を手に取り、智史は懷に大事にしまう。

「さあ、行こうか」

「おう!!」

今度こそ二人は振り返らずに、研究室を後にした。

二人の後ろ姿を結城博士達は祈るように見送ることしかできなかった。それでも、人類の命運をこの若き戦士達に委ねるしかなかった。

「頼んだぞ……『マイスマン』!!」

今ここに、宿命の齒車は回り始めた。

第1話 完

第1話 目覚めよ、神話の人！！ パート3（後書き）

いよいよ始まりました、獣神戦隊マイスマン！

え、変身してるのレッドだけじゃんって？

すいません（汗）ストーリー展開の上で一人が精一杯でしたー！

次回はたぶん二人変身することになるでしょう。

もう一人は誰かって？それは次回のお楽しみ（笑）

ちなみに名乗り文句で、あえて神ではなく騎士と名乗らせましたがそれは彼ら自身が神としての自覚がないことと、武人としての性格を強調してこれに決めました。

では、ここまで読んでくださりありがとうございました！！

第2話 いきなり結成！？獣神戦隊 パート1（前書き）

お待たせしました！

やっとレッド以外の戦士が誕生します。

第2話 いきなり結成！？獣神戦隊 パート1

暗い石畳の廊下を、一人の男が忙しく掛けていく。

ようやく永きに渡る封印が解け、神魔一族の居城は海底からの浮上を遂げた。

邪魔な人間どもの干渉に合わぬよう、バリアーを城の周囲に巡らすことで何者も気付くことはない。

一度こそは見破られたものの、真の機能を回復した城を見つけることなど不可能。

今の人類の文明レベルでは打つ手などないだろう。

にも関わらず、男のアイスブルーの眼には焦りが生じていた。狼に似た容貌ではあったが、人間に近いからかその焦燥を見て取ることは難くなかった。

——馬鹿な！ 奴の……天龍王の波動を感じるだ！？

奴は先の大戦で消滅したはず！

だが、あの気は確かに奴のものだった。

「確かめねばなるまい……」

「何を確かめるんだい、お前さん？」

一人呟く言葉に、甘く絡み付くような声が返ってきた。

上から桜を散らし、十二単を簡素にしたような衣裳の女が舞い降りてくる。

蒼に近い黒髪が風圧で夜闇のように広がる様は、美しき化生そのもの。

血を吸ったような赤い唇は妖艶に微笑み、氷のように冷たい眼元は嗜虐の色を映している。

度を越した白い肌は、美しさを通り越し死人を思わせた。そして

際立つて異様であるのが、頭部から生えている金色の獣耳。まさしく狐のものだ。

舌打ちせんばかりに男は不快感を顕わにした。

「何の用だ、女狐。アスラのところにいるはずのお前が何故……」

「おやおや、相も変わらず冷たいこと。お前さんとして狼じゃないかえ？」

せめてダキニと呼んでおくれよ。全く、昔からわらわにだけ冷たいのだから」

「御託はいい。……何のようだ？ アスラからの伝言なら後にしろ、俺は忙しいんだ」

「ふふん、あの守護獣神が復活したと言ってもかい？」

ダキニの一言に、男は愕然とする。

やはり気のせいなどではなかったのか！

顔色を変えた男をダキニは面白そうに見やる。どうもこの女、仲間内であれ他人がうるたえる様を見るのが好きらしい。仕方なしにダキニを視界に入れ、問いただす。

「どういう事だ？ 先の大戦で奴らは我々を封印し、力尽きたはず。まさか生き返ったのか！？ 我々でさえもできなかったことを……」

「無論、生き返ったわけではないぞ、ヴァナルガ。

あ奴ら、転生の儀を行っていたようじゃ。厄介な事に人の姿に紛れ込んでおるとな」

「そうか……！ 獣神どもめ、我らの封印が解けることを見越し、転生してきたのか……！

忌々しい奴らよ！ どこまでも我らの邪魔をするかつ」

盛大に舌打ちすると、ヴァナルガはダキニを呼び寄せる。

「気が変わった、今すぐアスラの元へ行くぞ。
今度こそ奴らを冥府へ送ってくれるわ！」

見ておれ、獣神ども……特に天龍王！
貴様だけは楽に死なせはしない！！

人生何が起こるかわからないもんだ。
たった十七年の人生だが、俺の肩書に正義のヒーローという信じ
がたいものが付いてきた。と言ってる場合じゃなく。

「輝夜、裏道通って先回りしよう」

「ああ……このままじゃ間に合わねえしな」

一刻も早く辿り着かんと輝夜と智史は全力で自転車を飛ばしていた。

それはもうフルスピードで。途中担任とすれ違ったが、疾風の如く駆け抜けていった彼らに気付くことはないだろう。

現在目的地の桜ヶ丘小学校には、現在教師と生徒数名が神魔と名乗る謎の組織によって捕らわれていた。その中には輝夜の義兄弟である優希も含まれているかもしれない、彼は気が気でなかった。

もう家族は失いたくない……、もう誰にも自分と同じ思いはさせたくない。

眼鏡に隠れる険しい表情に気づきながらも、智史は何も言わず前方に眼を向けていた。

小学校まであと少しという所まで来た時、二人の元に見慣れた姿が前方から現れた。

「あつれえー？ 星川と結城じゃん。二人とも誘拐事件の事聞いて

ただろ。

何でほつつき歩いてんの？」

少し咎めるように、世那は眉根を寄せ軽く睨む。だが焦ってる輝夜達に効果はなかった。

軽く苛立ちながら輝夜は早口で捲^{まく}し立てる。

「悪いけど、今お前と話してる時間ないんだっ。明日にしてくれ」

「そういう事。じゃあ……」

「待ちなよっ、そっち小学校の方じゃない！ 今、警察が来て大騒ぎになってんだよ！？」

二人の行先に気付いた世那が慌てて止めに入った。
迷惑そうに智史は白けた眼を向ける。

「そうだけどそれが何？」

僕ら急いでるんだ、話なら後でもできるだろ——つつ……！？」

突然の衝撃に、智史は言いかけた言葉を飲み込んだ。

見れば、彼の懷にしまっていた腕輪が熱を発して、暖かい黄色の燐光を放っているではないか。

同じタイミングで、世那が二人の身につけている腕輪に視線を移した。

「あ、二人ともそれ何？ お揃いかよ。」

てか、すっごいお洒落！ ねえ、どこで買ったの？」

「え、いや買ったわけじゃなくてこれは……」

「買ったんじゃないならどうしたの？ 誰かからの貰いもの？」

矢継ぎ早に繰り出される質問に辟易^{へきえき}する親友を差し置き、智史は

突然光り出した腕輪に注意を向けていた。世那が近づいてから反応を示したように思ったが、実際どうなんだろう。

もしかという気持ちと自分の好奇心を満たすため、智史は腕輪を取り出し、口論真つ最中の彼女の側へ近付ける。

——予感は当たった。

彼の予測通り世那に近づけた途端、腕輪から眩い黄色の閃光が迸った。

余りの眩しさに二人とも口論を止めて眼を塞ぐ。智史も閃光が止むまで眼を瞑っていた。

先ほどの光の洪水が嘘のように止んだ後、世那は超常現象に遭遇した人間のお決まりパターンな反応を返してくれた。眼を丸くし、口をパクパクさせながら震える指で腕輪を指さす。

だがすぐさま好奇心が勝り、面白い出来事としてインプットしたのか物凄いハイテンションで智史に迫ってきた。

「うわあー、それいったい何!?

いきなり腕輪がピカーツって光ったよね? そうだよね!」

「……白鳥。お前さ、何か石みたいな持ってないか?

丸い形でビー玉ぐらいの大きさの、生まれた時握ってましたとかそういうエピソード……ない?」

「何で結城がそれを知ってるの?」

「俺と智史がそうなんだ。白鳥、今その玉持ってるか?」

「うん。これの事?」

輝夜達に見せるように、制服のポケットからパワーストーンを入れる袋を取り出す。取り出した小さな袋の中に玉は納められていた。話に寄れば、普段からお守り代わりに身につけていたらしい。

輝夜が紅、智史が漆黒に対し、世那は琥珀にも似た黄色の玉だった。石の奥でほのかな光が瞬いている。智史は腕輪を世那に差し出

しながら頼んだ。

「それをこの腕輪の窪みに填めてみてほしいんだ。いいかな？」

「もし填まっちゃったらどうするの？」

「この腕輪を白鳥にあげる」

「えっ、マジですか？」

「うん、大マジだから早くして！ こっちも急いでるから」

その言葉に世那はきらりと眼を光らせる。先ほどから強く腕輪に惹かれていた世那は一二もなくその提案に乗った。

腕輪には中国の神である麒麟みたいな動物が彫られており、その胴体部分に窪みを見つける。

祈るように世那は慎重に玉を填め込んでみた。カチリというこ気味よい音がし、同時に黄色い玉が柔らかい光を宿す。まるで世那を主として祝福してるようだ。

「決まりだな」

もう一人の『転生者』が見つかり、智史は嬉しそうに口元を綻ばせる。

輝夜も新たな戦力になるかもしれない人物が世那だったことに喜ぶ反面、女の子を戦いに巻き込むことに抵抗があった。

複雑な表情で世那を見つめる。

「何だよ、星川。さっきからじろじろこっち見て。

何か言いたいことがあるなら言えば？」

だがそれには答えず、彼は智史に声を掛けた。

「……智史、白鳥は家に帰らせよう。」

こいつまで巻き込む訳にはいかない。俺達だけで十分だ」

「輝夜……。だけど、彼女も僕らと同じなんだ。

今はよくても、いずれ巻き込まれるかもしれない。

それなら今のうちに現実を突きつけた方がいい」

「智史、だが」

「ちよつと、人を置いてさつさと話を進めないでくれる？

あんた達がどんな事に首を突っ込んでるか知らないけど、私は付いてくよ」

「白鳥っ」

煮え切らない輝夜の態度に、世那が痺れを切らし口を開いた。

彼女の思わぬ返答に、苦虫を噛み潰したような顔をする。

「お前、わかつてんのか？ 今から俺達がすることはとっても危険なことなんだぞ？

空蓮寺との喧嘩とは訳が違うんだ。下手すりゃ死ぬぞ」

「なら尚更ほつとけないよ！

生憎、親しい仲間が危ない目に遭うのがわかってほつとける程、図太くできてないんでね」

「……………」

「だんまりを決め込むってわけ？ ならOKってことで、いいね？」

どうあつても付いていく意思を変えない世那に輝夜が折れた。

「……………わかったよ。連れていく。でも約束してくれ。危険が迫ったら、何があつても逃げるって」

「フウーわかったよ。ただし、あんた達も連れて帰るって条件付きでね」

にやりと不敵な笑みを浮かべる世那を前に、敵わないと二人は

苦笑するしかなかった。

あれから自転車で一気に駆け出し、小学校に辿り着いたはいいが校門前は警官によって封鎖され、報道関係者と野次馬の群れが集まっているため、中の様子を窺うことすらできなかった。

このままでは中に入ることができない。

「仕方ない、裏ワザを使うか」

「裏ワザ？」

輝夜の一言に二人が反応する。

「一先ず学校の裏山まで廻るぞ！ 話はそれからだ」

学校の裏山は校門前から半周した程の距離にあった。ここはわんぱくな子供らにとって絶好の遊び場になっていて、大人でもたまにバードウォッチングなどで訪れる人が後を絶たない。

しかし今、ここは戦場だった。

輝夜の提案で裏山から侵入することを聞かされた智史と世那は、彼と共に裏山に入っていた。

そこまではいい。しかし神の悪戯か悪魔の気紛れか、そこで彼らは警察じゃなく神魔の屍鬼達と鉢合せしてしまった。最悪だ。

「何なの、こいつら。鬼みたいな姿して、それに突然現れたしっ」

「こいつらが僕達を巻き込んだ神魔とかいう奴らだ」

「神魔？ なにそれ、シヨッカーみたいなもの？」

「あながち間違いじゃないよ。ここに仮面ライダーはいないけどねっ。ほらこっち！」

世那の手を引き、襲いかかる神魔を交わす。二人が居た場所の木

がへし折れた。

自分がどんなに危険なことに首を突っ込んだのか、今更ながらに理解した世那は背筋に冷たいものが流れるのを感じる。

はっと輝夜の身の安全が気になった彼女は、慌てて彼の姿を追った。

彼女の心配を余所に、敵の攻撃を見切り絶妙なタイミングで拳を叩き込む姿に、世那は啞然とする。

沙夜子の言葉が耳に浮かんできた。

『本当は強いはずなのに……』

まさか、これの事なの？沙夜子が言いたかったのって……。
だとしたら、なんて鋭い子なんだろう。あの子はこの事を知らないはずなのに。

違う、違い過ぎる……。学校とは余りにも。気が小さく、喧嘩すらできなさそうに見えていた星川が、こんな化け物を相手にするなんて。

「まいったな、いきなりこいつらとかよつ。二人は下がっててくれ！」

突然声を振られ、世那はビクツと身体を揺らす。智史は庇うように世那を背後に隠した。

横目で確認すると輝夜は左腕を身体の横で構え、ブレスの付いた右腕を前に突き出した。

右の掌を押し出すように開く。

「獣神覚醒！」

紅い閃光と共に輝夜の身体が炎に包まれる。炎から右手が現れる

と、身にまとっていた炎が四散しその姿を見せた。紅の龍をかたどった騎士が拳に炎を込める。

その姿に、色めき立った屍鬼達は邪魔者を排除せんと一斉に飛びかかってきた。

「トアッ！」

軽く跳躍した輝夜は、上空から拳に込めた炎を何発も打ち出した。弾丸の嵐が屍鬼共へ雨の如く降り注がれる。

元々大した知能は持ち合わせていないのかまた弱いのか、屍鬼達はなす術もなく炎に焼きつくされていった。広範囲に渡る攻撃で大半は倒せたが、木々の影から次々と刺客が送られてくる。

「くっ、これでも……喰らってる！」

周囲を取り囲んできた敵に、連続で回し蹴りを繰り出す。蹴り上げる度に紅い残像が走っていく。

尽く向かい来る敵を退けるが、次から次へと湧いて出てくるためキリがない。

「うわああああ……！」

背後から風を切るような悲鳴が上がった。智史と世那が屍鬼に捕らわれている。

首を締め付けられ、双方とも必死でもがくが力が及ばない。

「この野郎おっ、二人を離せ……！」

必死で二人の元へ向かうも、他の屍鬼どもに阻まれ辿り着けやしない。

炎を右手に集めようとするも、攻撃の隙を与えぬよう妨害して、
るため必殺技すら打てずにいる。

どうしたらいい！？このままでは二人の命が……！

目前には首を絞められ顔を歪ませる二人の姿が。

あと少し、あともう少しで手が届くのにつ。

「くっそおお！ どけえええっ！！」

身体中から一気に炎を吹き上げ、輝夜は襲いかかる異形の群れを
焼き尽くした。

息つく間もなく駆け出し、二人を捉えていた屍鬼を力づくで引き
剥がす。

崩れ落ちた二人はゲホゲホと咳きこむが、命に別状はないようで
安心した。

仲間を倒されたことを悟ってか、残された神魔兵は標的を輝夜に
変更。一気に距離を詰め、鋭い爪を振りかざしてきた。他の屍鬼達
と違うのか体色は青く、力も速さも上回っている。

これは倒すのに手間取るかもしれない。頭の片隅で危機感を覚
えながら、この状況を打破することだけを考える。紙一重の差で攻
撃を避けるも、次第に輝夜の限界が近づいてきた。

ずっと避け続ける輝夜、だが足もとがよろめいた瞬間を屍鬼は見
逃さなかった。素早く懷に近接し、爪で切り裂いていく。

「ぐああああ！！」

切られた箇所から火花が散り、輝夜は力なく倒れる。その背を容
赦なく屍鬼が踏みつけた。

苦悶の声を上げ、激痛に耐える輝夜。その様を智史達は悲痛な思
いで見る。

「まずいつ、このままじゃ輝夜が！」

「でもどうする？ 私達が行っても足手纏いになっちゃうよ！」

今にも飛び出しそうな智史をかるうじて世那が抑えた。

親友の危機に、何もできない無力な自分に腹が立つ。苛立ち、悔しさから彼は奥歯を噛み締めることしかできない。

それは世那も同じだった。自分から付いていくと言っておいてこの様だ。学校では助けることができて、こんな化け物相手じゃ何もできないなんて……。

「どうして……っ、どうして僕達も戦えないんだ！？」

どうして……！？ 戦う力が欲しい。

「お願い、力が欲しいの！」

あいつを……星川を助けたいんだ！！」

助けたい！ 守る力が欲しい。

強い意志に応えるように、智史の宝玉が黒に、世那の宝玉が黄色に輝きだす。

溢れ出る光から二人の身体に熱いエネルギーが流れ込んできた。

智史の身体が紫をおびた漆黒の光に、世那は黄色い光に変わる。

二人の脳裏に一つの言霊が囁きかけた。迷うことなく二人は、声の限りに叫んだ。

『獣神覚醒！！』

二色の光が爆発するような勢いで、一瞬二人の姿を消し去る。

漆黒の光と荒ぶる流水が青年を包み込むと、玄武らしき姿へと形げんぶ

作る。

片や少女を包む黄色い閃光は輝きを増していき、彼女自身を地上の太陽に変えた。

太陽に似た光は麒麟となり、虚空へと舞い上がる。

「ぬううう……何という光だ！
眼が焼けるようだっ……ううっ」

余りの苦痛に、神魔兵は輝夜をいたぶることを忘れて眼を覆う。
輝夜も霞む意識の端で二体の獣の咆哮を聞いた。激痛に苛まれる身体を押して、なんとか首だけを仲間のいる先に向ける。

閃光の渦が収まると、そこには見慣れぬ二人の騎士が立っていた。
一方は漆黒のスーツに鎧のようなプロテクターを装備し、面は亀で頭部の側面には蛇が絡み付いている。最後は黄色のスーツの騎士だが、プロテクターの他にスカートも付いていた。

面は麒麟をモチーフにしたもので、頭部からは鹿に似た角が生えている。

いずれも輝夜と似たような出で立ちだったが、纏う色と形状は異なっていた。

「輝夜！！」

敵が油断している隙に二人は彼の元へ駆け寄り、その身体を脇の下から抱え上げた。

「智史……、白鳥なのか？」

漆黒の騎士と黄色に輝く騎士は強く頷く。
世那は白い右手のグローブを輝夜の胸に当てると、柔らかい光を

注いだ。輝夜の身体の中に熱いものが流れ込む。熱が引いた時には身体傷は完全に癒えていた。

初めて目の当たりにする治癒術に残る二人は感心する。

「怪我が治ってる！」

「よくわからないけど、頭のどこかでこうするもんだって浮かんで」「せっかく盛り上がってるところ悪いけど、敵さんは待ってくれないみたいだよ」

智史の視線の先に今だ倒せていない屍鬼が立ちはだかっていた。屍鬼は唸り声を上げ、剣のように爪を構える。

「さっきまでは多勢に無勢だったが、今度はそうはいかないぜ！」

輝夜の言葉を受け、世那と智史も続ける。

「そうだ！ 私らの本気…見せてやるよ！！」

「と言う訳で……第二ラウンドと行こうか？」

両者の間を、戦いを告げる一陣の風が吹き抜けていった。

第2話 いきなり結成！？獣神戦隊 パート1（後書き）

— 先ずはここで区切りました。

義弟救出編はパート2になります。

相変わらずギャグ少なめですが、3話では多めにできたらなあと思
っています。

では、次回をお楽しみに！

第2話 いきなり結成！？獣神戦隊 パート2（前書き）

大変お待たせしました！今回は戦闘多めです。

第2話 いきなり結成!? 獣神戦隊 パート2

辺りの気を吸い上げ、青い屍鬼は爪を強靱な刃へと変えていく。それを阻まんと対峙する輝夜達が一斉に掛けていった。今なら完全に強化されていないため、途中で気を遮断させればこちらの勝ちだ。

「絶・龍炎刃!!」

僅か数秒で右手に焰を召喚し、日本刀を形成させていく。目前に迫る輝夜に、屍鬼の方も仕方なく中途半端な鉤爪で応戦する。その隙を逃がさず、後ろに回り込んでいた智史が両手に水を集める。

「すいじゃれっばそう水蛇裂破槍!!」

槍へと姿を変えた水は風を薙ぎ、一直線に屍鬼の心臓を貫いた。

「ぐうおおおお!!」

凄まじい咆哮を上げ風穴から火花を散らし、神魔兵は倒れ伏した。遺骸は灰になり跡形もなく崩れ去る。

一先ず、これで先兵を片付けたが、肝心の人質は未だ捕らわれたままだ。

神魔との戦闘で思わぬ時間を取ってしまった。

一刻も早く人質を救出するため、三人は一気に裏山を駆け下りていった。

不思議な事に、裏山からげた箱周辺に至るまで神魔はおろか、警察官の姿さえも見当たらなかった。

だからと言って油断はできない。校舎内に侵入した三人は辺りに気を付けながら慎重に歩を進めた。

一階から二階まで汲まなく調べたが、未だに人質の姿は見えない。むしろ何の襲撃もないことに気持ち悪さを覚える。

三階への階段に差し掛かった時、智史は二人を呼びとめた。

「待ってくれ、ここで大切な話があるから」

「大切な話って？ 別に今じゃなくてもいいんじゃないの。早く子供たちを助ける方が先でしょ」

世那の言葉に輝夜も強く頷いた。それでも智史は話を続ける。

「僕が言いたいのは、これからお互いをコードネームで呼び合うことについてだ。」

神魔から僕達『転生者』は眼を付けられてるらしい。

今回は成り行きで変身してしまったけど、これからは変身する時も正体がばれないように気をつけなきゃならない。ましてや名前で呼び合うなんて御法度だ」

「そっか！ 俺、ついつい二人を名前で呼んでたっけ……。」

じゃあこれからレッド、ブラック、イエローと色で呼び合うのはどうよ」

「うん、いいけど。それにしても星か……レッドってホント特撮オタクなんだあ。」

通りで戦い慣れてると思った。どうせ家で未だにヒーローごっこしてるんでしょー？」

「おいコラ待て！ 特撮オタクだってことは認めるが、さすがにヒ

「ローこつこするほどガキじゃねえぞ！」

「ほら二人とも！ ルールが決まったならここで油を売ってないでさっさと行く！」

非常事態に学校モードに入っていた輝夜と世那を智史が窺^{たしな}めた。

当初の目的を思い出し、二人は恥ずかしそうに俯き反省する。

それに領いて智史は二人を促し、三階へ向けて駆け上がった。いっ

狭い教室の中、九、十二歳までの子供らが担任の青年と身を寄せ合い息を殺す。

廊下側の窓には黒い異形の影がガシャンガシャンと不気味な金属音を立て、教室の前を通り過ぎようとしていた。

夕日が教室内を照らし、彼らの焦燥に駆られる顔を赤く染める。その中に、輝夜の義弟、優希はいた。友人と共にガチガチ鳴りそうな歯を噛み締め恐怖を押し殺す。

影は一定の速度で、教室の後ろ扉付近へ近づいてきている。

あともう少しだ。ここで気付かれなければ、生きて帰れる！

僅かながらの希望を掛け、皆祈るしかなかった。

影が教室の後方扉前まで来たとき、足音が止まった。一気に教室内の緊張が膨れ上がる。

無情にも彼らの願いは届かなかった。

影から陰惨な嘲笑が漏れる。その声は教室中に木霊し空気を震わせた。

馬鹿な、あの化け物は外にいるはず。

しかし聞く者の背筋を凍らせる嗤い声は中で響いているのだ。

突然、ぴたりと嗤い声が止んだ。

爆音と共に扉が吹き飛ばされる。黒焦げになった扉は砕け散り、入って来た怪人によって跡形もなく踏みつぶされた。

「ひいっ!」

優希の後ろの同級生が悲鳴を上げた。

上級生達も絶望を映す暗い眼で力なく化け物を見る。

僕達もこんなふうになされてしまうのか……。

原型すら残さぬ扉だったものの残骸に眼を移し、優希は異常な恐怖を前に身体を固くする。

全員が絶望に打ちひしがれる中、怪人は不調和な金属音を立てて迫ってきた。

トカゲを模した姿に半分以上が機械化された身体。鋭い鉤爪は足と同じく白金で覆われ、軽く腕を振るだけで簡単に人の首を落とせるだろう。

不意に怪人は右手からチェーンを伸ばし、優希を捕らえた。

「藤堂!」

「ゆづきい——!!」

成す術もなく捕らわれてしまった少年を前に、教師と子供らは叫ぶことしかできなかった。

無力な人間を嘲笑いながら、トカゲ怪人は少年の首を締めあげる。

「うっうっ……」

「やめろおおお——！！」

ギリギリと音を立て締め上げられる生徒を前に、青年教師が立ち上がった。

震える手で箒を握り締め、雄叫びを上げながら特攻をかける。

「邪魔だ、人間風情があ！」

「がああっ！」

箒で叩きつけるも身体ごと片手で持ち上げられ、壁に思いっきり叩きつけられてしまった。

衝撃で強く打ったからか、力なくうずくまることしかできない。

「先生！！」

「騒ぐな、小僧ども！ 焦らずとも、一人一人ゆっくり首を落としてやる。」

人間と言う種を絶滅させるには、ガキを殺るのが手っ取り早いからなあ。

手始めは……こいつだ！」

人間達の恐怖する様を楽しむように、怪人は優希の首を落とそうと一気に力を込めた。

徐々に優希の視界が狭まっていく。もう……駄目だと薄れゆく意識の中、廊下から飛んできた紅い光が視界の端を走った。

光が通り過ぎると共に、優希の身体が床にくず折れる。

傍には、少年の首を掴んでいた怪人の右手が転がっていた。

「ギイイイ——！！ お、俺の腕がああ！」

焼けるような激痛に吠える怪人を、さらに紅い稲妻が貫く。貫かれた箇所から激しく火花が散った。

更なる攻撃を避けようと、慌てて優希の傍から離れる。

「そこまでだ、神魔!!」

光線銃を構え、廊下から三色の戦士達が躍り出た。

怪人こと神魔を牽制したのは紅いプロテクターを身に纏う戦士だった。

ヒーローが持つ銃に似たものをしまい、すぐさま優希の傍へ駆け寄る。

咳きこみながらもしっかり意識を保っていた彼は、自分の身体を支える紅い戦士を見つめた。

龍を象るマスクからはその素顔を垣間見ることはできない。大好きな戦隊ヒーローに似たその姿に、彼の鼓動が跳ねあがる。

まさか……まさか本当にいたの？

悪者から助けしてくれるヒーローが、テレビの中だけのヒーローが

……!

優希の動揺を知ってか知らずか、紅い戦士こと輝夜はふわりと彼の頭に手を置いた。

例え見えなくとも、マスクの下で戦士が優しい表情を浮かべていることが、優希には何となくわかった。

「もう……大丈夫だぞ」

低いが温かみのある声が少年を包みこむ。

どこかで聞いたような声だったが、優希は何も考えず頷いただけだった。

「さあ、行くだ！」

「ありがとう。……レッド！」

しばし悩んだ末、優希は正体不明のヒーローをそう呼んだ。
軽く頷き、優希が教室を出るのを見届ける。

「貴様らあ……わしを無視するなあ！」

怒声を上げる神魔の前に、再び輝夜達は向き直った。
他の生徒と先生はすでに世那と智史が安全な場所に逃がしていた。

「おのれっ、奴らを逃がしおってええー！　ただでは済まさんぞお！」

「はっ！　やれるもんならやってみろ、クソ神魔が！　優希を殺そうとした分、きっちり礼は返さねえとな！！」

「そうだ！　未来ある子供らと、それを支える教師を殺そうとした罪は大きいぞ！！」

「例え世のお偉いさん達が許しても、私達は絶対に許さないんだから！」

「むっう……っ」

怒れる三人の気迫を前に神魔はうろたえる。輝夜達は一歩進み出て、右手を天に掲げた。

「勇猛なる炎の騎士、マイスレッド！」

紅い閃光が背後から立ち上り、龍の眼に宿る。

「轟く大海の騎士、マイスブラック！」

漆黒の閃光が輝き、玄武の眼に宿る。

「清浄なる光の騎士、マイスイエロー！」

最後に黄色の閃光が輝き、麒麟の眼に宿った。

右手のブレスが強く輝き出す。

その手を前に突き出し、左手を腰の辺りで構えた。右足を力強く前に踏み出す、そして――。

「闇を切り裂く大いなる大志！」

『獣神戦隊マイスマン！！』

名乗りを上げたマイスマンを前に、神魔獣は改めて驚愕に震える。

「ばつ馬鹿な、守護獣神だ！？ 貴様ら、生きていたのか！」

「うおのれええっ！ ここでその憎つくき首、打ち落としてくれる！」

言うが早いか斬られた箇所から鳶状の触手が襲いかかって来た。

瞬時に三方に分かれ、攻撃を避ける。窓を蹴破り、三人とも裏山の方へ走った。

その後を執拗に神魔獣が追ってくる。

「はああっ！」

世那のキックが風を切り、神魔に向けて繰り出された。

軽く敵をふっ飛ばすと、軽やかに着地する。続いて背後から智史の銃が光を伸ばし、神魔の肩を貫いた。

しかし敵もさる者。にやりと口を歪めると直線状に伸びていた触手が方向転換し、輝夜達の背後から絡み付いた。

「ぐう……っ」

「うああっ！」

「うっ……」

首、肋骨、腕までも拘束され、なす術もなく強力に締め付けられる。

締め付ける力は増していく一方だ。筋肉が、骨が軋む。呼吸も妨げられ、意識が朦朧としてくる。

そんな中、絶望的な声で輝夜が音を上げた。

「やっぱり、俺には無理だったんだ。

俺みたいな弱い奴が……こんな化け物相手に、戦うなんて……」

変身して力を持ったところで、空蓮寺にすら勝てない俺がこんな化け物……倒せるはずなかったんだ。

「っ……の、おバカ!!」

世那の怒声にビクツと輝夜は肩を揺らす。智史も苦しい中、世那の方へ顔を向けた。

「あんた、ここまで来て何言ってるの!? こんな時につ、弱気になってる場合？」

私達が諦めたら、また誰かが傷つけられるんだよ!!」

「あ……」

輝夜の脳裏に先ほどの義弟達の姿が浮かぶ。

助けを求め泣き叫ぶ子供たち。恐れながらも勇敢に立ち向かう教師。

そして……—消されようとしていた一つの生命^{いのち}。

再び輝夜は強い意志を込めて神魔を見据えた。

激痛の中、必死で右手に力を込めていく。あくまで相手に気取られぬよう少しずつ、少しずつ。

「これで……最後じゃあ！」

止めを刺さんと神魔獣は残りの触手をドリル状に変形させた。ドリルは回転しながら、迷うことなく三人の元へ迫ってくる。

輝夜の手に、稲妻が閃いた。

「龍牙雷翔^{りゅうがらいしょう}——！」

「何！？」

一気に溜め込んだ力を爆発させ、輝夜は紅い稲妻を呼び起こした。爆発した力は渦を巻き、止まることなく神魔獣を飲み込んでいく。何とか触手を犠牲にすることで敵は致命傷を避けた。

しかし結果として二人を自由にしてしまったことに気付き、不利を悟った神魔獣は敗走しようとする。

その行く手を智史と世那が阻んだ。

「そうはいかない！」

「さっきの礼はたっぷり返させてもらっよ！　いくよ……麒麟光舞^{きりんこうぶ}陣^{じん}——！」

左手から光を発すると共に大鎌を召喚する。ぐるんと上で一回しすると、タンッと地を蹴り駆け出した。足をローラーブレード状に変形させ逃げおおせようとするが、世那の速度が速すぎてぐんぐん距離が狭まっていく。

「えい！ とりやあああ！！」

大地を滑りながら、世那は大鎌を振うことで光弾を放つ。しかし、いずれも神魔獣に当たらず避けられてしまう。

必死に追いつかれまいと逃げることに集中する余り、神魔獣は気付いていなかった。

「ここらでいいか、発動！」

世那が地に鎌を突き立てると、神魔と彼女が辿っていた軌跡が浮かび上がった。

ちょうど神魔を囲い込むように黄色い光の軌跡が輝く。

「ぬうつつ、何だこれは！ ぐつ、苦しいいい、やめろ！その光を消せえ——！！」

「残念だったね！ 私が闇雲に攻撃を放ってると思ってたの？お生憎う！」

あんたに当たらなかった弾は結界を作るためのものだったんだよっ
「くうつうつ、おのれマイスマン！！」

地団太を踏み悔しがるが、結界を破ろうにも力が出ない。結界が力を封じ込めたのだらう。

「これで、最後だ！ イエロー、ブラック、一斉攻撃だ！！」
『OK！！』

輝夜が焰の日本刀を、智史が水の槍を召喚する。世那が大鎌を構えた。

「絶・龍炎刃！」

「水蛇裂破槍！」

「麒麟光舞陣！」

『エレメンタル・シュウウトー！！』

焰、水、光が一体となり、高密度のエネルギーの球と化すと真っ直ぐに神魔獣を貫いていく。

断末魔の咆哮と共に、神魔獣の身体は爆発し砕け散った。黒い煙が紅蓮の焰を伴い、天高く上っていく。

「終わった、のか？」

呆けたように輝夜はその場に立ち尽くしていた。

「そのようだね。初めてのチーム戦にはなかなかだったんじゃないか、僕ら」

「そうだね……。レッドがヘタレた事言った時はどうなることかと冷や冷やしたけど」

呆れた声を挙げる世那に、輝夜は肩を竦める。

「う……ご、ごめん。俺、また諦めようとしてた。

ありがとう。イエローが怒ってくれたお陰で立ち向かわなきゃいけないって思い出すことができた」

「え……？ あー、べっ別にあんたのために怒った訳じゃないし。だいたい、命掛かってる時に諦められちゃたまったもんじゃないか

らね！」

「ああ、次からは気を付けるよ」

「ま、まあ、いいんだけどね。もう気にしてないしっ」

そつぽを向いて明後日の方向を見上げる世那を智史が笑った。思わず横目でジトリ睨むが面白がつている智史には逆効果だ。そんな二人のやり取りを、輝夜はにこやかに見つめていた。

第2話 いきなり結成！？獣神戦隊 パート2（後書き）

やっと来ました、初名乗り！やっぱり戦隊はこうでなきゃ。
パート3は短めになります。

では次回もよろしく願います。

来週も世界平和だ！！（単に言いたかっただけ）

第2話 いきなり結成！？獣神戦隊 パート3（前書き）

お待たせしました。最後の締めの話です。
今回はサブキャラ登場編。

第2話 いきなり結成！？獣神戦隊 パート3

「早く何とかしろ！！ こうしてる間にも人質が危険に晒されてい
ると言うのに……」

浅黒い肌に太い眉毛の厳つい警官が部下に檄を飛ばす。

機動隊も必死で見えない壁に向かい突進するが、向こう側の景色
が見えるだけで先には進めない。

「くそっ、こんな所で足止めを食うとは！ あの訳のわからん連中
は何なんだ、気味が悪い」

突如小学校に現れた異形の存在。通報を受けて現場に向かったの
も束の間、警察とレポーターの前にふっと鬼が現れたのだ。

襲いかかって来た化け物に立ち向かうも、機動隊は全く歯が立た
ない。

拳句の果てには多くの負傷者を出ただけでなく、こちらが救出
できないよう見えざる障壁を築き封鎖してしまった。

その時の事を思い出し、悔しさから歯を噛み締める。

依然、壁は崩れようとしなが、何もしないよりはマシだと無謀
な行為を繰り返す。

「いい加減……壊れ……ろっ！！」

勢いよくぶち当たった彼の身体が前のめりに倒れる。

防ぐものが何もないため、顔面から大地とキスする破目になった。

「遠山警部！」

慌てて部下達が駆け寄り、助け起こす。痛そうに鼻を押さえた警部は困惑したように辺りを見渡す。

「警部？　どうかなさいましたか？」

「おい、壁が消えてるぞ。お前、気付いたか？」

「へ……？　あ、本当だ！」

遠山警部から指摘され、他の警官達もやっと現状に気付いたようだ。

「ようし……、全員人質の元へ急げ！　一刻も早く解放し……あれ？」

校舎から出てきた人影を認め、警部は眼が点になった。他の警官達も口をポカンと開け呆けている。

彼らが見たものは、こちらへ大きく手を振って駆け寄ってくる人質達の姿だった。

「おおーい！」

優希は校庭にいるのが警官だとわかると、安心しきった顔で手を振った。

全員が遠山警部達の元へやってくると、先生が事の顛末を説明した。

それは余りにも突飛な話で、普段の遠山だったなら一笑に付していただろう。

しかし、正体不明の化け物に襲われたことが、遠山に耳を傾ける譲歩を促してた。

「神魔に、マイスマン……ですか。本当にそう言ったのかい、彼らは？」

遠山の問いかけに優希は強く頭を振る。

「間違いないよ！ 逃げ出す時、後ろ側からそう名乗る声が聞こえたんだ。

それでも僕、耳はいいんだからねっ。あの人達の事が気になったから、わざとゆっくり逃げて聞いたんだ！」

「わかったわかった。別に疑った訳じゃないんだよ。こちららも仕事でな。

一応確認を取る必要があるんだ」

不服そうに遠山を見上げるも、これ以上は何も言ってもどうしようもないとわかる。

事件解決は警察の仕事なのだから、優希にはもうどうすることもできないのだ。

「本当なんだ……。本当に、僕達を助けてくれたんだ」

それでも優希は呟かずにはいらなかった。

遠山警部もそれなりに優希の言に信頼を置いているらしく、ポンと彼の頭に手を置いた。

依然騒がしいマスコミの方へ軽く眼をやった後、事件現場となった校舎へ視線を移す。

「それにしてもこの度の事件、九年前の放火殺人事件を思い出すな……」

急に遠い眼になり、遠山の精悍な顔に影が落ちた。

「放火殺人？」

すっかり耳に届いていたのか、優希は遠山を見上げた。
うっかり口を滑らせたことに気付き、遠山は慌てる。

「いつ、いや何でもないんだ。気にしないでいい」

「ええっ、でも」

「いいから！ これは俺達が知っていればいい事だ」

「えー！ ……わかりましたあ」

釈然としないが優希はこう応えるしかなかった。

その後優希達は家に戻されることが決められたが、警察の制止も空しく、殺到するマスコミによってあつという間に囲まれたしまった。

いきなり優希の顔の前にマイクが向けられる。

「君、先ほどまであの化け物の人質になっていた子だよね？
捕まっていた間、何があったか聞かせてもらってもいいかい。あと誰に助けてもらったのかな？」

矢継ぎ早に繰り出される質問に、優希は眼を白黒させ困惑していた。

横を見れば、友達もみんな質問攻めに遭って戸惑っている。

「こらあああ！！ この子達は事件で疲れきってるんだ！ さっさとそこを退かんかつ」

余りに無神経な報道に遠山警部が吠えた。

他の警官も押し寄せる報道陣を必死に抑えるが、あちこちから固

まって来るため中々身動きが取れずにいる。

傍若無人な報道陣に切れかかり、遠山警部が二度目の怒声を上げようとしたその時――。

「あーっ！ あそこ！」

優希の友達が校舎の裏側――ちょうど裏山の所を指さした。皆一斉に顔を向けると、そこから赤黒い爆炎が立ち上っていた。

「行ってみようぜ、まだあの人達がいるかも！」

「さんせーい！！」

優希の一声に生徒達全員が大人の眼を掻い潜り、裏山の方へ駆け出して行った。

「あっこら、待つんだ！ おい！」

先生と遠山警部も慌てて生徒達を追いかけていく。唸然とする報道陣の中、いち早く三十代ぐらいの男が彼らの後に続いていった。

一先ず事件が解決したため、輝夜達は一旦研究所の方へ戻ることになった。

これからの自分達の処遇を話し合わなければならないと、博士から通信があつたためである。

不思議な事に腕輪が通信機の役割を果たしていたようで、結城博士の持つ別の道具から発信する仕組みになっていた。逆もしかりである。

「それにしても何でも有りなんだなあ、この腕輪って」

知られざるハイテク機能を前にして、輝夜は大きく関心を示していた。

智史と世那も不思議そうに、自分の腕輪に視線を落とす。

「あまり遅くなってもいけないし、そろそろ行こうか」

そう声をかけ輝夜達が学校へ背を向けた時、後ろから彼ら呼び止める声が飛んできた。

「おおーい、待ってよおおー！」

ぎくりと身体を強張らせ振り向けば、優希達と先生、そして見知らぬ大人二名が迫ってきていた。

その内一人はどうも警察ようだ。

「まずい、警察だ！ 早いとこ退散するぞ！」

慌てて輝夜達は駆け出す。

「待てえええ！！ その三人、何をしていたあつ！」

「ちよつと刑事さん！ あの人達は僕らを助けてくれたんだよつ、そんな言い方ないだろ！」

遠山の態度に優希が噛みついた。しかし聞く耳を持たず、遠山警部は三人を追いかける。

だが常人の力を超えた三人のスピードに敵うわけがなく、小さくなる三人の背を見送る結果となった。

「もおーっ！ 刑事さんの所為であの人達と話せなかったじゃないか！」

せつかくのチャンスを逃した悔しさに地団太を踏む。
それを苦々しい顔で遠山が見下ろした。

「君、警察の仕事を何だと思ってるんだ！？ こっちはお陰で取り逃がしてしまったんだぞ！」

「単に走るのが遅かっただけじゃん」

「なにいい！」

「まあまあ、そのくらいにしておきましょう。相手は子供でしょう？」

一緒に来ていたレポーターの男が二人の間に割って入った。

中肉中背で丸みのある人の良さそうな顔だが、目の奥には鋭い光が宿っている。

恐らく相当のやり手だろう。

突然の第三者を、遠山はじろりと睨み付ける。

「困りますなあ、いい大人が邪魔をしては。私はこの少年に注意をただけですよ。」

ここで言って聞かせなければ、捜査を妨害しかねないんでね」

「これは失礼！ ところで、先程の戦隊もののような姿の三人組についてどう思われます？」

遠山の嫌みをさらりと聞き流し、素早く取材に着手する。

その切り替えの早さにはさすがの遠山も舌を巻いた。

成る程……これぐらい図太くなけりゃ、この業界でやっていけない

いか。

妙に納得するも、レポーターの取材には沈黙で返した。
下手な事を喋ろうものなら、たちまち全国放送されてしまうだろう。

遠山の態度を読んでいたのかレポーターもこれ以上何も言わず、
戦士達が去っていった方を見つめていた。男が口を開く。

「しかし、今日の事件の奇怪さといい、九年前の放火殺人事件の状況に似ていますねえ」

思わずぎくりと遠山警部は身体を強張らせた。
それを見逃さず男はどことはなしに警部に語りかける。傍にいた
優希もしっかり聞き耳を立てていた。

「覚えてますか？ 当時、母子家庭が襲われたあの事件。
母親は鋭利な刃物か何かで殺害され、当時九歳の男の子は事件のシ
ョックで記憶障害になってしまったそうで。

唯一の目撃者である男の子の記憶が曖昧である点から、事件は迷宮
入りに」

「…………よく、調べたもんだな」

「ええ。当時まだ新人だった僕はこの事件に全面的に関わることが
できませんでしたが、ずっと自分の中で忘れることができない出来
事だったんですよ。

全焼した家の中で無傷で発見された少年。

そして事件当時、あの家を取り巻いた黒雲と異形の存在」

「……」

「刑事さんも今回の事件、当時の放火殺人と繋がってるって思っ
てるんでしょう？」

遠山の態度に確信を得た男は穏やかな口調ながら、じわじわと彼を問い詰めていく。

凶星を突かれた遠山はただ黙って男を見据えるしかなかった。

「ま、今回はこのぐらいで済ませておきましょう。」

連続誘拐事件の方も未解決のままですし、九年前の事件ばかり追ってる訳にもいけませんので……。

では、また事件が起きた際、よろしくお願いします」

「二度と来ないでいいぞ」

「まあそう言わず。どうぞ……」

男から手渡された名刺を渋々受け取る。

名刺には『速水^{はやみ} 元治^{もとはる}』と書かれていた。

「では、これにて失礼！」

遠山の横をすり抜けると速水は次の取材を求めて、遠くで待つているカメラマン達の元へ駆けていった。

「さあ、君達も戻ろぞ。我々が家まで送っていいこつ」

遠山に促され、優希達は報道陣に捕まらぬよう学校を後にした。

翌日――

いつも通りの時間に優希は輝夜を見送りに玄関に向かった。

玄関に立っていた輝夜はいつもと違い、心配するように優希の頭を撫でた。

「輝夜兄ちゃん？ どうしたんだよ、急に」

「いや、無事でいてくれたことが信じられなくてな。本当に、良かった……」

「兄ちゃん……」

無理もない。昨日の事件の事で、無関心な父と母、そしてあの嫌味な陽一でさえも優希が人質となったことにうろたえていたのだから。

日頃から優希を可愛がっている輝夜がショックを受けるのは予想に難くないことだろう。

思わず優希は考え込む。

母さん達とはともかく、輝夜兄ちゃんを心配させちゃったのは悪かったなあ……。

どうしたら安心してくれるだろう？

……そうだ！

「大丈夫だよ、兄ちゃん！ だってマイスマンが…… マイスレッドがいるもの……」

「優希、お前……」

「だから、安心してよ。逆に兄ちゃんに何かあった時はマイスマンが絶対助けてくれるよ！

ヒーローは弱き人を悪から救うためにやってくるって兄ちゃん言ってたじゃないか」

思いがけない優希の言葉に、輝夜はふつと唇を綻ばせる。

嬉しさを誤魔化すようにガシガシと弟の頭を撫でくり回すと、慌てて輝夜の腕から逃れようと優希が暴れ出した。

「もうっ輝夜兄ちゃんのバカ！ 心配して損した……」

「ハハッ悪い悪い。余にも形のいい頭だったからつい……な」
「兄ちゃん!!」

「おおっと！ もうこんな時間かあ。じゃっ行ってきまーす！」

「あ、こら逃げるな！」

弟達には秘密だけど、平和のためにこれからも人知れず頑張りますか！

ま、時給が欲しいのはやまやまなんだけどな。

優希の怒鳴り声を背中に受けながら、輝夜は今日も学校へと向かっていく。

陽光に照らされるアスファルトが、彼の勝利を称えるようにきらきらと輝いていた。

第2話 完

第2話 いきなり結成！？獣神戦隊 パート3（後書き）

これで基本的なキャラはだいたい揃いました！
次回はいよいよ五人集結です。

正直、いつロボ出そうか検討中……（汗）

展開が大丈夫だったら次回で出せる……かも……。

ではここまで読んでくださり、ありがとうございました！！

第3話 5人集結！戦う高校生 パート1（前書き）

日常編。輝夜VS勇人！

第3話 5人集結！戦う高校生 パート1

——「いい？輝夜。例え何があっても、あなたは友達を裏切るような真似をしちゃダメよ」

「わかってるって。もう耳タコだよ、それ。」

大体僕、友達を裏切ったことないし……裏切られたことはあっても「なら、大丈夫ね。」

裏切られる痛みを知っていたら、自分は人に同じことをしようと思えないもの。

でも、これだけは覚えていて。これから先、あなたには色々な事が待ち構えている。

逃げたくなるようなこともあるかも知れない。

それでも、自分の心の弱さに負けて諦めないで！あなたの大切な人を守り抜くためにも」

約束よ、輝夜……。

「約束、か」

左手の小指を見つめながら、輝夜は屋上のフェンスにもたれ昼飯を広げていた。

神魔が現れた前後から母の夢を見ることが多くなっているように感じる。

考え過ぎだろうか？

いや、自分が『転生者』であると言われているのだ。

偶然であるわけがない。しかし母と神魔に一体何の関係があるというんだ？

弁当に箸も付けず考え込む輝夜に智史が気付いた。

「どうしたんだい輝夜、おかずにも手をつけないなんて。

いつもは掃除機のように平らげるのに珍しい……」

「へ！？あつ、あゝいや別に何でもないっ。

つてか掃除機つて何だ、掃除機つて！」

「良かったあゝ、いつもの輝夜だ。ツツコミ気質の輝夜だ！」

「いつからお笑いになった俺達！？

それにツツコミつて何だ！！」

ついつい突っ込み返してしまうのが彼の悲しい性か…。

こうやって智史からいつものように弄られる。

もしかしなくてもこいつはSなのか？

だとしたら天然腹黒に違いない。

だが忘れちゃならない。ここにはもう一人、智史とは別タイプのSがいることを。

「ちよつとおゝ、なに二人だけの世界でフォーリンユーしてんだ？
少しは私も混ぜろおー！」

そう、我らが学園のアイドルにして生徒会最強（最凶とも言つ）の
女子、白鳥世那だ。

明るい向日葵のような可愛らしさに騙される男が多いが、輝夜達の
ように親しい男子の前ではちよつと腐った思考を垣間見せたりする。

これはアレか？

つまり男として見られてないってこと？ハハッ……なんか切ねえー。

「もう世那ったら、二人が絡んだらすぐソツチの世界に持っていく

んだから……。

ごめんね二人とも、いつもの世那の病気だから気にしないで」

ソツチの世界って何！？やっぱ、こいつ腐女子……と聞き返したかったが、有無を言わずにつこりと微笑む沙夜子を前に輝夜は顔を引きつらせた。

何だろう、この笑顔に逆らっちゃいけないような気がする。

ああ……素晴らしき我がヘタレ人生！

意外と香月さんて毒舌なんだなあとか思考を飛ばしつつ、彼は大人しく弁当を摘むことにした。

いつもは智史と二人で屋上で弁当を広げるのだが、今日は珍しく世那も同行すると言ってきた。当然沙夜子も良いよなとこり押しで迫ってきたため、まあそうじゃなくても歓迎するが沙夜子も加わるこ
とになった。

問題はクラスの視線、特に男子からのものだった。

オタクでダサく、彼女できない男で有名な輝夜が学園一の美少女達と一緒にランチタイム。

クラス中の全男子が彼に嫉妬した！

何故か女子からもぎらぎらした眼で睨みつけられた！

言っとくが智史ではない、輝夜にだけだ。

あの空蓮寺と並び、智史も整った顔立ちで性格も良いため女子から絶大な人気を誇っている。

さらに成績優秀で男子からも信頼を寄せられているため、まず彼に当たる者はいないだろう。

はい、ここで消去法を使ってみよう。
得意教科は一部を除いてボロボロで、喧嘩は表向き弱く、気が小さく諦めの早い。

人は顔じゃないとは言え、分厚い黒縁眼鏡で真面目そうだが暗く見られ、きちんと解いていてもいつ美容院に行ったのかわからない程伸ばしたざんばらな髪 of 輝夜。

輝夜よりも上だと諸々の事で思っている彼らにとって、輝夜が自分達の憧れの人と一緒にいることは許し難いことのようにだ。

クラスメートいや学校中がこんな調子で、輝夜が智史と親友で世那と沙夜子からも気に掛けられていることが信じられずにいる。

クラスメートからの視線を思い出した輝夜は知らず遠い眼になる。
昼休み明けのクラスがどうなってるか、考えるだけで恐ろしかった。

そんな彼の胸中を知らず、三人はのほほんとランチタイムを満喫している。

思わず溜め息を吐く。

「智史はいいよなあ。頭良いし顔も良いから睨まれずに済むし……。」

ああーっ神様！せめて俺にもどっちかくれよおお——！！」

空に向かって吠える輝夜の肩に智史がポンと手を置いた。

「まあ、元気だせって！それに、周りが何と言おうと気にするな。
僕はみんなが知らない輝夜の良さを知ってるし。身長だって186もあるじゃないか、羨ましいよ」

「179もあれば十分だろ！ま…でもちょっとは元気だ。ありがとうな」

「いいって事さ。」

それにクラスの方も昼休み明けには大人しくなってるって……多分「思わず頷きかけた輝夜だったが、最後に付け加えられた一言に動きを止めた。」

「ん？あれ、ちょっと待て！多分って何、多分って！！物凄い希望的観測だよな、それ！」

「大丈夫って！私らもいるんだから。ドーンと大船に乗ったつもりで任せろい！」

自分の胸をドンと叩き、世那は太く笑って申し出る。

いえ、寧ろそれが危険なんですけど…。

大船だけと実態は泥船だイエーイ！なんて言えない……。

「星川君、私も付いてるんだから心配いらないわ。」

これでも副会長なんだから、いざって時は生徒会権限を使ってでも止めるわよ」

これまたありがたい申し出だが謹んで辞退させていただこう。

そもその原因が何であるのかわかってて彼女達に助けは求められない。

これ以上助けられたら、次は命に関わるかもしれない！

女もだが男の嫉妬ほど見苦しく、凄まじいものはないのだ。

「えっと…みんな、色々ありがとう。」

俺、自分で何とかできるし大丈夫だから」

みんなからの頼もしい申し出を弱弱しい笑顔で断る。
結局は自力で解決……は無理っぽいので、何とかして逃げおおせることを考えよう。

以上の結論を叩きだし、輝夜は卵焼きを口の中に放り込んだ。
うん、我ながら上出来。

「あら？星川君、そのお弁当手作り？
とっても可愛い！」

眼を輝かせ、沙夜子は興味津津で彼の弁当を見つめる。
ふんわりと焼けた卵焼きを中心に、ミニトマトなどの野菜類がバランス良く敷き詰められ、豚の生姜焼きや俵型のおにぎりが綺麗に並んでいた。

「いいなあ…私、料理下手だから上手に作れなくて。
星川君、料理上手なのね」

「そっそうかな…」

照れ隠しから輝夜は顔を俯かせる。
結構女の子が作ったように可愛らしい弁当になってしまったため、自分で作つてるとは言いづらかったのだ。
しかし思いがけず沙夜子に褒められ、心が温かくなる。

弁当の件に世那が食いついてきた。

「えっ！それホントに星川の手作りなわけ！？
すごい綺麗！これ購買部で商品化すれば絶対売れるのに……。
お願いっ、どうか私のと交換して！」

「ああ…構わないよ。じゃ、これいいかな？」

「うんっ、じゃあ卵焼き貰うよ！」

「あっ白鳥だけずるい！僕も…」

「おいおい、そうがつつくなって」

困ったように笑いながらも、輝夜は気前よく交換に応じる。

羨ましそうに見つめていた沙夜子にもさり気なく卵焼きを手渡した。

「えっいいの？でもこれ最後の一個…」

「いいって、俺が好きでそうしただけだし。」

その代わりと言っちゃあなんだけど、香月さんのお弁当どれかもらってもいい？」

気を持たせないようにそう言ってくれたのだろう。

飾らない優しさに、沙夜子はふっと微笑んだ。

その後、商品化を前向きに検討しないかと詰め寄る世那と、キツイからヤダと逃げ回る輝夜の一幕があったとかなかったとか。何とも平和な昼の一時だった。

——時は過ぎ放課後。

案の定クラスメートからのギスギス光線を食らう羽目になったが、クラスメート達も智史達の前では表立って出すわけにもいかず、お陰で輝夜に対する当たりはそう多くはなかった。

だが放課後、例の如く空蓮寺勇人が輝夜達を待ち構えていた。

「…またお前かよ、バ会長。

いい加減飽きないか、それ」

「お前はからかいがあるからなあ。

俺の暇つぶしには丁度良い……」

人を人とも思わぬ物言いに、最初に見た神魔を嫌でも思い出した。

「あの着ぐるみ野郎と同類かよ……」

「は？何訳の分かんねえこと言ってるんだ？」

「お前には関係ないことだ。

言っておくがこっちは大事な用があるんだ。

お前に構ってる暇はない！」

いつになく強い語気で跳ね返す輝夜に、軽く勇人は驚く。

それでも構わず、いつものように襟首を掴み上げようとした。

輝夜を庇おうと智史達は割って入ろうとするが、わざと話しかける生徒達によって妨害される。

鬱憤を晴らせなかったクラスメート達は勇人がここぞとばかりに輝夜をこき使うことを期待していたのだ。

他の二人が身動きの取れない中、沙夜子が無理やり、

「どいてっ！！」と人混みを押し分け勇人の腕を押さえた。

「空蓮寺！貴方、それでも生徒会長！？校内の風紀を守るべき人間が自分から秩序を乱すなんて恥ずかしくないの！！

みんなもよ！

一人の人間を寄ってたかって……」

沙夜子の言葉に、さっきまで楽しんでいたクラスメート達も決まり悪そうに顔を背ける。

そんな中、勇人は一人沙夜子の言葉を鼻で嘲った。

「仕方ねえだろ？」

このメガネが、イジメたくなるようなオーラ出してんだからよお」

これにはさすがに輝夜も激昂した。

眼鏡の奥で紅茶色の眼が冷たく細められる。

「おい……黙って聞いてりやいい気になりやがって。

俺が手出さないから、お前……何もできないと思ってんじゃねえか？」

今まで聞いたこともないドスの効いた低い声音が勇人に向けられる。

勇人もいつもは大人しく諦める輝夜が自分の思い通りにならないことに苛立ち始める。

「ほう……しばらく相手をしない内に随分威勢良くなったもんだな。少し上下関係つてのを一から叩き込んでやろうか……？」

勇人の真っ向からの脅しに当の本人でなく、智史達の方が顔色を変えた。

口で言うだけあって、勇人は相当腕が立つ。

だからこそ生徒会長として仕切り、また不良達を叩きのめすことで押さえ込むことができているのだ。

だがそんな勇人のあからさまな脅しに、輝夜が動じる様子は見受けられない。

寧ろ涼しげな表情で勇人を見返している。

この間、喧嘩禁止令をいい加減解いたらどうだと爺ちゃんが言うてくれたからな……。

もう子供の時みたく利き手を使わなければいいだけだ。

そうすれば、相手も深手を負わずに済むはず！

自分にしっかり言い聞かせ、輝夜はすつと勇人を見据えた。

余裕のある輝夜の態度に、勇人は本気で叩きのめす事を心に決める。

「なら、いくぜ……っ！」

たつと一瞬の内に距離を詰め、勇人は輝夜の懐に入り込んだ。
そのままアッパーパンチを繰り出そうとする。

「危ない！」

智史が思わず叫んだ。

しかし軽く身体を逸らし、輝夜は難なく攻撃を避ける。
これには勇人だけでなく、周りも驚いた。

一見喧嘩慣れしておらず、ひ弱そうに見える輝夜が勇人のスピードを見切っていることに衝撃を受けている。

「まっまさか…あのひ弱なモヤシが。
まぐれだろ、絶対」

今見たことを認めたがらず、口々に偶然だと言う生徒達。
だが勝負は徐々に輝夜の方が優勢になっていることに、嫌でも気づき始めていた。

輝夜自身は自ら攻撃を仕掛けることはないが、勇人から繰り出される攻撃を利用し逆にその力でもって反撃していく。

勇人もそれに気付いていたが、自分が馬鹿にしていた相手から劣勢になっている事実を認めたくなかった。

一方輝夜も別の意味で焦っていた。

今日は結城博士から輝夜達三人は呼び出されている。残る転生者と例の誘拐事件——恐らく神魔が関わっている——について一刻も早く話し合わなければならぬ。

「くっ……早いとこ終わらせるか」

言うが早いか今度は輝夜の方から勇人に詰め寄る。素早い輝夜の動きに翻弄された勇人は一瞬動けなくなる。その隙を逃さず、輝夜は彼の鳩尾に左手で拳を叩き込んだ。

「うっ……ぐあぁっ」

重い一撃に耐えられず、勇人はその場に膝をつく。意外な勝負の行方に、周囲はショックを受け打ちひしがれた。

そんな様子を気にすることなく、輝夜は慌てて世那達に呼びかけた。

「おいっ、早く行かないと遅くなるぞ！」

「ん？あつ、本当だああ！！」

ほら行くよ、結城！それじゃ沙夜子、後お願い！」

「わかった、任せて！」

沙夜子に生徒会の仕事を頼むと、世那は智史を連れて輝夜と共に学校を後にした。

第3話 5人集結！戦う高校生 パート1（後書き）

敵は次回登場です。あとロボットは4話にずれ込みます。
次回研究所でちょこっとお目見え。

第3話 5人集結！戦う高校生 パート2（前書き）

未成年が運転していいのかって？
いいんです、ヒーローだから！

第3話 5人集結！戦う高校生 パート2

忙しく紙を捲る音だけが室内に響く。

沙夜子は生徒会長である勇人と共に、雑事に追われていた。

副会長という役柄、会長ほどではないにしろ書類整理やら各部活の承認などでかなり時間を取られてしまう。

それでもやりがいのある仕事のため、作業そのものは苦痛ではなかった。

問題は別にある……。

「空蓮寺、いい加減星川君に喧嘩売るの止めたらどうなの？それとも…また無様な敗北を晒したいのかしら？」

このクソアマ…と勇人は不快感も露わに舌打ちする。

沙夜子の小言は淡々と続いたため、彼はとても苦手だった。天敵と言ってもいい。

却って世那の方がまだ相手にしやすい。

反省の欠片もない勇人に、沙夜子が溜め息を吐いた。

呆れたような態度が鼻につき、勇人は形のいい眉を釣り上げる。

「あいつが俺に一勝したところで、あのメガネの立場は変わんねえよ。」

現に周囲は奴が香月達と親しいことを疎ましく思ってるからな」

勇人にしては珍しく抑えた口調で冷たい現実を述べている。

あまりに冷めた勇人の態度に目を見開くも、すぐに沙夜子は反論を

口にした。

「だからと言って仮にも生徒会長がいじめを止めるところか率先して行っでどうするの!？」

はつきり言っで、言動が限りなく子供ね」

「へえ?なら副会長さんは大勢の『子供』を相手にしなきゃならねえなあ。ご苦労様」

「あなたが扇動するからでしょう!

話には聞いてたけど、一年の頃から続けてるなんて……。

周りもどうかと思うわ。普通止めるでしょう?。」

真剣な沙夜子の態度を眼にしても勇人の態度は変わらない。

「ハハッ…ほんつと香月の言っでることは良い子ちゃんなんだよな!。」

そんな奴、いるわけねえだろ。

その点、白鳥の方が現実を見てる」

にべもなく言い放たれた言葉に、痛みをこらえるようにして沙夜子は唇を噛み締める。

「……世那だつて本当は、もつと星川君達の側に居たいのよ。

でもつ、みんながそれを嫌がるからわざとキツイ言葉を掛けて…!

ねえ、何故わざわざ憎まれるような事をするの?

理解できない……」

「理解を求めた覚えはねえな。だいたい、最初にあいつをはじき出したのは俺じゃなく周りの連中だ。

俺はただ担がされただけさ」

もうこの話は終わりだと言うように勇人は書類を手にして教室を後

にした。

——何故わざわざ憎まれるような事をするの？

先程の沙夜子の言葉がずっと脳内で反芻している。

別に奴一人に憎まれようと構いやしない。他の生徒達も侮蔑の対象として星川を扱っているのだから。

それに…寧ろ憎んでいるのはこっちだ。

だが改めて思う。

何故俺は星川を強く憎んでいるのだろうか？

高一の時、初めて顔を合わせた瞬間からそうだった。

「何かあいつを見てると、胸がざわつく…」

そして怒りとも悲しみともつかないこの感情は一体何なんだ？

……馬鹿馬鹿しい。奴に負けたから、こんなくだらないことを考えてるんだろ。

頭にもたげた疑問を振り払うように、勇人は軽く頭を振り払った。

研究所への道中、世那と智史は輝夜が勇人を倒した話題で持ちきりだった。

当の本人だけは自分があっさり勝ったことを未だに実感していないらしい。

興奮気味に世那が訊ねた。

「ねっ、この間の戦闘で星川が強いつてことはわかってたけどさ、あの空蓮寺を倒しちゃうなんて今までどんな訓練受けてたの？」

「えっ、訓練つて？」

「だーからあ、武道とかそういう習い事！」

いくらなんでもただの一般人が空蓮寺とか、ましてや神魔相手に戦えるわけないじゃない」

「ああ…そういうこと。」

俺、小学校の時からずっと爺ちゃんに古武道を習ってたんだ」

『古武道ー！？』

意外な返答に二人は大いに驚く。

古武道といえば今知られている現代武道以前のものだ。

精神の修養を説く『道』の思想は勿論ある。

ただ技術に関しては江戸以前の流れを汲む本格的なもののため、下手をすれば相手の命を奪いかねない危険性があるのだ。

でもこれで輝夜が力を振るおうとしなかった理由に合点がいく。

「そうだったのか。」

だから僕達がやり返したらどうだと言っても、決して手を出さなかったんだな」

「それもあるけど、一番は威圧的な空蓮寺の言いなりになって俺の弱さだ。」

でも、神魔との戦いで何か吹っ切れたような気がする。

白鳥のお陰だな」

ふっと柔らかく微笑む輝夜に、世那は頬を赤く染める。

不覚にもその笑顔を綺麗だと思ってしまったのだ。

慌ててつつけんどんに言い返す。

「だったから、あれは簡単に諦められたら全滅しそうだったからって言っただろ！」

まあ其処まで言うなら、今度ミミの焼きドーナツ奢ってもらおっかなー」

「ええっ！？あの高いのを！？」

待て待てっ、少しは俺のバイト代を考慮ろ！」

「ヤ・ダ。あつれえゝ感謝してるんじゃないかったっけ？」

「いやいや、それとこれとは話が別だろ！」

智史っ、お前もさっきから笑ってないで何とか言ってくれよ！」

我関せず二人のやり取りを眺めていた智史に輝夜はSOSを出す、彼まで追い討ちをかけるような事をさらりと言つてのけた。

「いいじゃないか、それぐらい。」

むしろ僕も奢ってほしいぐらいさ。

ミミの焼きドーナツ…じゅる、一度食べてみたかったんだよなあ」

輝夜の背に戦慄が走る。

忘れてた、こいつがとてつもない甘党でスイーツ大好きなことを！
食い意地は俺といい勝負だから、スイーツ専門店で連れて行った日には財布がスツカラカンだ。
冗談じゃない！

にこにこ不自然な微笑を浮かべ近づいてくる二人に、財布の危機を察した輝夜は研究所目掛けダッシュで自転車を飛ばした。

人間何事も為せば成るものだ。

二人との財布をかけたリアル鬼ごつこのお陰で思ったより早く研究所へ着くことができた。

せえぜえ息を切らす三人の姿に、結城博士達は最初神魔に遭遇したのかと勘違いしていた。

桐嶋博士からそれぞれ水を頂いた後、結城博士は早速本題に入った。

「さて、現在の神魔の動きだが表立って目立つた事件は起きていない。恐らくこの間の敗北で奴らも慎重になっているのだろう。

だが連続誘拐事件が解決したわけではない。被害にあった子供達の行方は依然掴めていないのだから……。

そこで、君達に事件の調査を頼みたい」

『了解!』

頷く三人だったが、輝夜だけ別の心配事があるようで博士にこう訊ねた。

「それはいいですけど俺、生活のためにバイトしてるんでマイスマンの任務との両立はちょっと……。どうにかできないでしょうか?」

思わぬ問題が浮上し、結城博士も顎に手を掛け考え込む。

智史も輝夜の複雑な家庭事情を思い出していた。

叔母夫婦から輝夜は学費から弁当代に至るまで何の援助も受けていない。

辛うじて基本生活を面倒見てもらうぐらいだ。

そのため彼にとってバイトは死活問題だった。

ややあつて結城博士は話を切り出した。

「ではマイスマンとしての活動、また出勤以外は研究所の清掃や手伝いをする事で給料を渡すというのはどうか？

よくよく考えれば、君達学生を無理矢理戦いに巻き込んでしまったんだ。

このぐらいの事はするべきだろう…」

「博士……」

はい、よろしく願いします！」

続いて二人も了承した。

ひとまず給与が安定したところで、三人の前に見覚えのある二つの腕輪が置かれた。

最初、輝夜達が手にした腕輪の残りだ。ホログラムで見た五体の内、グリフォンと狼らしき獣が装飾されている。

「博士、これって…」

「これを君達に預ける。

世那君の件で確信を得たが、転生者は同じ転生者を引き寄せるようだ。

私の予想が正しければ残る転生者も君達の側にいるはずだ」

博士の言葉に、三人共顔を見合わせ考える。

正義感の強い身近な人間と言えば心当たりは一人だけ。

「もしかして沙夜子かも！」

「えっ、香月さんが？」

世那の予想に輝夜は驚くが、智史の方はさもありなんと同意する。

「その可能性は高いだろうね。

親しい友人で同じ転生者だったのは僕と輝夜、そして白鳥がそうだったんだ。

白鳥と親友の香月が転生者であつてもおかしくない」

成る程と納得するが、はてと首を傾げた。

「待てよ？親しい間柄って言うなら、香月さんだけで後はいないぞ？
転生者はもう一人いるんだろ？」

あ、と二人の思考は止まる。

そうだ、転生者はもう一人いるんだった。

困惑する彼等に結城博士は考えられる仮説を挙げた。

「転生者は何も親しい人物とは限らないのかもしれない。
しかし身近にいて、何か人とは違う存在感を放っているはずだ」

確かに自分達は各々が色々な意味で目立っている。

転生者についてわからない事が多いが、誘拐事件と並行して残る転生者探しをすることで現在の方針は決まった。

これで話が終わったと三人が研究室を後にしようした時、博士が見せたいものがあると言い地下へと案内した。

当初、この地下室を目の当たりにした三人は口を開けて呆けていた。

地下は巨大な秘密基地となっており、自衛隊でしか見掛けないジエ

ツト機が右端の倉庫に一台置かれている。
建造中のドリル戦車や何故か救急車や消防車に似たローダーまであった。

他にもまだまだ造られているようだ。

「どうかね？ここにある機体には全て君達の玉に対応するパワーオ
ーラというエネルギー源がはめ込まれている。

見た目は色の付いたクリスタルだ」

「へえーすっげえや！

なあ博士、ここにあるのは俺達の機体ってことでいいんですね？
そうっすよね！？」

興奮の余り眼を輝かせる輝夜に満足したのか、結城博士はおほんつ
と誇らしげに咳払いをする。

「まあまあ輝夜君、少し落ち着きたまえ。

勿論この機体は君達のために用意したものだ。

但し機体を選ぶことはできんぞ。

パワーオーラ自体が好みの形状や機能を事細かに選り好みしてしま
ったからな」

「クリスタルが選り好みを！？」

驚く世那にどこか疲れた表情で博士が頷いた。

「全くあのクリスタルときたら、一々注文が多いのなんの！

お陰で制作に予想以上の費用と年月を注ぎ込むことになってしまっ
た……まあ、その甲斐はあったがな」

興奮気味な二人に対し、先程から冷静な智史は父の言葉に引っかかる
ものを感じていた。

「あのさあ父さん、その費用だけど一体どこから出てるのかな？」
「どこって国家予算…つまり税金から出てるに決まってるだろう」

さらりと抜かした父の発言に智史は衝撃から沈黙する。
ややあつて衝撃から少し立ち直った智史は静かに口を開いた。

「えーっと…自衛隊とかにありそうな軍用機が一つだけで、後はな
んで救急車に消防車とかスポーツカーなわけ？」

「そう言えば昔見てた車からロボットに変形するアニメみたいですね、この機体」

だんだん顔が引きつりかけている智史とは対照的に、子供のように
わくわくした眼で輝夜は博士に尋ねてくる。

よくぞ聞いてくれましたと言わんばかりに博士は少年のように眼を
輝かせた。

「よくわかったな、輝夜君！

残念ながらロボットには変形しないが、機体それぞれに焰、水など
の属性能力を秘めている。

形状はクリスタルが選んだとはいえ、私もかつこ良くなるよう少し
手を加えたのさ。

働く車が戦う…まさしく男のロマンだ！」

「博士……凄い、凄すぎます！

どこまで俺のつばを押さえてるんですか…！」

グッジョブ、博士！

戦隊は勿論、ロボット大好きな輝夜はぐっと親指を立てる。

しかし博士の趣味に走った予算の使い方に、とうとう智史が爆発し

た。

「父さんっ！！国家予算でなんて大がかりなお遊びしてんだよ！国民の血税を何だと思っただあぁ！？

戦闘機って言うから変形ロボットだと思ってたのに……中途半端なっ」

「遊びじゃない！私は常に真剣だ！！」

それにロボットが造れなかったのは、機体を造った時点ですでに国家予算をオーバーしていたからだ！」

「尚更悪いわっ！！」

慌てて落ち着かせようとする輝夜と世那を置いて、珍しくぶち切れた智史は博士との押し問答を日が暮れるまで続けた。

堅牢な石造りの大広間は、そこに宿る悪意を映すように陰鬱な空気を纏わせている。

幾星霜の時を経て、この城の姿は変わることなく当時の面影を残していた。

至るところ蠢く闇の中、ダキニのよく光る銀色の眼がその遙か先を見通す。

彼女の視線にあるのは、その闇と同色の帳越^{とほじ}しに佇む絶対的な覇者。

我等が待ち望む新時代の支配者、神魔皇帝……。

暫しその場に控えるよう佇んでいると、ダキニの背後から大理石の床を踏み鳴らす音が響いてきた。

「おや…ヴァナルガ、ようやくお出ましのようだね。
前回の作戦失敗に対する申し開きの練習は済んだのかえ？」

ダキニのあからさまな嫌味にヴァナルガは舌打ちで返す。

「余計なお世話だ！」

人の心配より我が身を省みたらどうだ？

お前は未だ日本攻略作戦にすら加わっていないだろう。

少しは神魔族として尽力するんだな」

「ほう……態々（わざわざ）わらわへ花を持たせてくれようとは、
心の機微に疎いお前さんも成長したということかのう」

「貴様……！言わせておけばっ」

「そこまでだ。陛下の御前である、控えるがいい」

激昂するヴァナルガを氷を思わせる低い声が制止する。

二人が振り返った先に、ロイヤルブルーの軍服を纏った細身の男が
現れた。

服と同色のマントを翻しながら、二人の側へ歩を進めていく。

兜と僅かに零れる漆黒の髪により、その表情を伺い知することは難し
い。

「アスラ…貴様、何故この女狐の肩を持つ！？」

「聞こえなかったのか？」

ここは陛下の御前だ。

ただでさえ九年前の戦闘で深い傷を負われ、肉体の修復のため眠り
につかれているというのに……。目の前で騒がれては傷に障るとい
うもの」

「っ……………！」

アスラの尤もな言い分にヴァナルガも苦虫を噛み潰したように顔を歪める。それを見て、ダキニはホホッと口元に弧の字を描く。すかさずアスラが見咎めた。

「ダキニ、お前も人をからかう暇があるのなら陛下のために存分に働いてくるがいい。

安心しろ、神魔怪人生成装置ならば先ほど完全に機能修復した」

眉も動かさず淡々と指示を送るアスラを恨めしげに見つめるも、渋々ダキニは了承した。

「仕方ないのぉ…。まあよい、軽いダイエット代わりじゃ。ところでDr・アスラよ、攫ってきた人間共はどうするつもりじゃ？」

「陛下を復活させるための生贄とする。奴らの生命エネルギーを吸い尽くせば、多少は回復の足しとなるう」

「しかしの、生贄の姿が見当たらぬぞ？」

「生贄はまだ日本にいる。ミラーシンマの中に生贄を封じたのでな。そこで……」

次に来る言葉が簡単に予測できたダキニは肩をすくめた。

「わらわの出番だと言っただな？

全く、お主も女の扱いが悪いぞっ」

「女……？悪いがお前を女だと思ったことは一度もないな。

さあ、御託を並べる暇があるならさっさと行け」

にべもなく返された言葉によつと袂で目頭を押さえた振りをし、ダキニは口元だけ釣り上げて大広間を後にした。

石畳の廊下をしばらく歩いていると、ダークグリーンのアンドロイドらしきものが反対側からやって来た。

目元は暗赤色の鈍い光をたたえ、身体には首もとと手首、脚の側面に赤いラインが走っている。

鋼鉄よりも硬い装甲が歩く度にカシャンという不調和な金属音を奏でた。

このアンドロイドが何者であるのか彼女は知っている。

Dr・アスラによって造られし殺人兵器。

「メンテナンスは終わったのかえ、ミクトラン？」

Dr・アスラならば玉座の間におるぞ」

ミクトランと呼ばれたアンドロイドは、骸骨を機械的にアレンジしたメタリックカラーの面を微かに縦に動かした。

「…そうか、了解した。

ダキニ、アスラ様からの伝言だ。

ミラーシンマを使い、残る獣神達をおびき寄せろ、だと」

「成程、わらわに獣神の生まれ変わりを探し出させるつもりか。あいわかった。

必ずや奴らを見つけ出してみせようぞ」

大広間でのやる気の無さが嘘のように、銀色の眼に好戦的な光が宿る。

手元に鉄扇を召喚し軽く舞うと、桜吹雪と共にダキニの姿はこの場から掻き消えていった。

第3話 5人集結！戦う高校生 パート2（後書き）

敵幹部、御披露目の回。でもボスだけ眠りについてますね。まあ正体はまだ秘密ってことで。

第3話 5人集結！戦う高校生 パート3（前書き）

1か月も更新滞ってしまいすみません！

長くなりましたのでパート4までになりました。

また、今月から働くので更新速度しばらく遅くなります。

第3話 5人集結！戦う高校生 パート3

使われなくなつて久しい町外れの倉庫。

ドラム缶やコンテナなどがその辺一帯に置かれている。

草木も眠る丑三つ時、月光のみが深い闇に覆われた内部を照らしていた。

その一角に人の等身を映せる程の大きさをした古びた鏡が置かれている。

ただ古いのではなく、学校の七不思議に出てもおかしくないような不気味さを漂わせていた。

静寂の中、音も無くふわりと舞い降りたダキニは倉庫の中のその一点に眼を向ける。

舞っているかのような足取りで鏡に近寄ると、そのまま顔を寄せ甘い声で囁きかけた。

「目覚めよ…ミラーシンマ。
そなたの出番じゃ」

囁きに応えるように鏡がきらりと瞬く。

次の瞬間、鏡一面が漆黒に染まりその中央に人面が浮かび上がった。

側面から腕が生え、底面からは足が二本伸びてくる。

「わたくし、ミラーシンマでございます」

妙に甲高い男声で神魔獣が名乗り出た。

恭しく頭を下げるミラーシンマに満足したのか、鷹揚にダキニは頷

く。

「さて、わらわがここへ来たのは他でもない。

ミラーシンマよ、陛下への供物を増やし、さらに未だ見つかっておらぬ守護獣神共をあぶり出すのじゃ！」

「はっ！仰せのままに」

忠誠を誓うように、深々とミラーシンマは頭を垂れた。

「ところでミラーシンマよ」

調子が変わったダキニの声につられ、神魔獣は面を上げる。

「陛下への供物は如何した？」

アスラからはそちの中に封じておると耳にしたが

「はい、アスラ様の仰られた通りでございます。

わたくしめの体内に異空間を作り上げ、その中に人間共を閉じ込めているのです。

今も中でギヤアギヤア泣き喚いておりますわ、クッククク……。御覧になれますか？」

ミラーシンマが歪んだ嘲笑を浮かべると鏡面に波紋が生じ、捕らわれた誘拐事件の被害者達が映し出される。

小学生から高校生まで一様に不安と恐怖から顔を歪ませていた。

泣き叫ぶ声が鏡越しに聞こえてきたため、ダキニは苛立たしげに柳眉を逆立てる。

「もうよいつ、わらわは人間の泣き喚く声が大嫌いなものじゃ！！
ほんに耳障りよのう！」

「こつ、これは失礼致しました！」

不快なものを眼につかせてしまい申し訳ありません……」

ダキニの不興を買ったことに慌てたミラーシンマはすぐさま平身低頭する。

不愉快さを隠しもせず、ダキニは荒々しく鉄扇を広げた。
苛立ちで歪む口元を隠すように、扇で顔半分を覆う。

「…別に、気にはしておらぬ。

わらわからの指示は以上じゃ。

もし獣神どもが現れたなら、必ずわらわを呼べ。よいな？」

「は——っ——！」

ミラーシンマが跪くのと同時に、ダキニは夜闇に溶け込むように姿を消した。

くしくも勇人の言った通り、あの決闘の翌日も学校における輝夜の立場は変わらなかった。

それをどこかでわかつていた彼はHRの間、暫し思考を飛ばすため窓の外へ眼を向ける。

オタクで見た目の冴えない俺が喧嘩に強くとも、どこまで行ってもオタクはオタクってことか…。

対する空蓮寺は容姿も優れ、文武両道な一般人。
しかもあいつが冷遇するのは俺に対してだけの話で、それ以外の生徒には生徒会長としてきちんと庇護している。

当然周りの生徒達は空蓮寺さんに怪我させただの何だのとあいつの味方ばかりしゃがる。

被害者は俺だろうが、おい！！
勢いで怒鳴り散らしたいが何とか抑え込む。

「落ち着け俺、もうほとんど大人だろ？
こんな事ぐらいで怒ってどうする」

輝夜をよく知る人物が見たならば、相当殺気立ってることは一目瞭然だろう。

勿論智史は気付いていたが、親友の本性を誰よりも知っているため顔を引きつらせていた。

日頃穏和な輝夜が、怒ると凄まじく恐ろしいことを智史は知っている。

帰りに輝夜の方から空蓮寺に何か仕掛けやしないかと気が気でなかった。

「では、今日の連絡は以上！」

鬼がわらの野太い声が全体に行き渡る。

考え込んでいた輝夜の耳にもすっかり届いたようで、視線を鬼がわらの方へと向けた。

沙夜子による号令でHRが終わると、早速智史は鞆を手に取り、輝夜の元へやって来た。

「よっ、輝夜！
なーに湿気た面してるんだ？らしくないぞおー？」

「…どうせいつもこんな顔だ」

不機嫌そうに眼を眇める輝夜を見て、やっぱり相当怒ってるなと溜息を吐く。

輝夜は自分の我が儘で不機嫌になることが殆どない。
むしろ人付き合いに細かく神経を使う方だ。
だから、その彼が怒る時はおのずと相手側の理不尽な態度によるものになる。

「あーあ、これだから人の表面で判断しようとする人達は……」
「？何だ、急に。智史こそ何かあったのか？」

「うっん。僕がどうかじゃなくて君に対する周りの扱いがね」

正直智史は、自分を特別扱いする周りの生徒達にうんざりしていた。
好意を持たれることは嬉しい。

だが、自分の交友関係にまで口出しされるのは我慢ならない。
ましてや親友の事を悪く言われるなら尚更だ。

周りがどう思おうと、僕にとって輝夜は掛け替えのない親友なんだ。
初めて僕の上辺だけに騙されることなく内面を見てくれた、大切な……。

「まあ周りの言うことなんか気にするなって！

所詮ミーハー根性で空蓮寺にくっ付いてるだけだしね」

「お前、結構言うよな……」。

そのミーハーの中に智史のファンもいるんだぜ」

「だから？僕の友人を傷付ける人達にまで、義理立てする覚えはないね」

「智史……」

自分の分まで怒ってくれる智史に、感極まり声を詰まらせる。

俺がここまで頑張れたのはお前のお陰だよ。

照れくさいので口には出さないものの、輝夜は眼を優しく細めていた。

一方、世那は今日も沙夜子に、家で生徒会の資料を片付けることを条件に先に帰ってもいいかと頼んでいた。

快く了承した沙夜子だったが、最近になつてから生徒会の仕事を後回しにしがちな世那の様子に疑問を持っていた。

昼休みにそれとなく聞いてみるも、上手くはぐらかされてしまう。何故か一緒にいた二人も顔を強ばらせていたのが気になった。

おかしい……絶対普通の用事なんかじゃない。

世那は人一倍責任感が強い性格だもの。

いい加減な理由で仕事を後回しにするタイプじゃないわ。

「ねえ世那？

最近、放課後に生徒会室へ来ないけど色々忙しいの？

それに星川君、結城君とよく一緒に集まることが多いけど、もしかしたら関係あるのかしら？」

敢えて沙夜子は核心に触れる質問を直球でぶつけてみた。

一番答えられない質問を前に、世那はこめかみから嫌あーな汗が伝うのを感じる。

「うーん、ごめん。色々家の事でやらなきゃいけないことがあつて……」。

星川達とはたまたま帰る時間が一緒だから帰ってるだけで、私の用事とは関係ないよ」

何とか自然な理由を考え、取り繕ってみる。

親友を騙すことに罪悪感を感じたが、転生者がどうかかわらない沙夜子にマイスマンの事を話す訳にはいかない。

彼女のことだ。それを知ったら危険を省みず飛び込んでいくだろう。

「本当にごめんね、沙夜子！」

一段落着いたら、今までの倍仕事を頑張るから――！」

申し訳ない気持ちから頭を下げる世那に、沙夜子もこれ以上探りを入れることは出来なかった。

世那が輝夜と智史と一緒に教室を後にすると、沙夜子はある決心を胸に動き出した。

三人が廊下の角を曲がるのを確認すると、すかさず彼らの後をつけていく。

角から様子を窺っていると、背後から傲慢な響きを持つハスキーな声が掛けられた。

「おい香月、さっきから何やってんだ。

探偵にでも目覚めたのかぁー？」

からかい混じりに皮肉る勇人の口を塞ぎ、沙夜子はこちら側に引きずり込んだ。

突然の事によるける勇人は、ギツと彼女を睨み付ける。

「てめえっ、いきなり何しやがんだ！」

「シーツ、いいから少し黙ってなさい……！」

鬼気迫る眼光で射抜かれ、さしもの勇人も黙り込む。

何も言わず沙夜子の視線の先を追うと、嫌いな輝夜の後ろ姿が眼に

入ってきた。

けつと言わんばかりに顔を顰める。

更に智史と、何と生徒会室に来るはずの世那の姿まで見つけて勇人は驚いた。

「香月、一体どういうことだ！

何故、生徒会役員のあいつが仕事サボってダメガネ達と一緒にいる！？」

最近来ないと思ったらこんな奴らと…！

「おい聞いてんのか、香月！」

「聞いてるわよ、さっきから！

私の方こそ訊きたいくらいよ。…訊いても誤魔化されちゃったけど。

だから今、三人が何を隠してるか突き止めるの」

「へえ……意外とやること大胆なんだな。

面白れえ、俺も付いてくぜ」

勝手に付いていく気満々な勇人に、沙夜子は啞然と彼を見た。

冗談じゃないとすぐさま反論する。

「ちょっと、これは遊びじゃないのよ！

暇つぶしに来て貰っては困るわっ」

「安心しろ、生徒会長としての監督義務を果たすだけだ。

これなら文句ないだろう？」

「……っ、勝手にすれば！」

半ばヤケクソになり沙夜子は匙を投げた。

逢魔が時とはよく言ったものだ。
血を溶かし込んだような夕焼け空の上を、カラス達がけたたましく
鳴きながら飛んでいく。

「いくらまだ人通りがあるからって、一人で帰るのは怖いよなこの
通学路……」

「ホント、任務じゃなきゃ寄りたくもない場所だし」

「それでも神魔の仕業なら、僕達が何とかしなければ」

「ああ、早いとこ事件解決といこうぜ！」

油断無く通学路を見回りながら、輝夜達は何時神魔が現れもいよいよに人の姿が無いことを確認する。

彼らは気付いてないが、後ろの電柱に上手く隠れながら沙夜子と勇人が後を付けていた。

。

耳を澄ませて前方にいる輝夜達の会話を聞くも、言っている事は不思議な事ばかりで理解できない。

勇人は沙夜子に話を振った。

「あいつらシンマとか言うのが誘拐事件を起こしたとか抜かしてやがるぞ。」

何だ、シンマってーのは？」

「さあ……私も初めて聞いたわ。」

でも三人が事件と何らかの関わりを持つてるのは明らかね」

「おい香月、まさか本気にしてるんじゃないやねえよな？」

あのメガネの馬鹿な妄想だろ絶対！

いい年こいてヒーローごっここの延長かよ……」

白けた眼で勇人は輝夜を見やる。

「そうかしら？」

私には星川君達が嘘を言ってるようには見えないけど……あつ、動き出したわ！」

「ちっ、無駄足だったか…」

大した隠し事じゃなさそうだしよあ」

ぶちぶち文句を並べるも、自分から付いてきた手前途中で帰る訳にはいかない。

渋々沙夜子の後に続いた。

あれからずっと事件があつた通学路をしらみつぶしに当たっているが、未だ輝夜達の前に神魔の姿は表れていない。

「おつかしいなあ、確かにここら辺が一番被害が多いんだけどなあ。あ。

なあ智史、お前の調べたデータによるとこの通学路が一番酷いんだろ？」

「ああ、間違い無いよ。

特にここら辺は死角が多いから、何時被害に遭ったか分かりにくい場所なんだ。

だからここで再犯を繰り返す可能性は高いはずなんだけど……」

キャアア——アア——ッ！！

言い淀む智史の言葉を遮り、人のものとは思えぬ程の天をつんざく悲鳴が響き渡る。

「ッ！今のは…っ」

「右の方からみたい！

急ぐよ！」

『おう！！』

急遽、三人は悲鳴が上がった方へ走り出す。

「私達も急ぎましょう！」

「ああ…これはマジみたいだしな」

陰から見ていた沙夜子と勇人も、ただならぬ空気に気を引き締め三人を追って行った。

息を喘がせ、一人の女子高生がもつれる足で必死に走り抜けていく。後ろから追いかけて来る赤黒い鏡を撒こうとするが、相手の速度は衰えることがない。

ふと視線を横にやると、警官達が警戒態勢で通学路を巡回しているのが見えた。

「助けてえつ、刑事さん！」

懸命に声を張り上げ叫ぶが、何故か近くにいるにも関わらず警官達に少女の声は届かない。

必死で駆け抜ける少女を嘲笑うように、後方にいたはずの鏡が前方に立ちふさがってきた。

余りの恐怖に少女はおののくことしかできない。

「嫌あつ！」

誰かつ、誰か助けてえええ！！」

「ククッ、いくら助けを呼ぼうが無駄なこと。

只人にはこの空間は見えぬ。

さあ、お前も我が君の贄^{にえ}となれ！」

手を伸ばし、ミラーシンマは己が身に少女を取り込もうと手を伸ばした。

「待ちやがれ、神魔——！」

空気を切り裂く鋭い声が神魔を捉える。

突如乱入してきた輝夜達に、ミラーシンマはうろたえた。

「馬鹿なっ、何故只の人間がこの空間を見つけられたのだ!？」

「この子の声が聞こえたからさ。」

生きたいって言う命の叫びがな！」

絶望していた少女の眼に再び光が戻る。

助けが……私の声が届いてた！

「ええいつ、邪魔をするな！人間風情があっ」

鏡面に光を集め、一気にビームを放つ。

瞬時にその場から駆けて攻撃を避けると、輝夜と智史でミラーシンマ目掛けてそこらに転がっている石を投げつけた。

「くうゝっ、このクソガキ共お！

ハアアッ——！」

彼らの挑発行為に乗せられたミラーシンマは、次々と光線を放っていく。

「さあ、今のうちにここから逃げて——！」

「でつても、ここからは出られないってあの化け物が…！
それに貴方達もここにいたら殺されちゃう！」

「私達なら大丈夫だから。ほら、ここからなら出られるよ。
危なくなったら逃げるから、私達を信じてよ。ね？」

世那達が入って来たところから別の景色が見える。

そこは先ほどまで少女がいたはずの通路路だった。

少女は世那の眼を見つめる。

世那を信じ強く頷くと、少女はこの空間から脱出した。

世那が女子高生を安全な所まで逃がしたのを確認すると、二人は挑発行為を止める。

「はっ！し、しまった、奴らは囷か！」

三人の作戦に今頃気づいたが後の祭り。

このままではダキニ様に申し訳が立たない。

せめて作戦失敗の元凶であるこ奴らを新たな贄にしてやる。

やけくそになったミラーシンマは鞭のような光線を放ち、矛先を三人に変えた。

「ハッ、今度は俺達を捕らえるつもりか？」

「しつこい男は嫌われるよ」

続けて智史が茶化す。

元来冷静な性格ではないのか、鏡面に血管らしきものが浮き出た。

「貴様らああ、この美しいわたくしを愚弄するとは無礼な！！」

「うへえ、今度の敵はナルシストなわけ？」

「どうしよう…本格的に関わりたくないんだけど」

鳥肌が立ったのか、慌てて世那は腕を擦った。
迫りくる神魔の前に、輝夜達はギンと鋭い眼で奴を睨みつける。
輝夜が右手を胸の前で握り締めた。

「みんな…いくぞおおお!!」
『おう!!』

『獣神覚醒!!』

三人の身体が焰に、水に、光に包まれる。
僅か数秒でそれらは四散し、三色のプロテクターに包まれた戦士が現れた。

だだのガキだと思っていた人間が、仇敵である守護獣神に変化しミラーシンマは驚愕する。

「何!? 貴様らがマイスマンだと!?
まさか本当に人の姿へ転生していたとは……」

驚いていたのは神魔だけでは無かった。
三人の後を追って異空間に入り込んでいた沙夜子と勇人は、電柱の陰から三人の変身を見て愕然とする。
勇人が呟いた。

「嘘だろ?
星川の妄想じゃなかったのかよ……」
「そんな……」

世那達が隠してたのってこれの事だったの?」

俄かに信じがたい光景を前にして、混乱する頭を整理しようとする

が上手くないかない。

感情が理性に追いつかないまま、ただそこで固まっていることしかできない。

隠れて見ている二人の事を知らず、輝夜達は名乗りを上げる。

「勇猛なる炎の騎士、マイスレッド！」

「轟く大海の騎士、マイスブラック！」

「清浄なる光の騎士、マイスイエロー！」

左手を握り締め、それを輝夜は胸の前に掲げる。

「闇を切り裂く、大いなる大志！」

『獣神戦隊マイスマン！！』

右手の掌を前に突き出すお決まりの名乗りを挙げ、堂々たる参上を遂げた。

目的の守護獣神が現れたことに驚く反面、神魔は内心ほくそ笑む。

「クックック、ようやくお出ましのようすなあ。

わたくしはミラーシンマ！皇帝陛下のため、貴様等を供物として捧げてやるわ。

さあ、マイスマンツ！

残る守護獣神の居場所も吐くがいい！！

さもなければ……」

鏡の奥から誘拐された生徒達の姿が浮かび上がった。

助けてえ——っ！

怖いよう……。

苦悶の表情に歪む生徒達を見て、彼らは声を失う。

「どうするマイスマン。」

お前達が迷っている間にも、こ奴らの気はどんどん消え失せていくぞ?」

ミラーシンマから突きつけられた要求に輝夜は悔しさで拳を震わせる。

「レッド!こいつの言う事を真に受けるなっ。」

どっちにしろ奴は僕達を倒した後、人質をも殺すつもりだ!」

「だがブラック、ここで俺達が抵抗したら人質が…っ」

「待って、何か方法があるはずだよ!

あの神魔の弱点さえ見つければ。……よし!」

ミラーシンマの挙動に注意を払いながら、世那は自身の面に右手をかざした。

「サーチアイ!」

麒麟の眼が黄色に輝くと、世那の眼前にミラーシンマのデータが浮かび上がる。事細かにミラーシンマの身体を分析すると奴の顔面に赤い丸印が点灯した。

「見つけたっ!

レッド、ブラック、奴の顔面を一斉に叩くよ!」

「了解!奴の顔面にぶち込めばいいんだな?

いくぞっ…絶・龍炎刃!」

右手に召還した紅き日本刀を手に、輝夜は一気に駆け出す。

「ハアッ!!」

一直線に刀を風ぎ払い、生み出された焰の刃がミラーシンマ目掛けて駆けた。

「ぐぬう…小癩な！
まてんき^{まてんき}
魔天鏡光^{まてんきやうかう}!!」

輝夜の剣戟を防がんと漆黒の鏡面に邪気を込め、一気に黒い光線として放つ。

「来たなっ、水蛇裂破槍！」

待つてましたとばかりに輝夜に向かう攻撃を、槍から放った智史の水蛇達が飲み込んでいく。

盾となる攻撃を封じられたミラーシンマは顔面に焰の刃と水蛇の牙を受けた。

「ぐっ…ぬおおああ!!」

凄まじい衝撃でミラーシンマの力が一時的に弱まった。

「今だ、イエロー！」

「オーケー！」

麒麟光舞陣!!」

召還した光の鎌を掲げ、ミラーシンマの周囲を光輝く魔法陣で取り囲む。

ドンと杖のように打ち下ろし術を作動させると、神魔の苦悶の絶叫と共に鏡に閉じ込められていた生徒達が飛び出してきた。

「さあ、今のうちに逃げるんだ！」

「あ、ありがとうレッド……」

安全な所へ人質を誘導させると、輝夜達は再びミラーシンマと対峙する。

「さあ、これで打つ手は無くなったぞ。

大人しくお縄についてもらおうか！」

「フッ……クククッ」

「……何が可笑しい？」

不気味な含み笑いを起こすミラーシンマに輝夜は警戒を強める。

「馬鹿め。我は鏡の魔物ぞ。

ここにあるようで存在せぬモノ。

——これ即ち……」

何かに気付いた智史が輝夜に向かって叫ぶ。

直後、激しい痛みが輝夜の左肩を襲った。

「うぐっ………！」

酷く焼け焦げた肩を押さえつけ、自分に奇襲を掛けた敵を見据えようとする。

前方を見た彼らの眼に飛び込んできたもの、それは――。

「……鏡像なり」

もう一体のミラーシンマだった。
二体に分かれし魔物は前方から、もう一人は後方へ移動しマイスマンを黒い光の方陣で囲む。

「しまった……！」

『マイスマン、今度は貴様等が命乞いをする番だ！』

食らえっ、ダブル魔天鏡光！！』

『うわあああっ！！！』

前後から放たれた稲妻の邪気がマイスマンの体を引き裂いていく。

「さあマイスマン、少しは他の守護獣神の居場所を吐く気になったか？」

「つつう……知るわけないだろ、んな事」

「例え知ってたとしても、教える気は毛頭ないっ！」

『ほう、ならばこのまま死に絶えるがいい！！！』

更に力を溜め、ミラーシンマは黒い稲妻の強度を上昇させていく。
敵の猛攻に三人のプロテクターがひび割れ、火花が飛び散った。

『あああああ！！！！』

「世那っ、星川君、結城君！！！」

仲間の危機を前に、沙夜子は矢も立てもたまらず飛び出した。

「あっ馬鹿！今出てったら……チッ」

仕方なしに勇人も沙夜子に続く。
いるはずのない二人を眼にして、マイスマンとミラーシンマは驚愕

した。

「嘘…っ、何で沙夜子と空蓮寺がここに!？」

「しかも俺達の名前まで呼んでたぞ。まさか…」

変身するところを見られてた!？

三人の顔からサァーッと血の気が引いていく。

いやそれは無いだろ、俺達の空耳だってきつと!

「聞こえる、世那!？ねえ星川君っ、結城君も!！」

「おい聞こえてんだろ、ダメガネども!返事しねえと仕事させるぞ!！」

気のせいじゃなかったあああ!!

しかも何でよりによってアイツまで!？

再度呼びかけてくる沙夜子を前に輝夜達は観念せざるを得なかった。
決して空蓮寺の脅しに屈した訳ではない。

ギギギと錆び付いたネジのように顔を向ける三人。

「良かった、聞こえてたのね…」。

待ってて、すぐに助けるから!さあっ、今こそ生徒会長の出番よ!
!」

「待て待てえっ!

白鳥達はともかく、何で俺が星川まで助けなきゃならねんだ!」

「そんなこと言ってる場合!？」

少しは素直になったらどうなの?」

「はっ?何がだ。

俺はあのダメオタクがウザイからそうしてるだけで…」

「貴方…一々煩いわよ？目の前で人が殺されそうだというのに…っ。ここで見殺しにしたら東京湾に沈…訴えるから！」

「今の副音声は何だ！？お前性格変わってるぞ……。」

あゝくそっ、わかつたっての！

ただし、奴には貸し一つ付けるからな」

忘れずに憎まれ口を叩くも、勇人は転がっていた石を手に取りミラーシンマに投げつけた。

所詮人間の悪あがきと鼻で嗤い、ミラーシンマは軽くはたき落とす。

「ククッ…小僧、馬鹿な真似は止めるのだ。

安心しろ。お前もあの小娘もマイスマン共々、陛下に献上してやるう。」

ありがたと思うがいい」

「一回ぐらい避けただけで調子に乗んなよ、クソがつ。

ためえの下につくと考えただけで虫唾が走るぜ」

「何！？我らの温情を無下にしておって……ハアアッ！」

鏡面からビームを放つが、持前の反射神経で勇人は飛び退る。

「空蓮寺い！！」

「余所見をしてる場合か？小娘」

「！！」

もう一体のミラーシンマが沙夜子の背後に迫っていた。

鞆を武器に応戦するが、ミラーシンマは力のない沙夜子が抵抗する様を緩い攻撃を加えながら愉しむ。

二人に危険が迫りながらも、ただ見ていることしかできない悔しさがマイスマンを苛んでいた。

「くそっ！！何が守護獣神だ！
こんな肝心な時に限って……！！」

苛立ちをぶつけるように、輝夜はドンと黒い障壁を力任せに叩く。

「戦う力のない君達が相手をするなんて無茶だ！
頼むっ、僕達のことはいいいから逃げてくれ！」

「お願いだから、沙夜子！
空蓮寺っ、あんたも沙夜子を連れて逃げて……！」

半ば泣きそうな声で懇願する二人に勇人は挑戦的に笑った。

「おい、勘違いしてんじゃねーぞアホども。
これは俺に売られた喧嘩だ。」

売られた以上は落とし前付けんのが俺の流儀なんだよっ！」

先ほどからギリギリで攻撃を避けているが、ところどころ制服は切り裂かれているのが三人にはわかっていた。
つうと勇人の頬に一筋、傷から血が流れる。
思わず輝夜が叫んだ。

「……っの馬鹿が！」

これは喧嘩とは訳が違うんだ！
死にてえのかバ会長……！」

「死なねえよ……！」
「……！」

「てめえを好きに扱っていいのは俺だけだ！
だから俺の所有物を勝手に扱ったこいつらに礼参りしてやるんだよ
……！」

「ああ！？勝手なこと抜かすな！」

後で覚えてるよ……」

どすを利かせた輝夜の一言に勇人はフツと口角をつり上げる。
続いて沙夜子も、所々切り裂かれ傷を負っていながら気丈に声を張り上げた。

「空蓮寺のふざけた言葉はともかく、こんな所で私達は絶対死なないわ！」

約束するわよ。貴方達を助けて、この悪趣味な怪人を倒すってね！
！」

その強い瞳に気圧され、三人は眼を見張る。

その時、輝夜の懐にしまっていた二つの腕輪が光を放ち出した。

強烈な閃光にマイスマンを始め、ミラーシンマ達も眼を覆う。

腕輪は輝夜の手を離れ、沙夜子と勇人の元にそれぞれ飛んでいった。

それを見届けた世那は二人に叫んだ。

「その腕輪に何か御守りにしてる玉をはめ込んで！」

直感的に沙夜子はお守り袋から白い石を、勇人は胸元にしまっていた蒼い石を取り出した。

迷わずそれを腕輪の窪みに嵌めこむ。

カチリという音と共に玉が強く光を放ち出した。

玉に呼応するように沙夜子の眼が白く、勇人の眼が蒼く輝き出す。

白い光と蒼い光が溢れ二人を包みこんだ。

光に包まれると、二人の中に覚えのない様々な記憶が流れ込んでくる。

白き狼……蒼き獅子グリフォン……そして――

覚醒のキーワードと共に、二人は己が何者か思い出す。

『獣神覚醒!!』

白い砂塵が舞い上がり沙夜子の身体を飲み込む。

勇人の腕輪からは蒼い神風が巻き起こり、彼を中心に渦を作った。

二匹の獣の雄叫びが上がり、白き狼と蒼きグリフォンが光となって宙に舞い上がる。

再び地上に舞い戻ると、砂塵と風が四散した。

砂塵が晴れた場所から、世那同様スカート付きの白いプロテクターに包まれた沙夜子が現れる。

面は狼で、頭部の側面には三日月が象られていた。

風の止んだ場所には蒼いプロテクターを身に纏った勇人が立っていた。

頭部の側面に鷲の翼が付いたグリフォンの面を装着している。

まるで最初からそうであったように、二人は戦士として名乗りを上げた。

「我は慈悲なる大地の騎士、マイスホワイト!」

「同じく気高き風の騎士、マイスブルー!」

二人の背後から二体の獣神が立ち上り、凄まじい咆哮が轟いた。

第3話 5人集結！戦う高校生 パート3（後書き）

次回、ダキニ登場！

ようやく次で5人集結編が完結します。

第3話 5人集結！戦う高校生 パート4（前書き）

やっとマイスマン揃ったー！

第3話 5人集結！戦う高校生 パート4

新たな守護獣神の出現に敵味方双方が動きを止める。

「嘘だろ…、空蓮寺もマイスマンだったのか!？」

「香月さんはともかく、空蓮寺は予想外だっ」

沙夜子が予想通りであったのに対し、空蓮寺がマイスマンだった真実に輝夜と智史は頭を抱える。

世那に至っては目の前で起こったことに呆然としていた。

新たな勢力にミラーシンマ達は色めき立つ。

「何？貴様らが最後のマイスマンだと……!？」

「馬鹿なっ、先程までは神気すらなかったと言っのに……!」

はっと眼を見開き、神魔は一つの可能性に思い至る。

「そうか、あの三匹も変身する前は只人だったな。

貴様らもよく好き好んで下司げすな人間に転生したものだ。

古の守護獣神も堕ちるところまで堕ちたということか、フッハハハハ!」

哄笑を上げるミラーシンマ達を一瞥し、黙って沙夜子は右手を掲げる。

その手から白い砂塵が噴き上がり、二刀の小太刀が形成された。

横目で確認した勇人はもう一体のミラーシンマに向けて戦いの構えを取る。

「言い残す遺言はそれだけかしら？」

なら遠慮なくいかせてもらっわ。
天狼地顎閃！！」

両手の白刃を交差させ、そのまま一閃に振り切る。
大地を走る斬圧は土を隆起させ、鋭い牙へと変えた。
次々と隆起する大地の牙が前方のミラーシンマに迫る。

「フンツ 無駄な事！魔天鏡光！！」

「計算済みよ、総て」

「何！？」

ミラーシンマの放った光線を大地の牙が飲み込んでいく。
慌てて後方のミラーシンマが攻撃しようとするも、勇人の放った光線銃で好機を逸した。

前方のミラーシンマは抵抗も空しく、沙夜子の攻撃を受けた。

「ぐおおあああ——っ！！」

前に三人の攻撃を受けていたこともあり、鏡面が激しくひび割れる。
ガクガクと全身を痙攣させ、ミラーシンマは膝をついた。

「おのれえっ、せめて貴様の息の根だけでも止めてやる！」

勇人と対峙していたもう一体が鋭利な爪を伸ばし襲いかかる。
上体を軽く逸らして避けると、勇人は左手に力を込め風を集め出した。

蒼い風は形をくねらせ、巨大風車手裏剣へと姿を変える。

中心部にある取っ手を掴み、神気を込めると刃が高速回転し始めた。

「神風螺旋驚撃！！」

思い切り巨大手裏剣を振り上げ、勢いのまま敵目掛けて投げ放つ。
手裏剣は蒼い風を身に纏い、螺旋を描きながら神魔の向かっていく。
刃の回転速度に加え、勇人の投じた勢いにより残像すら残さず、ミ
ラーシンマの側を通り抜けた。

「馬鹿め、外してどうする！」

「フツ……お前、頭に蛆でも湧いてんじゃねえか？」

「よーく身体を見てみる」

「負け惜しみか、小僧？」

貴様の攻撃は我にかすり傷一つ付けていないだろうが」

油断しきったミラーシンマに勇人は嘲笑を浮かべる。

右手でパチンと指を鳴らすと、つい今しがた嗤っていたミラーシン
マの声がピタリと止まった。

「な、何故っ身体が動かん！

あ……があっ、ああああ……！！」

獣のような咆哮と共に全身の鏡がひび割れていく。

カツンとアスファルトを踏みしめ、勇人が巨大手裏剣を手に神魔の
元へ一歩進みだした。

「これが俺の力、神風だ。

俺の放った手裏剣は例え直接当たらずとも、生じた風がかまいたち
の如くお前を切り刻むぞ」

「うつぐうつあ……っ」

凄まじい攻撃に身体が耐えきれなくなったため、輝夜達を封じ込め
ていた結界が崩壊した。

それと共に分裂していたミラーシンマが一体に戻る。

「やった、壁が消えた！」

「ありがとうホワイト、ブルー、助かったよ」

「いいえ、ブラック、イエロー。」

仲間として当然のことをしたまですよ」

「いいや、二人がいてくれなかったらどうなってたことがお陰で命拾いをした」

輝夜の言葉に世那と智史も強く頷く。

「おい。友情ごっこはその辺にして、さっさとこの雑魚を片付けろぞ」

「……つたく、覚醒してもこの調子かよ。」

まあ気を取り直して、合体技いくぞ——！」

言うが早いか、輝夜は焰の日本刀を構える。

続いて智史が水の槍を、世那が光の大鎌を前へ突き出した。

そして沙夜子が白砂の小太刀を二刀交差させ、勇人が風の巨大手裏剣を手にする。

「いくぞ——！五神気集結！」

『エレメンタル・シュート——！』

焰、水、光、土、風の神気が七色の渦となりミラーシンマを貫く。

「ダキニ様っ、御助けをおおお——！！！」

謎の名を叫びながら、ミラーシンマは爆発し消し飛んだ。

ミラーシンマの呼んだ名が気にかかったマイスマンだったが、激しい戦いが一段落つき張りつめた緊張を緩める。

「まさかホワイトはともかく、ブルーがマイスマンだったなんてな。例の玉をきちんと持ち歩いていた事といい、絶対あり得ねえと思つてたしよ」

思わず溢した輝夜の本音に勇人以外の三人がうんうんと首を振る。一人勇人だけは不貞腐れた態度で首を斜めに傾けていた。

「けつ、それはこっちの台詞だぜ。」

お前みたいなヘタレオタクがヒーロー…しかもレッド？
人選ミスもいいとこだろ」

「何おおお！？」

てつめえみたいな性悪がヒーローってことの方が重大な人選ミスだろおーが！！」

小学生レベルの喧嘩に智史達は呆れかえって額に手を当てる。

「喧嘩するほど仲が良いとは言っけれど……」

「これは…違うんじゃないかしら？」

「全くもうつ、二人ともいい加減にしな！！」

早いところに見つかる前に退散するよ…——って、え？」

突如鳴り響いてきたシャンという鈴の音に世那が気がつく。

他のメンバーも音に気付き、警戒心を募らせる。

鈴の音はいよいよ激しさを増すと、不意にピタリと鳴り止んだ。

慎重に辺りを見渡すマイスマン。

視線を感じ輝夜が宙を見上げると、一枚の桜の花びらが舞い降りて

きた。

おかしい、こちら辺に桜の木は無かったはずだが。

なおも桜の花びらは舞い降りてくる。

桜の花びらに乗せて、囁くような甘い声音が降って来た。

「ふむ、やはりミラーシンマでは力不足であったようじゃの……」
「誰だ!？」

厳しい誰何に妖艶な微笑が応える。

通学路一帯に哄笑が溢れると、無数の花びらがマイスマンに襲いかかってきた。

『うわああっ!!』

桜吹雪はマイスマンに触れると、小さな爆発を起こした。

突然の攻撃を受けて火花を散らしたマイスマンは傷ついた身体を庇う。

ようやく桜吹雪が止み視界が晴れると、マイスマンの面前に十二単を纏う雅やかな女が浮かんでいた。

艶やかな美貌ではあったがその面は死人のように青白く、頭部には人には有り得ぬ狐の耳が生えていた。

妖艶な微笑が冷たい美貌を彩る。

「こうして会うのは初めてかのう、守護獣神達よ。

初にお目にかかる、わらわは神魔四天王が一人、ダキニ」

新たなる刺客の登場にマイスマンは気を張り詰める。

「貴様が……ダキニ」

「如何にも。その面と神気からするに、お主が天龍王の生まれ変わりじゃな？」

ミラーシンマ相手ではお前達も物足りなかったであろうし、わざわざに遊んでやろう。

少々、手合わせ願おうか？」

言うが早いか、神速で眼前にいる輝夜に肉薄する。

「くっ……！」

瞬時に龍炎刃を抜き、ダキニの鉄扇を受け止める。

「ほほっ…流石は天龍王。

腕は鈍っておらぬようじゃの。

だが、これが限界ではあるまい……のう？」

「ダキニツ、貴様ら一体何を企んでやがる！？」

「それを聞いたところでお主に何ができようぞ。

愚かにもこの地球を蝕む人間どもを庇い、のさばらせる無能な神如きに」

「黙れっ！！」

ギインと音を立て弾き返せば、するりと避けたダキニは舞うように扇を薙ぎ払う。

扇から放たれた風圧は刃となり、他のメンバーにまで及んだ。

咄嗟の判断が功を奏し、全員召喚した武器で直撃を免れる。

「この程度かお前達の力は？」

余興にしては面白くないのう…フッフッ」

攻撃を仕掛けたくとも、矢継ぎ早に技を繰り出すダキニに防戦一方となる。

一際大きな斬撃を繰り出そうと、ダキニが鉄扇を振り上げた僅かな隙を逃さず勇人が動いた。

「獣と鳥の力、舐めんなよ。

鳥人化！」

蒼い光と共に勇人の背中から光の翼が生えてきた。

一瞬でダキニに動く間も与えず、今度は勇人から接近する。

「…っお主の神速、まさか鳥獣王^{ちゆうじゆうおう}か！」

「だったらどうした。怖気づいて逃げる気か？」

それとも、この俺と空でスピード勝負しようつてのか？」

挑発的な勇人の誘いにダキニは眉を跳ね上げる。

「見くびるでないぞ、鳥獣王…いやマイスブルー！
げっえいおうかしよう
月影桜花翔！！」

扇で弧を描くようクルリと舞うと、空間が闇に変わり激しい桜吹雪が渦を巻いて勇人に迫った。

「神風螺旋驚撃！！」

力と力がせめぎ合う。

僅かにダキニが押したように思えたが、勇人以外の神気が押し掛かりダキニの力を押し返していく。

下を見れば、輝夜を始め全員が勇人の攻撃に助力していた。

「みんな、ブルーの攻撃に乗せてあいつを叩くぞ！」
『了解！！』

それを横目で見て、礼は言わねえぞと勇人が零す。

「む、これは他の守護獣神のか！？」

まずいの…わらわも四天王一の速さを誇るが、相手が鳥獣王では分が悪いようじゃ。

しかも他の守護獣神、特に天龍王までおっては軽い怪我では済むまい。

「やれ、仕方ない。ここは退却するとしよう」

勇人達の攻撃があと少しで届くかという間際、ダキニは桜吹雪と共に消え失せた。

「おいつ、待ちやがれ狐女！」

仕留め損ねた悔しさに勇人は齒噛みする。

背中の羽を仕舞うと彼は緩やかに下降していった。

ふわりとアスファルトの上に降り立った勇人の元に輝夜達が駆け寄って来る。

「奴はどうなったんだい、ブルー？」

智史の問いかけに勇人は不機嫌そうに鼻を鳴らす。

「尻尾巻いて逃げやがった。」

くそつ、あと少しで仕留められたのによお……！」

「残念だったわね。」

ここで幹部を捉えることができれば、今後の戦いが有利に運んだかもしれないのに」

「まあ終わったことは仕方ないよ、ホワイト。」

それに私達、これで二度……いやレッドのを含めると三度に渡って神魔を退けることができたんだよ。

次だってこの面子なら何があっても勝てるよ、絶対！」

世那の前向きな言葉にみんな元気をもらう。

向日葵のような明るさに輝夜はふっと微笑を浮かべた。

「そうだな、イエローの言う通りだ。」

転生者が揃い、マイスマンとして覚醒した今の俺達なら何があっても大丈夫だしな。

改めてみんな、神魔を倒すまでよろしく頼むぜ！」

「勿論、親友の頼みなら当然のことさ！」

「水臭いこと言わないでよ、倒した後もよろしくだよ？」

「そうよ、レッド。今度は昼休みだけじゃなく、戦友としてもよろしくね」

「……言っておくが他の奴らと違って、俺は神魔との戦闘以外はてめえと馴れ合うつもりはねえからな」

皮肉っぽい態度を崩しもしない勇人に世那は呆れる。

「全く、一人空気読めてない奴がいるんだから」

「フンッ」

やれやれと肩を竦める四人だったが、遠くから一人の刑事が角から

現れたことに気づく。

遠山警部だ。

「おっおい、ブラック！あの刑事って小学校にいた人じゃ……」

「拙いな、あの時も追いかけられたから早いとこ退散しないとっ」

「あああつ、お願いだから気付かないでえ！」

慌てだす輝夜達三人の願いも空しく、遠山の視線がこちらに向けられた。

前方にいた遠山の方も漸くマイスマン達に気付く。

丁度巡回中だった遠山警部は、先ほどこの通学路から現れた誘拐事件の被害者達を保護したばかりであった。

その問題の地点で、以前小学校の事件があった時に現れた謎の戦士達がまたいたのだ。

偶然にしては出来過ぎている。

「おっ、お前達はあの小学校にいた……！！」

マイスマン達を逮捕しかねない勢いで遠山が迫って来る。

いまいち状況がわかっていない沙夜子と勇人だったが、この調子じゃ正体が露見しかねないことぐらいはわかったようで身を翻した。

「それじゃ……お勤め御苦労さまです、刑事さん！」

輝夜の一声を最後に、五人は遠山を振り切ってこの場から退散した。

「待てえっ！くうっつ、またしても逃げられたか！！」

次こそあの戦士達を捕まえ、事件と神魔との関係を吐いてもらうぞっ

「遠山君」

夕日を前に地団太を踏んでいた遠山へ、眼鏡をかけた細い中年男性が声を掛けてきた。

ここにくるはずのない人物に遠山は驚く。

「花形警視長、今日は本部に呼ばれていたはずでは？」

「そうだったが、警視庁長官直々に君への命令を戴いたもんでね。早速、指令を伝えにきた」

「私に……ですか？」

「そうだ。マイスマンと名乗った戦士達について彼らの正体と所在を明らかにするようにと」

「……わかりました。謹んでお受け致します。

ただ、何故私なのですか？」

確かに今回と前回の事件には全面的に関わってきましたが」

腑に落ちない顔で遠山は上司を見やる。

言外に自分以上に優秀な刑事はいるだろうに、何故と言いたいのだろう。

花形は静かに答えた。

「警視庁は総理官邸に寄せられた、幻妖帝国神魔と称するテロ集団の降伏を迫る通信を重く見ている。

当初こそは小規模な脅しと考えていた上層部も、この度の事件の異常さを目の当たりにしたことで意見を変えたようだ。

以前にも似たケースの事件はあったが、残念ながら事件で生き残った証人が当時九歳の子供だったこともあり相手にされなかった」

当時の事件という言葉に、遠山の顔が険しさを増した。

忘れようがない、異常で凄惨なあの事件を！

「君はあの当時新人とはいえ、事件の捜査に参加していた。

あの頃は主力で力を奮うことはできなかったが、今なら……」

「私は、ずっとあの事件を解決できずにいたことを悔やんでました。忘れられないんです、あの男の子の顔を……言葉を」

化け物がお母さんを殺したと言っていたあの少年。

しかし、誰が母親を刺したかという記憶だけが喪失していたため、事件のショックで精神に異常をきたしているとして相手にされなかった。

「新人だった私には力がなく、あの子の無念をはらせませんでした。ですが、今は違う！」

今度こそは奴らの……神魔の尻尾を掴み、九年前の事件の真相を突き止めてみせます……！」

真摯な遠山の思いを受け、花形も久々に胸を熱くした。

「我々も出来る限り、捜査に協力する。しっかりやりたまえ！ところで、捜査についてだが何処から進めていくつもりだ？」

「まずは原点に帰り、九年前の事件から調べ直したいと思います。そのためには事件の生き残りである少年にまた話を聞く必要があるでしょう」

「その少年の名は……？」

「確か、あの子の名前は……——」

——星川輝夜。

第3話
完

第3話 5人集結！戦う高校生 パート4（後書き）

次回はロボット初登場回！

あれ、変形できないと言ってたっけ？

全ては伏線です！

ここまで読んでくださり、ありがとうございます。っ

番外編 自己紹介その1（前書き）

お待たせしました！

今回は会話形式でお送りします。

完全に桃川のお遊びです。

今回は初期メンバー3人の紹介になります。

二人はまた今度で。

番外編 自己紹介その1

輝夜／以下力：「さて、やって参りました！

第一回、ドキッ ヒーローだらけの暴露大会ー！！」

智史／以下サト：「ポロリはないよー。

女子二人のアレやコレなんていうサービスシーンを期待してた人、ほんとごめんねえ」。

その代わり、別ので埋め合わせするから……」

世那／以下セ：「ちよつ、あんたら私達に何やらせる気！？

画面の前のみんなー！！この腹黒優等生の言う事信じちゃダメだから！」

力：「じゃあ他に何やるんだ？

お前と香月さんのポロリがないんじゃ、健全な男子諸君は萎えるだろ。

仕方ねえな、ここは一つ俺の特撮豆知識を披露するか！」

セ：「あのさあ結城、何も男子だけが見てるわけじゃないんだし、女子向けのサービスも考えた方がいいんじゃない？」

サト：「それもそうだね。

じゃあどういうことをやったら女子を喜ばせられるかなあ？」

力：「聞けよ」

沙夜子／以下サヨ：「私は男の子同士で色々仲良くやってるところを見せればいいと思うわ（微笑）」

カ・サト・セ：『香月さん（沙夜子）！！』

セ：「いつの間に来てたの？」

サヨ：「今さっきよ。空蓮寺もそろそろ来ると思っわ」

ガラガラ（教室の引き戸を開ける音）
気だるそうな頭をもたげ、勇人登場。

勇人／以下ハ：「ったく、たりいーな。

何で俺まで来なきゃなんねーんだよ」

サヨ：「往生際が悪いわよ？」

今回集まったのは自己紹介のためなんだから」

ハ：「んなの、本編読んでりゃわかるだろうが」

カ：「てめーは一々ケチつけなきゃ気が済まねーのか？」

本編じゃ公開しようがない俺らのプロフィールを、ここで皆さんにご紹介するんだろっ」

ハ：「バカで間抜けなダサオタクの個人情報なんぞ、知りたがらねえだろうがな（笑）」

カ：「喧嘩売ってんなら倍返して売り返すぞ、バ会長」

サト：「はい、ストップストップ！

二人とも喧嘩なら終わった後でしてくれよっ。

とりあえずはマイスレッドから自己紹介だよ、ほら！」

《輝夜編》

力：「俺は星川輝夜ことマイスレッド！

赤龍と飛龍を足して2で割ったような獣神さ。

誕生日と血液型は12月31日のO型だ。

身長は186センチ。髪の色は黒、眼は赤に近い茶色——紅茶色って言うのかな？

見た目は……聞くな（泣）

少なくとも女子からモテたことは一度もない！

容姿は典型的な分厚い黒ぶち眼鏡で前髪は長め、後ろ髪は適当な長さまでほつといたから肩ぐらいまであるんじゃないか？

とにかくいかにもオタクって言われそうな格好だぞ、おまけに色白だし…。

まあ髪ぐらいは少しでも見苦しくならないよう、後ろで一つにまとめるけどな」

サト：「ちなみに僕らの学校は校則が緩いから、どんな髪型でも許可されてるんだ。

話は変わるけど、輝夜の声ってカッコいいよね。いかにもヒーローって感じで！

声優になっていいと思うよ、歌上手いし。

素顔に関しては僕も見ただことないからどうとも言えないけど」

力：「よせやい！照れるじゃないか」

セ：「調子に乗るんじゃないっつーの！

でも結城が星川の眼鏡無しバージョン見たことないのには驚いたなあ。

一年の頃からの付き合いなのにな？」

サト：「だってこの学校、プール学習ないじゃないか。輝夜は体育でも常に眼鏡付けてるし」

サヨ：「それでも少しは眼鏡を外したりするんじゃないのかしら？ほら、雨の日で眼鏡が濡れた時とか」

カ：「もちろん外して拭いてるよ。」

ただその時、智史が見てなかったただで」

セ・サヨ：『ええええ〜っ！！もったいない！！』

カ・サト・ハ：『どこが？』

カ：「おつ、珍しく意見が合ったな空蓮寺。」

ちつとも嬉しくないが」

ハ：「残念ながら同意見だな。」

まあ理由を言うなら、こいつのすっぴん見たところでたかが知れてるだろうつてこった」

カ：「けっ、ヤなやつ！」

セ：「うつわあ……。さすが全校イケメンで通ってるだけあって、すんごい上から目線！」

普通、ここまで言えないわあ」

サト：「やれやれ、またバトルが始まる前に收拾付けるか。」

ほらー、二人とも話戻すぞお〜！

言う事を聞かない悪い子にはもれなく香月さんのハリセンが飛んでくるからねー」

サヨ：「（ハリセンを構えながら）二人とも、覚悟はよろしくて？」

カ・ハ：『すいませんでした！！』

サト：「で、話を戻すけど、輝夜の素顔なんてそのうち見られるだろうから無理に見る必要ないと思うよ」

カ：「そうそう。別にこつちも隠してるわけじゃないからな。ネタばれになるからだそうだし、そのうちってことだろ……作者の都合だ」

セ・サト・サヨ・ハ：『待て待て待てええーいつ！！！！』

サト：「それ言っちゃまずいつて！
世界観ぶち壊しだよ！！」

カ：「安心しろ。

ここでは色々と補正がきく設定になってるから（力説）！」

サヨ：「…本当かしら？」

そこはかとなく不安が残るわね」

カ：「大丈夫だよ、香月さん。

だって俺達は元々二次げ…モゴっ！！」

勇人、慌てて輝夜の口を塞ぐ。

ハ：「おいっ、この馬鹿が下手なこと言いださねえうちに話進めるぞ！」

サヨ：「（星川君の口を手で塞ぐなんて…）おいしすぎるわっ、色々な意味で！」

サト：「（なんか異様に熱い視線ぶつけてるな、香月さん）えーっと、じゃあそろそろ僕の自己紹介に移らせてもらおうかな（汗）」

セ：「えー！せっかく二人がいちゃいちゃしてるレアシーンが見れたのに……」

サト：「どう間違ったらそう見えるんだよっ（こんの腐女子共が！）」

《智史編》

サト：「では気を取り直して。

僕は結城智史ことミスブラックだよ。

玄武という亀に蛇が巻き付いた獣神の生まれ変わりなんだ。

もっとも、僕に限らずみんな前世では獣型じゃなく主に人型の姿で生活してたんだけど。

あ、まだ自己紹介の途中だったね。

誕生日と血液型は9月15日のA型だよ。

身長は179センチ。髪の色は薄い茶色で短髪だけど首の後までかかるぐらい。

猫っ毛でわりとさらさらなのが悩みなんだ、ワックスで纏めにくいから…。

眼の色は緑のかった褐色で、形は丸っこいほう。

容姿に関しては中肉中背で、きゃしゃに見られるよ。

これぐらいかな？」

カ：「ずいぶん大人しい紹介だなあ。

代わりに俺が補足しておくが、智史は空蓮寺と張るぐらいモテるぞ。タイプで言うなら癒し系の歌のお兄さんだな。

勉強に関しては俺と一緒に遊んでる割に成績いいんだよなあ」

サト：「でも絵だけは苦手なんだよ」

セ：「そうなんだよね、花を描いたら何故かライオンになってるし。

まあ一つぐらい苦手なものがあつたほうが取っつきやすくていいと思うな。

イケメンな上に完璧だったらちよつとね（苦笑）」

サト：「褒めすぎだよ、二人とも。

僕は自分でそう思ったことは一度もないし」

セ：「えーっ、無自覚にも程があるって！

星川の言う通り、学園で一二を争うほど女子から人気あるし。どっちがカッコイイかって聞かれたら困るんだけどさ」

サヨ：「二人ともタイプの違う美形なもの」

サト：「……（照）」

ハ：「おい、顔赤くなってるぞ」

サト：「そっ、そんなことないって！これはその…ちよつと熱いからでっ」

カ・セ・ハ：『ニヤニヤ』

サト：「もういいだろっ！！」

僕の紹介はこれぐらいにして、白鳥に回してよー！」

サヨ：「残念だわ、もう少し結城君のこと聞きたかったのに」

サト：「えっ、あ……その、別に大して話せる内容じゃないしっ」

サヨ：「そんなことないわ！

結城君の、学校ではわからない一面が見れて良かったもの」

サト：「そっそう？それなら、いいんだけど（赤面）」

力：「青春だなあ（しみじみ）」

セ：「ほんとにねー」

ハ：「それはいいが話進めなくていいのかよ」

《世那編》

セ：「はい、やっと私の出番だね！

私は白鳥世那、変身後はマイスイエローって名乗ってるんだ。

中国とかで語り継がれてる麒麟という獣神だよ。

身長は170センチ。髪は赤みを帯びた茶色で、肩ぐらいの長さ。毛先が外側に跳ねてる癖っ毛なのが悩み！

眼は琥珀色で、丸みのあるアーモンド形。

結構、周りからは男勝りって言われるなあ」

力：「確かにガッツだし口調も荒いけどスタイルは抜群だよな。

あ…そういや、なあーんか足りないと思ってたらお色気成分が無かったんだ！！

白鳥っ、今こそ読者サービスの時だ！

さあ、今すぐその自慢の爆乳のサイズを公表し…」

セ：「ざっけんなあああ！！

こんのエロ眼鏡が！」

カ：「ぐふおおおおっ！！」

輝夜、派手に口から血飛沫を上げ、宙を舞う。

セ：「ふう……久々良い運動になったわあ〜（ニッコリ）」

サト：「かつ輝夜！？輝夜あー！！

しっかりするんだ！」

ハ：「（女って怖ええな……）」

サヨ：「世那ったら…ハア。

黙ってれば美人なのに、勿体ないわね。

世那に代わって私が答えますけど、星川君の言う通り彼女はかなり巨乳よ。

サイズはHカップぐらいね。肌は割と白いほうよ。

ウエストは締まってるし、ヒップもそれなりだからとてもメリハリのある体型なの。

容姿と性格を一言で表すなら、向日葵ひまわりかしら」

セ：「ん？何か言ったあー、沙夜子？」

サヨ：「友人から見た世那の一面を紹介してたところよ」

ハ：「まあ自分で言うのと他人から言ってもらうんじゃあ違うからな。

案外人から指摘されることで、自分の知らない一面に気付いたりするもんじゃねえの？」

セ：「ふうん、空蓮寺もたまにはまともな事言うんだ」

ハ：「たまにはとは何だ。

言つとくが、ダメガネを除く生徒にはきちんと接してるぞ」

サヨ：「確かにそうだけど、星川君に対する態度があんまりだからそつちの印象が強すぎるのよね」

セ：「そうそう、あんた最近は特に調子乗りすぎっ！

あんまり星川いびりしてたら、空蓮寺×星川の同人誌出すからね！

」

輝夜、恐ろしい宣言に勢いで復活！

カ・ハ：『やめろおおおお！！！！』

カ：「待て、何で俺までそういう扱い受けなきゃならない！？

諸悪の根源は空蓮寺だろぉーが！！」

セ：「諦めなさい、いずれはこうなる運命だったの……」

カ：「何だ、その宿命論」

サト：「つかぬことを聞くようだけど、どっちが攻めでどっちが受け？」

ハ：「それを聞か結城（怒）」

サヨ：「あつ私わかつたわ！

たぶん…ごによごによ（世那の耳元に囁く）」

セ：「正解！さっすが私の親友だね

ちなみに正解は攻めが空蓮寺、受けが星川でしたー」

力：「……獣神、覚醒！！」

焰に包まれた後、マイスレッド登場。

力：「人心を惑わす悪しき風習をばら撒く腐女子、白鳥！

貴様のような輩は俺が成敗してくれる、いくぞ！

絶・龍炎じ……」

サト：「わああ——っ、ストップストップ！！」

慌てて智史もマイスブラックに変身。

サト：「だあめだつて、レッド！

今は自己紹介の最中なんだから抑えてっ」

力：「はっ放せ、ブラック！

これは基本的人権を守るための戦いなんだ…、ここで引いたらこいつらの妄想の餌食にされた同胞たちの未練はどうなる！？」

サト：「話だけ聞いてたら、物凄い悪の組織との闘争だよなそれ。無駄に壮大だよ」

ハ：「実態はオタクVS腐女子だな。

まあ俺様も今回ばかりは奴と同意見だ。

傍迷惑な妄想を繰り広げる女ども、お望みどおり…お仕置きしてやるよ（ニヤリ）」

サヨ：「！これ、普通の女の子だったら今でノックアウトされるわね」

セ：「じゃあそうならない私達は普通じゃないってことか」

サヨ：「見慣れてるからかしら？」

カ：「フツ、余所見をするとは随分余裕だな。来ないのならばこちらから行くぞ！」

セ：「あんた…キャラ、変わってるんだけど（汗）」

サト：「どう見てもレッドの方が悪役だな。

てか、駄目だって言ったじゃないか！

ほらさっさと変身解くんだった！」

カ：「やだね！こいつの腐った脳髓入れ替えるまでは絶ええっ対拒否する！！」

サト：「まったく、いつになく頑固だな！なら実力行使あるのみ！水蛇裂破槍！！」

カ：「龍牙雷翔！！」

セ：「あわわっ、何かまずいことになったかも！」

サヨ：「今のうちに謝ったほうがいいわよ。

ほら空蓮寺まで変身の構えを…」

セ：「わぁーんっ、二人とも悪かったってばぁー！

ちょ、空蓮寺！？風車手裏剣はやめて！！

あ、あれ…、何でレッドが目の前に？

はうっ、ブラックが焼け焦げてるし！！」

じりじりと世那に迫るレッドとブルー。

ハ：「おい、白鳥。

人をオカズに使った罪は重いぜ？」

カ：「さあて…お前、俺達にどうされたい？」

セ：「あっははは、えーと勘弁するってのは（冷汗）？」

カ・ハ：『無しに決まってるんだろ』

カ：「安心しろ。

たくさん、いかせてやるよ。地獄へなあ！！」

《しばらくお待ちください》

サト：「うっっ…全身が痛い。

あれ香月さん、三人はどこに？」

サヨ：「…命懸けのフルマラソンへ挑戦中よ」

ひとまず完……？

番外編 自己紹介その1（後書き）

原作よりもはっちゃけ過ぎました。
キャラ崩壊もいいところですね。

番外編 自己紹介その2（前書き）

前回の続きです。

番外編 自己紹介その2

サト：「やあ、皆さん！」

前回から引き続き、残る二名の自己紹介をしていくよ！

空蓮寺は輝夜と一緒に白鳥を振るぼっこ…いやお説教してるから、香月さんからだよ」

《沙夜子編》

サヨ：「私は香月沙夜子といいます。変身後はミスホワイトです。学校では副会長を務めているの。」

誕生日は1月1日で、血液型はO型よ。

身長は165センチで、胸の大きさは…世那のを教えたからには私も言わなきゃいけないのよね？

えっと、その、ぐぐらいかしら……（小声）

こういう時だけは世那の横に並びたくないわね（差が目立つもの）。髪は翠がかった黒のストレートで長さは腰まで。前髪は綺麗に下ろしてるの。

眼は切れ長のアーモンド型で、赤みのある漆黒をしているって言われるわ」

サト：「僕らの高校では白鳥と並ぶ美少女なんだよ。」

白鳥がボーイッシュな元氣アイドル系なら、香月さんは清楚な大和撫子かな？

輝夜と同じぐらい白いし、睫毛も長くて濡れたような瞳が印象的だからなあ…。

花に例えるなら白百合が一番しっくりくると思うんだけど…」

サヨ：「ゆっ、結城君……（照）」

サト：「えっ？あ、ああっ、変なこと言ってごめん！

いや、ただそのっ、香月さんは一度見たら誰もが忘れられないような綺麗な顔だと思って…。

何となく花に例えてみたくなっただっていうかそれだけでっ……」

カ：「いやあ、青春してるねえ、智史君」

サト：「輝夜！？い、いつからそこに…。

それより、白鳥へのお説教はどうなったんだ？」

カ：「ああ、あいつならあそこ」

指さした先に、段ボール箱を机代わりにして反省文を書かされている世那発見。

セ：「あゝっ！何で私がこんなことしなきゃなんないんだよー！
！」

ハ：「人をネタに使おうとした罰だ。
きりきり励めよ」

セ：「くっそおー！

今度こそ、本当にネタにしてやるう（小声）」

ハ：「ん？何か言ったか？」

セ：「…いいえ（チクショォー！）」

サト：「やれやれ、白鳥にも困ったもんだ」

カ：「妙な妄想さえなければ可愛いのに……残念だな」

サヨ：「（そ、その理論で言うと私も残念な人に……！？）」

カ：「あれ、香月さん？」

顔色悪いけど、大丈夫？どっか具合悪いんじゃない？」

サヨ：「えっ！？あ、ううんっ大丈夫！

全っ然、平気だから気にしないで。うん……」

カ：「そ、そう？ならいいんだけど」

サト：「（思いつきり動揺しまくりだなあ……）」

サヨ：「それはそうと、残る自己紹介のために早く空蓮寺を呼びましょう！」

カ：「あ、すっかり忘れてた！

ま、別にあいつのプロフィールなんざいらないと思うけど仕方ないか。

おーい、空蓮寺！説教はそのぐらいにしてちゃっちゃんと個人情報暴露しにこーい！」

ハ：「ああ！？ヘタレオタクが俺様に指図してんじゃねえ！ちっ、もうちょいこいつで遊べると思ってたのによお」

セ：「ほっ……」

ハ：「俺様が最後つてわけか。」

まあいい、その分目立てるからな！

俺は空蓮寺勇人。この学校の生徒会長をやってる。

変身後のコードネームはマイスブルーだ。

誕生日、血液型は5月5日のAB型。

身長は189センチで、このメンバーでは俺が一番でかいぜ。

肌色はやや黒いっていうか小麦色って奴か？

周りはそう言ってたな…。

髪型はウルフカットにした短髪で若干後ろ髪があるぐらいだ。

前髪は軽く浮き上がった感じで、一応額が見えるよう左右に分かれてるな。

髪色はアッシュの入ったダークブラウンだが、れっきとした遺伝で染めてないぜ。

眼は丸みの無い鋭く釣り上がった形だな、平行四辺形を横に伸ばした感じが。

色は紫でこれも遺伝だ。これぐらいか」

セ：「思えば空蓮寺つてこのメンバー中、一番目立つ容姿だな。眼が紫つて日本人じゃありえないし」

ハ：「俺の母方のばあさんがイギリス人だったからな。

おそらくばあさん譲りだろ」

サト：「じゃあ英語とか少し話せたりとか…」

ハ：「軽い挨拶程度のレベルだ。

ばあさんは日本語べらべらだし、あまり覚える必要が無かったな」

カ・サト・セ・サヨ：『へえ』

力：「案外そんなものかあ。」

身近に外国人の身内がいたら喋れるようになって思ってたけど」

ハ：「そこまで甘くないぞ。」

親が外国人でも、片親の言葉しか通じないなんてさらにあるからな」

力：「…そうなのか（英語の受験、楽なんだろうなと思ってたのに）」

ハ：「何だ、受験が楽になるとでも思ってたのか（ニヤニヤ）」

力：「べつ別にそこまで思ってたねーしっ！」

ハ・サト・セ・サヨ：『（思ってたのか…）』

サト：「まあ地道な努力あるのみさ！」

力：「結局、赤本のお世話になるっきゃないのか」

サヨ：「そう言えばずっと思ってたんだけど、どうして空蓮寺は星川君にちよっかい出すようになったの？」

サト：「いきなりそれ突っ込むんだ」

サヨ：「だって気になるじゃない！
蛇蝎だかつの如く忌み嫌ってるんだもの…。」

これからは同じチームメイトなんだし、もう少しこの状況をどうにかしないと」

セ：「確かにこのまんまだつたら戦闘に支障きたすかも。
で？肝心な理由の方は何なわけ？」

ハ：「……わかんねえ」

カ・サト・セ・サヨ：『は？』

ハ：「だからっ、わかんねえって言うてんだろ！
何となくこいつ見た瞬間、胸がざわついたっていうか、気に入らねえって思ったんだよ」

サヨ：「一目惚れならぬ、一目嫌いって言うのかしら？これ」

サト：「却って根が深いな、理由が感情だけに」

カ：「こつちとしては堪ったもんじゃないぞ。
そんなつまらん理由で……いい迷惑だ」

セ：「まあねえ、そりや当事者としては腹が立つしな。
でも本当に気に入らないってだけかなあ？」

ハ：「あ？何が言いてえんだ、てめえ」

セ：「何かの本に書いてただけどさ、愛と憎しみは表裏一体らしいよ？」

空蓮寺が星川にちょっかい出すのも、実は……」

ハ：「ほう、またみかん箱の上で反省文書くか？」

セ：「いっ言つとくけど、今のは腐った思考で纏めたわけじゃない

から！

本当にその可能性があるんじゃないかと思っただけだし」

カ：「…その可能性は限りなくゼロだと思うぞ。
いい加減現実を見る」

セ：「ガーン！！」

現実と二次元の区別が付かないようなオタクから言われたぁー！」

カ：「そのぐらい付いてるわ！

わかってる上で、愛する特撮ヒーロー達の活躍を楽しみにしてるだけだー！！」

ハ：「……やっぱこいつと上手くやっていくのは無理だな。

余りにも痛すぎる、おっと頭痛が……」

カ：「俺もお前見たいな性悪の傍にはいたくないな。

毎日嫌味を言われて胃薬の世話になりそうだし」

セ：「あゝあ。とことん仲悪いなあ、この二人。

まあ学園内のいじめ主犯といじめられっこが同じチームになること自体ありえないことだし」

サト：「ここまで来ると運命のいたずらを感じるよ。

空蓮寺も守護獣神ってことは心の奥底には正義を持ってる……はず、
だと思っただけど」

サヨ：「途中の間がとても気になるわね。

でもその気持ちはわからなくはないわ。

私も未だに空蓮寺が守護獣神であることが信じられないもの」

サト：「そうだね。でもいずれ空蓮寺が何故守護獣神なのかという謎は解けていくと思うよ。」

その時、彼が輝夜に感じた苛立ちの原因もわかるかもしれないし。そこからは空蓮寺にとっての真のスタートラインだろうね」

サヨ：「…そうね、そうかもしれない。」

なら空蓮寺が気付けるようになるまでお互い大変ね」

サト：「まったくさ！ストーリーが進むまで我慢してないといけなしっ。」

早く作者に書けて急かしてるんだけどね…」

サヨ：「呆れるくらい遅いものね。」

早くロボットを出して欲しいわ、もしくは六番目戦士！

神魔に対抗するにはいずれ新たな戦力が必要になってくるでしょうし」

セ：「そうそう。やっぱり戦隊ものである以上、その二つは欠かせない要素だよな」

サヨ：「あらお帰り、世那。」

星川君達は？」

カ：「俺達ならここだよ」

空蓮寺、どこか不機嫌そうにぶすくれている。

ハ：「結局自己紹介の後半はぐだぐだで終わったな。」

俺様のことっつーより、どうでもいい話題だったしよお」

カ：「あー、そのことだが作者からの手紙によると、これ以上はネタばれになるから追々本編で明かしていきますだってさ。せつかくだから、その時までとっとけばいいんじゃないか？」

ハ：「お前の方が俺より紹介長かったぞ……（怒）」

カ：「それについてもだが、あの程度ならネタばれに入りませんだ
とよ。」

むしろ、ネタばれ防ぐためのカモフラージュらしい」

サト：「裏を返して言えば、それだけ輝夜は謎が多いってことだな。
まあ本編の主人公だしね！」

ハ・セ：「何いい〜！？

俺（私）が主人公じゃなかったのかあー！！！」

サト・サヨ：「知らなかったの？」

カ：「えっ、俺、主人公だったの！？」

サト：「ここにもいたよ、知らなかった奴が！」

ハ：「こんな奴が主人公だと……っ！？

くそっ、何だこの敗北感は！」

セ：「だよね！？今回はあんたの気持ち、痛いほどわかるよ！」

サヨ：「星川君……自分が主人公であることぐらいは覚えておかない
と。」

ほら、ああやって周りからやつかまれることになるのよ」

カ：「と言われても、俺が主人公だなんて……実感湧かないなあ」

サト：「ホント、そういうところが輝夜らしいよ。

ヘタレと見せかけて実態は天然なのかな？」

カ：「え、いや天然はむしろあれ、誰もいなくねえ？

はあー、だんだん俺、自分のことが掴めなくなってきたぞ……」

サト：「まあ自分探しを含めて人生さ！

大丈夫、僕らの方もストーリーが進む中で色々キャラ立ってくるからさ」

セ：「そつ、そうだよね！？

と言う事は、話の進み方如何によつては第二の主人公を狙えるかも！」

ハ：「フン、ならこの勝負あつたな。

すでにキャラ立ちしてる上に、圧倒的な存在感のある俺様だろう？」

サヨ：「あら、そうかしら？

大人なタイプほど、最終的には主人公にとってなくてはならない存在になるものよ」

サト：「いやいや、ここはやっぱ親友ポジションだろ？

常に主人公の身近にいて、時には悩み苦しみながらも彼の成長を見守り、自身も人として大きく成長していく……まさに王道さ！」

セ：「少年漫画的にはおいしいけど（腐女子的にもおいしいけど……）」

、やっぱり青春ものなんだから恋愛要素がなくなっちゃ！」

カ：「なあーんか俺を置いて話が進んでるなあ。
一応聞くが、恋愛要素ってなんだよ」

セ：「そりゃあヒロインの存在でしょ！」

あゝでも、このメンバーだったら私と沙夜子の間で三角関係に!？」

カ：「あのおゝ、お聞きしますが誰を巡っての三角関係？」

セ：「決まってるじゃん。星川を巡ってのだよ」

サヨ：「ふふつ、面白いこと言うのね、世那ったら。

でも私、世那が相手でも手加減しないわよ？」

セ：「さすが私の親友、相手に不足はないね」

カ：「ちよつ、二人ともタンマ!

別に俺の彼女にならなくなったって、ヒロインにはなれるだろ!？
て言うか、もうすでにヒロインだし!!」

サト：「ハハッ、モテモテだなあ輝夜。

両手に花とは羨ましいな」

ハ：「良かったなあゝいい夢見れて」

カ：「（ふつ、二人共眼が笑ってない……!）そ、そんなわけない
だろ!

ほら、白鳥に香月さん!遊びはここまでにして、そろそろ本編に戻るよ。

智史、空蓮寺も皆さんに挨拶しないと!!」

サト：「それもそうだね、いつまでもここにいるわけにはいかないし」

ハ：「まあいい。星川弄りは戻ってからでもできるからな」

カ：「（また勝手なことやってやる）」

サヨ：「あんまり星川君を困らせちゃダメなものね。

じゃあお話の続きは本編でね、世那」

セ：「ま、そうだね。本編の方が色々と盛り上がりそうだしっ、クフフ！」

カ：「おいおい、どうか変な妄想を繰り広げてくれるなよ？

さて、ここまで俺達の長っい自己紹介兼お喋りを一読下さりありがとうございます！

物語は始まったばかりだけど、これからも獣神戦隊マイスマンを」

全員：『よろしく願います!!』

番外編 完

番外編 自己紹介その2（後書き）

次回、再び本編に戻ります。
ちなみに口ボはまだです。

第4話 動き出す齒車！奇跡の武装転神 パート1（前書き）

お待たせしました、久々の本編です！

この回から新展開になります。

いよいよ主人公の過去が少し明かされます。

第4話 動き出す齒車！奇跡の武装転神 パート1

玄関先で輝夜は、白を基調に赤と青のラインが入ったシューズを履き出掛ける準備をしていた。

ショルダーバッグを斜め掛けにして、いざ扉を開こうとする。

「カグヤ兄ちゃん、朝からどこ行くのー？
今日、土曜だよ？」

背中へ掛けられた声にギクリと身体が強張る。

寝ぼけ眼を擦りながらパジャマ姿の優希が立っていた。

無理もない、今は8時。休日に疲れを取りたい子供らはここぞとばかりに寝過ぎす時間だ。マイスマン絡みの用事のため気付かれないように行くつもりだったが、優希相手には無駄だったようだ。
内心をおくびにも出さず、涼しい笑顔で優希に答える。

「バイトだよ、ほら新しく変わった。」

今日はシフトの関係で朝早くから仕事なんだ」

「でもそれにしては荷物多くない？」

「うっ…バレたか。実はバイト帰り、そのままじいちゃんちに泊まっ
っていくんだ」

「えええ——っ、ずるい！！」

僕だって泊まりに行きたいのにー！」

「あ、ちなみに帰るのは日曜の夜な。」

晩飯は俺の分考えなくていいって伝えといてくれ、じゃっ！」

後ろで吠える弟から逃げるように、そそくさと彼は研究所まで自転車をぶっ飛ばした。

一番最後に来たのは輝夜だけのようで、他のメンバーはすでに第一研究室に集まっていた。

「げっ！俺が最後かよ……」

「見ればわかるでしょ？」

「しかも10分遅刻だしっ」

「う…スイマセン」

「ま、次から気を付けなよ。」

「ほらこっち」

世那から空いてる席に案内され、輝夜は腰を下ろす。

その右隣に世那が来た。

世那が座る際、ふわりと柑橘系の香りが辺りに広がる。

その香りは光のような彼女によく似合っており、知らず輝夜の鼓動は早まった。

何考えてんだ、俺！今は会議に集中、集中！

先程の感情を気のゆるみと片付けた輝夜は改めて周囲を見渡した。

左手に智史が、向かい側には沙夜子、そして斜め前に勇人が座っている。

ちょうど円形になるように座り、円の頂点に結城博士がいた。

全員が揃ったところで博士は話を切り出した。

「ようやく守護獣神の転生者がここに揃ったわけだが、まず君達自身のことについて聞きたいことがある。」

君達がマイスマンとして覚醒した際、守護獣神としての記憶はどれほど戻っている？」

結城博士の言葉に全員が彼に注目する。

そんな中、輝夜だけは彼の意図することがわからず戸惑いを見せた。

「えつと博士！俺、博士の言ってることがよくわからないんですけど。」

覚醒した時は無我夢中で無意識に名乗ってたし、記憶ってたって自分がミスレッドで天龍王だったことを認識したぐらいで他には何も無かったんですけど……」

「えっ！？輝夜は守護獣神だった頃の記憶がないのかい？」

信じられないものを見るような眼で智史は輝夜の方へ振り返る。

そんなに驚くことでもないだろうに大袈裟だなと世那達の方を向けば、彼女たちも智史同様彼を凝視していた。

「星川…、あんたほんとに少しも記憶がないの？」

そりゃ私達もまだほんのちょっとだけど、みんなの前世の姿なら少し思い出したよ。

あ、でも待つて！

みんなの姿は出てきたのに、何故かあんたの姿だけ影になってよく顔が見えなかったんだ。

覚醒してから夢で何度も見てるのに星川だけ…、何でだろう？」

「それは俺の方が聞きたいよ。」

白鳥も記憶があるってことは、香月さんや空蓮寺もか？」

確認を取るように二人と向き合えば沙夜子は頷き、空蓮寺は返事の代わりに呆れたような眼を向けた。

人を馬鹿にしたような態度に軽く苛立ちを覚えるが、今は何故自分にだけ記憶がないのか知るのが先決だ。

「ということは、前世絡みの記憶が無いのは俺だけってことかあ。でもそれって、そんなに重要な事ですか？別に無くて困らないと思うんですけど」

何故結城博士がそこにこだわるのかわからず、輝夜は答えを待つ。
智史も輝夜に同感だった。

若干記憶を取り戻したら戦いやすくなるかもしれないとは考えるが、戻らなかつたら時はそれはそれで戦いに慣れればいい話だ。

正直、博士の意図が掴めない。

博士は応えた。

「かつての守護獣神と神魔との戦いにおいて、巨大化した神魔を相手に戦ったことが古文書に記されていたんだ。

恐らく神魔達はまだ本気を出してはいまい。

もし巨大化されでもしたら、今の我々に成す術はないだろう」

本気を出してはいない……。――。

博士の言葉に輝夜達の顔は険しくなる。

中でも勇人はきつく拳を握り締めていた。

脳裏に浮かぶのはこの間のダキ二との一戦。

いいように翻弄され、結局止めを刺せなかったことに歯ぎしりする。

「くそっ！じゃああの狐女、俺らで遊んでたってことか！？」

舐めた真似しやがって！！」

常に人よりも上に立っていた勇人にとって、他人から格下に扱われることは我慢ならないことだった。

ましてや、戦いというものに関してなら尚更だ。

こいつでも熱くなることがあるのかと輝夜は意外そうに眉を上げる。
ダンと拳を机に叩き下ろし、勇人が口火を切った。

「なあ、結城のおっさん！

あのダキ二とかいう狐女、何とかできねえのか！？

このまま連中に好き勝手暴れさせるなんざ、俺の矜持が許さねえんだよ！」

「おっ…おっさんんっ!？」

いきなりおっさん呼ばわりされた博士は、勇人のあまりな態度に啞然とする。

これには博士よりも智史がむっとした。

「おい、空蓮寺！」

仮にも人の親に対して、おっさんはないだろっ？」

「失礼にも程があるぞ」

冷めた声で輝夜が畳みかける。

「そ、そんなに失礼なのかよ」

「普通はおじさん、もしくは博士って呼ぶものよ。

それに、今は私達マイスマンの上官に当たる方でもあるわ。

目上に対する態度ではないわよ」

「ううっ……」

輝夜のみならず沙夜子にまで注意され、尊大な勇人もさすがにうろたえた。

「まあ、みんな。私は気にしてないからその辺でいいじゃないか。

誰にだって間違いはあるものだ、なあ？」

今大切なことは、君達のチームワークを良くしていくことが最優先だ」

見かねた博士が助け舟を出す。

少し気まずそうに勇人は斜めに視線を逸らしていた。

不謹慎だと思いながらも普段見られぬ勇人の年相応な態度に、世那達はクスリと笑みをこぼす。

「さて、話を戻そうか。」

古文書の中に守護獣神達が巨大化した神魔達に対抗するため、本来の神の姿に戻り巨大化して戦ったことが記されていた。

もしこれが事実なら、君達の記憶をひも解くことによって、その力を目覚めさせることができるかもしれないと思ったのだが……」

神魔に対抗する術が守護獣神の記憶にあったことに、幾分勇人は落ち着きを取り戻す。

一方輝夜は記憶がないことに若干の焦りはあれど、博士の妙に急いだ態度の理由を知り納得していた。

成るほど、だから俺に記憶がないことを焦っていたのか。

思い出せるなら思い出したいが、こればかりは自力でどうにかなるものではない。

思い出す記憶と言えば、死んだ母のことばかりだ。

そうだ。みんなは守護獣神だった頃のことを夢で見たと言ってなかったか？

なのに何故自分だけ母の夢を？

神魔に関係のない、ましてや守護獣神と何の関わりのない母の記憶だけ。

——本当に……？

本当に関係ないのか、神魔と。

待て、何か大切なことを忘れてるような気がする。

思い出せ、9年前のあの日に何があったのかを！

一人考え込む輝夜の側では、智史を中心に皆博士にその古文書に巨大化について詳しいことが記されていないか尋ねていた。

みんなで話し込んでいる中、世那は先ほどから会話に加わらない輝

夜に気付いた。

焦燥の色が浮かぶ彼の眼に、気になった世那は下からそつと覗きこむ。

「どうしたの、さつきから黙り込んでるけど。

何か考え事でもしてた？」

ずつと思考の海に沈んでいた輝夜は彼女の声に、はつと意識を浮上させた。

見れば、自分の頭一つ下ぐらいから世那が心配そうにこちらを覗きこんでいる。

意外と近いその距離にまたしても輝夜の心臓は高鳴った。

「（うつつ……顔近いっつの！）」

年中モテない男に美少女とのこの距離間はある意味毒だ。

心なしか顔面に血液が集中してるような気がする。

まずいな、顔が赤くなってるなきやいいが。

「大丈夫、星川？」

なんか顔赤いけど……、あつもしかして熱ある!？」

「ちつ違う！ちよつと部屋が熱いっただけで、別にそんなんじゃないって。」

「っか、顔近いんだけど……」

「え？あ、ごめん。」

何か深刻そうな顔してたから気になって」

「いや、別に謝ることないっての。」

……なあ、白鳥は覚醒してから前世の記憶を夢で見ると言っただが、小さい頃の記憶も見erようになったか？」

考えもしなかった質問を受け、ぽかんと世那は輝夜を見上げた。

「小さい頃の？」

それが前世の記憶と何か関係あるの？」

「わからない。」

ただ最近、死んだ母さんの夢を頻繁に見るんだ。

みんなは前世なのに俺だけ……何でだろう」

死んだ……お母さんか。

私は両親とも健在だから、親のいない星川の気持ちはよくわからない。

けど私だって、この歳でもいざ居なくなられたらショックを受けると思う。

それなら尚更、星川は寂しいんじゃないだろうか。

「あのさ、もし逢えるならやっぱりお母さんに逢いたい？」

普段はずけずけとした物言いの世那が、今日は珍しく控え目に訊いてきた。

彼女なりに気を遣ってくれていることがわかり、眼鏡の奥で微笑む。

「そうだな……逢えるのなら、また。」

でも寂しくはないな、白鳥達がいるから」

智史でなく自分の名前が出たことに眼を瞬^{しばた}かせる。

ややあつて照れ隠しに頬を掻く世那を、輝夜は慈しむような眼で見つめていた。

輝夜が世那に夢の事を話終わった頃、博士と他の三人も丁度会話を切り上げた。

「一先ずは、開発中のメカの最終メンテナンスを済ませてくるとしよう。」

それまではきつい戦いになるだろうが辛抱してくれ」

『了解！！』

「では先に失礼するよ」

博士が第一研究室から退室した後、示し合わせたかのように全員が集まった。

智史が切り出す。

「先程父さんが話してたように、現段階では何とか神魔と太刀打ちできてるけど、今後の事を考えて方針を打ち出すべきじゃないかと思う。」

この後用事がない人はできるだけ残って欲しい」

神魔が巨大化できることを知り、内心、皆穏やかではなかった。

特にメンバー随一の頭脳派である智史が危機感を持つてる以上、嫌でも神魔の脅威を考えざるを得ない。

ある種の緊張感の中、勇人が拳手した。

「空蓮寺、何だい？」

「今日は大した用がないんでな。」

家にいるより面白そうだから俺は残るぜ」

「ありがとう」

続いて沙夜子と世那も手を上げる。

「私も残るわ。」

ちようど用事がないし、みんなの前世の記憶を知る良い機会だと思
うの」

「同じく私も！」

塾のシフトは変更できるから問題ないしね。星川は？」

全員の視線が輝夜に集中する。

この雰囲気の中で自分だけ帰るとは言い出し難いが、この日ばかりは断るしかなかった。

ある客人が輝夜に用があるとかで祖父母の元へ訪れる約束をしていたのだ。

今日優希を置いて、自分だけ泊まりに行くのはそのためだった。こんな時に自分だけと思いつつ、申し訳なさそうに口を開く。

「ごめん、今日は俺に用があるお客さんが来るから早めに帰らなきゃならないんだ」

「そうか…それなら仕方ないな。」

ところでお客さんて輝夜の家に来るのかい？」

あの叔母夫婦がいるのかと暗に言っていることがわかり、顔を横に振る。

「俺が行くのはじいちゃんちだ。」

今日はどっちにしる泊まっていくからな。

もし何かあったら、いつも通り携帯かプレスを通して連絡をくれ」

「わかったよ。」

良かったな、お祖父さんとこに会いに行けて。

久々に羽を伸ばしてこいよ！」

「ああ！じゃあ、みんなお疲れ！」

軽く手を上げ挨拶をすれば、空蓮寺を除き皆口々に彼の背に言葉を掛ける。

「星川君もお疲れ様ー！」

「また学校でなー！あと、弁当待ってるからあー！」

「おい俺は弁当要員か！」

世那と軽く冗談を交わしつつ、輝夜は研究室を後にした。

あれから自転車で一時間、都内でも田舎の方にある隣町まで輝夜は休むことなくこぎ続けていた。

入り組んだ昔ながらの日本家屋が並ぶ住宅街へ入ったところで、やっと目印である古めかしい道場の屋根が見えてくる。

その道場の門前まで来て、ふわりと自転車から降り立った。

表札には達筆な筆字で星川と彫られている。

久々に祖父母宅の前に立った輝夜は何とも言えない気分だった。

ここ二週間で彼の生活は激変した。

普通の高校生だった俺がどっかの特撮ヒーローみたいなことをしている。

しかもこれは撮影じゃない、紛れもない現実なんだ。

あれほど人と喧嘩することや戦うことを恐れていた自分が、今こうして守護獣神として戦っているなんて。

それを知ったら、じいちゃんはどう思うんだろう？

ずっと考え込んでいても仕方ないと思い、輝夜は意を決してインタホンを鳴らした。

どきどきしながら祖父母が現れるのを待つ。

ややあつて木の軋む音がすると門が開いた。

「おお、よく来たな輝夜！待ってたぞお」

門から短く刈り込んだ白髪に、歳に似合わぬ鋭い鷹のような眼をした老人が顔を出した。

背丈は長身の輝夜に引けを取らず、引き締まった体軀からは覇気すら感じられる。

好々爺然とした顔で彼は孫に笑顔を向けると、輝夜はほっとしたように表情を緩めた。

「久し振り、じいちゃん。

今日、俺にお客さん来るらしいけど、もう来てる？」

「いいや、まだだ。

どうだ、輝夜。久々に手合わせでもするか？」

眼を道場の方へ向ければ、輝夜もしっかり頷いた。

「よろしくお願いします、師匠」

「うむ。ならばまず眼鏡を外しなさい。

壊れてもいいのなら構わんが……」

それはさすがに困る。

特別視力が低いわけではないが、無いと黒板が見えにくくなるのだ。

「わ、わかったって…。

ほら、外したよ」

眼鏡の下から紅茶色に輝く、切れ長の涼しい眼元が現れた。

祖父同様、鋭く威圧的な眼光だ。

「よろしい。早速稽古を付けるぞ、来なさい」

来て早々これかよ……。

不敵な笑みを浮かべ促す祖父に、改めてまだまだ敵わないと思った。

今日も取材のため忙しく駆け回っていた速水は、ある簡素な住宅街まで赴いていた。

車内で手元にある資料を捲る。

「星倫^{せいりん}学園高等学校、3年A組星川輝夜か。
へえ、なかなかの進学校じゃないか」

白く縦に長い社用車を止め、速水はその中の一軒家へ近づいていた。表札には『星川』と達筆な筆字で書かれている。

「ここか……あの子の祖父母が住んでるのは」

今時珍しい堅固な造りの日本家屋をざっと眺めると、次に同じ敷地内にある道場へ眼を向けた。

道場からは今は時間外なのか誰の声もしない。

ふと視界に入ったものが気になり向き直ると、そこにはもう一台見慣れぬ質素な車が佇んでいた。

邪魔にならぬよう精一杯端に寄せている姿が、追いやられながらも取材のために闘う自分の姿に何故か重なる。

疲れてるんだろうな、こんな事を思うなんて。

「先客が出てくるまで張るとしますか」

再び車の中へ乗り込み、缶コーヒ一片手に速水は暫し粘る体制を取り始めた。

時間を遡ること10分前。遠山は上司である花形の許可を得て、星川宅を訪れていた。

勿論、星川家の方へ事前に連絡を入れることも忘れない。
手土産の一つでも持ってやって来た彼を、年老いた女性が優しく出迎えた。

「まあまあ、わざわざお土産まで……すみません。
ありがとうございます」

「いえ、どうぞお気になさらずに奥さん。
こちらこそ突然すみません」

「いいえ、あの時から遠山さんにはお世話になってますし。
今日もこうして事件解決のために……」

言葉を詰まらせ涙ぐむと節くれだった手でそつと目元を押さえる。
遠山は敢えて見なかった振りをし、案内されるままにお茶の間へ向かった。

座布団を用意されたが、その前に手を合わせたいとお願いすると仏間へ通してもらえた。

仏壇の前には二人分の位牌が静かに並んでいる。

「史郎^{しろう}、桐華^{きりか}さん。

遠山さんが来てくれましたよ」

囁くように星川夫人はそつと仏壇に向かい呼び掛けた。

凧のような夫人の横顔からは何の感情も窺えない。

静かに線香と蝋燭に火を付け鐘を鳴らすと彼女はそつと手を合わせる。

遠山も、必ず事件の真相を突き止めるという誓いを胸に、固い面持ちで合掌した。

「さあ、遠山さん。もうそろそろ主人と孫が戻って来る頃だと思い

ますので、私達はこちらでお茶でも飲んで待つてましょう」

「あ、いえっ……どうぞお気遣いなく」

「まあ、そう遠慮なせずに。さあ」

遠慮していた遠山だったが夫人に押され、大きながたいに似合わずそろそろと大人しく座布団に座った。

お茶の間で夫人が二人分の緑茶を用意する。

その手際をぼんやりと眺めていると玄関で引き戸の開く音と共に元気の良い声が響いてきた。

「ばあちゃん、ただいまあ——！！」

「今帰ったぞあー」

一人は若々しい青年の、もう一人は深みのある鋭い声だ。

廊下をどかどかと重い音が通り過ぎていく。

しばらく待っていると、道着と袴に身を包んだ二人の男が客間へ入って来た。

遠山の予想通り一人は高校生ぐらいの青年、もう一人は軽く還暦を過ぎているだろう男性だった。

何度か伺ったことがあるため老人とは顔見知りだが、青年の方は見たことがない。

しっかりと青年の顔に目を向けた途端、遠山は一瞬呼吸を忘れた。

その人間離れした麗姿に釘付けになる。

端正な容貌は男女を超越しており、雪のような白さがそれに拍車をかけていた。

青年を見た十人が十人見惚れるだろう。

一度見たら忘れられそうにない顔だった。

あまりにも遠山がじろじろ見過ぎていたのだろう、青年が居心地悪そうに俯いた。

もっともそれは別の理由からなのだが。

遠山は慌てて視線を逸らす。

頃合いを見て、星川氏が穏やかな眼で遠山に話しかけてきた。

「久しぶりですな、遠山さん。

9年前から本当にありがとうございます。

今もこうして気にかけて頂いて」

「いえこちらこそ。

お久しぶりです、星川さん。

義娘さんの事件では力になれず申し訳ありません。ところで、こちらの方は…？」

改めて青年に眼を向けると、星川氏は僅かに切なさを滲ませて青年を見つめた。

「この子が9年前の事件で生き残った孫、輝夜です。

輝夜、この人が今日お前に会いに来た遠山さんだ」

驚きを隠せず、輝夜は弾かれたように遠山を見た。

何いーっ、この刑事さんが俺に！？

やばい……こりやまずいぞ。

ミスレッドの時に会った人がお客さんだったなんて！

もちつけ、いや落ち着け俺！！

あくまで初めて逢いましたという顔で澄ましておくんだ、そうするんだ。

おっし、作戦実行ーお！

内心冷汗がだらだら出ているが、鍛え上げたポーカーフェイスで勝負に出る。

顔には笑顔を完全装備だ。

「初めまして、星川輝夜です」

人当たりの良い笑顔を浮かべる輝夜に、同じく遠山も武骨ながら優しい態度で語りかけてきた。

「こんにちは、輝夜君。」

9年ぶりとはいえ、大きくなったね」

「えっ！？俺の事、知ってるんですか？」

「君は覚えてないかもしれないが、君のお母さんの事件で直接君から事件の事を聞いた刑事がいただろう？それが私さ」

「あっ！」

輝夜の脳裏に事件直後の記憶が蘇る。

混乱する頭でどうにか母を殺した奴の事を伝えたが、耳を傾けてくれたのはこの刑事だけだった。

——いいかい、おじさんは君の味方だ。

君の言葉を信じるよ。

だから待っててくれ。

必ず、犯人を捕まえてみせる！

「あの時の刑事さんが、遠山さん……」

「覚えててくれたのか！」

「けいかんみょうり警官冥利に尽きるなあ。

本題に入るが、今日は君に酷な事を頼みにきたんだ」

「はい？酷な事って一体……」

眼で先を促せば、遠山警部は苦いものを口に含んだような顔で話を切り出した。

「最近ニュースでも話題になってるから知ってると思うが、神魔と

名乗る異形の存在が日本に侵略行為を開始してきた」

神魔が！

研究所以外で聞くことのなかった単語を耳にし、輝夜は神経を尖らせる。

「我々警察は先の小学校立てこもり事件や誘拐事件に際し神魔と対峙した。

しかし奴らには拳銃すら効かず、神魔の持つ未知の力の前に手も足も出なかった。

情けないことに我々は神魔に太刀打ちする術を持っていない。

だから9年前におそらく神魔に関わったであろう君から、奴らに関する情報を聞きたいと思いここに来たんだ」

一瞬、輝夜は遠山の言っていることが理解できなかった。
無理もない。

9年前の混乱の最中、幼い輝夜は大切な母を失ったショックと誰にも理解されない絶望感で、事件に関する記憶が時が経つことに消え失せていたのだから。

ましてや、犯人の正体が神魔であつたなどと誰がわかるだろう？

「……すいません、今、何と…？」

震えそうになる声を抑え、搾り出すように一言一言紡いでいく。
こうなることを予想していたのか、遠山の表情は暗かった。

「聞いている通りだ。

君のお母さんを殺したのは神魔だった。

当時の輝夜君の証言を元にして作ったモニタージュと犯人の現れ方が、小学校と通り魔事件のパターンと一致したからこそわかったん

だよ。

我々はこれ以上、神魔による被害を増やさないために君に協力を…
…輝夜君？」

あいつらだったのか……。

あいつらが、神魔が俺の母さんを……。

どうして忘れていたんだ、俺は！

情けない、こんな大切なことを。

それなのに俺は思い出せない、母を殺した奴の姿を。

思い出したい、思い出たくない。

母を殺した奴を見つづけるたいから、母が死ぬところをまた見たくないから。

視界が紅く染まる。

眼の前に広がる色は何だ？

赤い、紅い、血と焰——そして、怒り。

矛盾した思いに苛まれ、頭を抱え始めた輝夜の異変に遠山と祖父母は血相を変えた。

「輝夜！？すまない、水を持ってきてくれ！」

「わかったわ、でも下手に揺さぶらないようにね！」

祖父に頼まれ、慌てて祖母が台所へ走っていく。

遠山も輝夜の側へ来て、必死に呼びかけた。

「輝夜君っ、聞こえるか！？輝夜君！」

「黙れ……」

「え……」

背筋の凍るような低い声音に遠山達の動きが止まる。
そのまま輝夜は言葉を続けていく。

「許さない、許すものか…。
貴様だけはっ、絶対に——！！」

輝夜の眼の奥で冷たい炎が燃え上がった。

彼の視界に広がっているのは遠山達の姿ではなく、9年前の惨劇だ。背中まで滑り落ちる夜闇のような長髪を鬱陶しげに払い、自ら貫いた女を無表情に見下ろす男。

長剣からはひたひたと血が流れ落ちる。

男が今度は幼い輝夜を手に掛けようと剣を向けた。真っ直ぐに振り下ろされる得物が輝夜の頭上に迫った時、男の手が止まる。

驚くことに、男の腹からは長剣が突き出ていた。憎しみを込め、男は自分に仇なした相手に叫んだ。

「キリカア…ッ、貴様ああー！！」

「この子は、この子だけには…手を出させない！
せめてもの情けだ、我が手で逝くがいい…！！」

眩い閃光が邪悪なる者どもを退けていく。
凄まじい光の奔流の中、母は輝夜へ悲しげに微笑んだ。

「母さああん——！！」

白い光が意識を塗りつぶしていく。
目覚めると眼の前には、心配そうに覗きこむ祖父と遠山警部の姿があった。

何時の間にか頭を手をやっていたらしい。
無意識の防衛本能かもしれない。
台所からドタドタと走ってくる音が響いてきたので顔を上げると、

真っ青な顔の祖母が俺に水を手渡してきた。

「輝夜、大丈夫!？」

さあ、水を飲んで。落ち着くわよ」

「あ、うん。ありがと、ばあちゃん」

余りにも必死な態度なので、安心させるためにも一口水を流し込む。
お陰で幾分か落ち着きを取り戻した。

「輝夜君、すまない。」

私が君の気持ちも考えず、早まったばかりにこんな事を」

心底悔いている遠山に、慌てて輝夜は話を切り出した。

「違うんです、遠山さん！

これは別に誰のせいでもなくて……いや、違うな。

神魔のせいであんなにただけだ！

遠山さん、俺、思い出したんです。

誰が母さんを殺したのか、完全に」

「何だつて……？」

この場にいる全員の眼が輝夜に集まる。

彼はもう一度深く頷いた。

「母を殺した犯人は、神魔皇帝と名乗る男だ」

第4話 動き出す齒車！奇跡の武装転神 パート1（後書き）

今回は戦闘無しでした。

次回、敵と一部の幹部が大暴れになると思います。

この回でやつとこさ素顔が判明した主人公。

だけどメンバーとクラスメート達にバレるのはまだ先です。

第4話 動き出す齒車！奇跡の武装転神 パート2（前書き）

1か月ぶりの更新です。

思ったよりも長くなりましたが、必要な流れだったので
では本編へどうぞ！

第4話 動き出す齒車！奇跡の武装転神 パート2

「久しいな、キリカ。

あの男とこの小僧から付けられた傷が癒えるまで、随分暇を持て余したぞ」

背中にたなびく夜闇よりも深い黒髪を揺らし、男は冷たく嗤った。その顔だけは影になっており、どのような容姿が窺い知ることではできない。

輝夜を背に庇いながら、キリカと呼ばれた女性はキツと鋭く睨みつけた。

「黙れっ！神魔皇帝の名を騙る愚か者！！

お前のせいで史郎は……っ」

「ああ……あのウジ虫のことが。

キリカ、お前ほどの者が何の力も持たぬ人間に溺れるとはな。

あの男さえいなくなれば目を覚まし、我の元へ戻ってくると思っていたが……。

やはり、その小僧まで殺さねば目が醒めぬか」

射殺すような眼光を輝夜に向け、神魔皇帝は手から禍々しい気を放出させる。

底知れぬ冥^{くら}い眼の冷たさに、輝夜は心臓を鷲掴みにされたような恐怖を覚えた。

男の放つ邪気は螺旋状に絡みあい、やがてそれは漆黒の剣にへと姿を変える。

同じくキリカも神魔皇帝とは対照的に、右手から白き光の剣を召喚した。

「ふざけが過ぎるぞ、神魔皇帝。」

史郎を殺した貴様の元に、私が戻るとでも？

そのうえ輝夜にまで手を出そうとは……っ、許さない!!」

怒号するやいなや、一気に魔力を爆発させると、キリカの身体から青白い光が放たれる。

隙なく剣を構え、キリカの足が地を蹴った。

同時に神魔皇帝も駆け出す。白き光と黒き闇が激突し、ビックバンと共に全てを飲み込んだ。

「これが…俺の思い出した一部始終です」

そう言い口をつぐむと、残酷な真実に言葉が出ないじいちゃん達の代わりに遠山警部が質問してきた。

と言っても、俺の意思を尊重し、言いたくないことは無理して言わなくても構わないというスタンスだが。

俺も先ほどよりは落ち着いているので、警部の眼を見て静かに促した。うなが

「いきなりだが、君のお父さんのことをいくつか聞いても構わないか？」

「俺で答えられることならば。」

ただ父さんは俺が3歳の時に亡くなったので、よく覚えてないんです。

それに……——」

「それに？」

一呼吸置いて、何とか胸の内のもやもやを吐きだす準備をする。
もやもやの正体は父さんの死因だ。

母さんに聞いてもじいちゃん達に聞いても、叔母さんでさえ父さんは交通事故で死んだとしか言わない。

叔母さんに至ってはこれ以上聞こうとするとひどく睨みつけてきて、質問を許すような空気じゃなかった。

何故、みんな必死になって隠そうとしたんだ？

無駄な事を……。

結局こうやって、俺は父さんの死の真相を思い出したのだから意味無いだろ。

こうまでして父さんのことを隠してた理由、絶対じいちゃん達から聞きだしてやる。

一度遠山警部と視線を合わせた後、先ほどからずっと黙ってるじいちゃんとはあちゃんに向い、話を切り出した。

「じいちゃんとはあちゃんに聞きたいことがあるんだ。

どうして、父さんのことを俺に隠してたんだ？

母さんの事と同じくらい大切な事を……」

何故なんだ……？

庭先に生い茂る木々が風に揺られ、ざわめきだす。

その様がじいちゃん達の心の中のように、俺は落ち着かない気分だった。

輝夜から事件の詳細を確認した頃にはもう昼過ぎになっていた。

結局、祖父達は輝夜の問いに答えることはなかった。

何故と彼は苛立ったが、それでも頑として口を開かぬ二人に根負けしたのだ。

「わかったよ、じいちゃん達があくまでそういう態度を取るならこ
っちにも考えがある」

「どういうつもりだ、輝夜。」

言っておくが、神魔の事に首を突っ込むことだけは許さんぞ！」

もうとつくに首を突っ込んでるっての。

と言いたところだが、ややこしいことになりそうなので別のこと
を口にする。

「父さん、母さんの知り合いの人を探し出し、一人一人にどうやつ
て二人が出会ったのか聞きだす」

予想だになかった返答に暫し啞然とするも、何を企んでいるのか
探らんばかりにじつと輝夜の眼を見据える。

温和な祖母でさえ、厳しい表情を崩さずに孫を見ていた。

この不穏な空気にさすがに遠山も弱り、両者を代わる代わる見つめ
る。

いかにも返ってきそうな態度だと予想していた当の本人だけは、涼
しい顔で滔々と述べてみせた。

「別にいいだろう？ただの興味本位だ。

だいたい俺には実の親と過ごした思い出がほとんど無いんだぜ。

父さんに至ってはもう顔も思い出せないほどだしな。

それに遠山さんにとっても悪い話じゃないと思うんだが……」

「それは一体どういう意味かね？」

話が見えてこない遠山は頭を捻る。

僅かに口端を上げた輝夜は祖父達の神経を逆なでしないよう慎重に
話を進めた。

「父さん達の過去を知ることと事件が起こった原因がわかるかもしれないと思うんです。」

例えば、俺のような一般人が父さんと母さんの事を聞いてもただの思ひ出話としか受け取らない。

でも、遠山さんみたいな刑事さんが聞いたならそこから何らかのヒントを得られるんじゃないかと思うんですが……」

どうでしょうかと、単純に幼児が素朴な疑問を投げかけるような気軽さを醸し出す。

腑に落ちないものを感じながらも、祖父母は彼が『神魔に関わろう』としているわけではないため黙って静観するしかなかった。

遠山自身は輝夜の妙案にひらめきを得てか、眼をきらきらと光らせた。

「名案だ！俺だけだったなら思いつかなかっただろうな。確かにそれを知ることと、何故神魔が史郎さんと桐華さんを狙ったのかわかるかもしれない！」

事件が解決できるかもしれないという興奮から、ついつい警部の地が出たようだ。

いつもは俺って言うのかと思い、普段無理して堅苦しい言葉を使っている遠山を想像した輝夜は小さく吹き出す。

気付いた遠山はこほんと照れ隠しに咳ばらいした。

それにしても遠山警部はちらりと仏間に眼を向ける。

神魔の中心核である神魔皇帝が星川家に関わっていたことは非常に驚きだった。

だが、それと同時に疑問が浮かび上がる。

（何故、神魔皇帝は星川家を……いや、星川桐華さんをつけ狙っていたんだ？）

彼女は何故狙われなければならなかったのか？
まだ我々の知らない真相が隠されているらしい。

輝夜君の言うとおり、彼の両親の馴れ初めから聞いてみる必要があるな、これは。

それ以上に輝夜からも覚えている限りのことを聞きださなければならぬが、父親に関する真実まで思いだして再び傷を負った彼に、今は聞くことが憚られた。

一方、遠山の考えとは裏腹に、輝夜の心は静かな怒りの奔流で溢れていた。

しかし怒りが深ければ深いほど無表情になるため、周囲はそれに気付かない。

それはとても危険な兆候だ。

この場で唯一気付いた星川氏だけは危うい状態にいる孫を油断無く見つめていた。

そろそろ時間なのでお暇しようと席を立つ遠山を、輝夜は自ら進んで外まで見送ろうと玄関まで二人で向かった。

玄関に置きっぱなしだった眼鏡を取り、装着した輝夜を見た遠山は何故か微妙な顔をする。

「……普段はいつも眼鏡を着けてるのかい？」

「はい。俺、目が悪いんでこれがないと黒板とか標識の文字が見えないんですよ」

「そうかあ……、うーん。

しかしなあ、その、もう少し薄型のレンズにしてみたらどうだい？
今のままじゃ、あまりに勿体ないと思うが」

「え？勿体ないってどういう意味です？」

わざとではなく、本当にわかっていないらしい様子に遠山警部は脱力感を覚える。

どうもこの青年、自分の容姿に無頓着を通り越し、無自覚のようだ。天然記念物でも見るような遠山の眼に、どう対応してよいかかわからない輝夜は首を傾げる。

何でもないよと返す遠山を変った事を言う人だと思いながら、玄関の戸を引き外へ出た。

玄関を出て外の駐車場へ歩いていると、見慣れぬ白いワゴン車が家の前に止まっているのが目に入った。

どうも会社用の車のようで、よくマスコミが乗る自動車そっくりだと輝夜は思った。

気になった輝夜は遠山に尋ねる。

「遠山さん、これ遠山さんが来た時に置いてありましたか？」

「いや、俺が来たときにはなかったよ。」

それにしてもこの車……どこかで見た覚えがあるような

「どこかって？」

しばらく考え込む遠山だったが、あつという声を上げると共に嫌なものでも見るように例の車を睨みつけた。

遠山の豹変振りに、輝夜は自分が睨みつけられたわけでもないのに内心冷汗を掻く。

元々がハードボイルド風漫画を思わせるようなごつい容姿なため、威圧感倍増だ。

マイスマンとして覚醒したものの、元来がヘタれた所のある輝夜には結構キツイものがある。

（まったく誰だよ、あんなところに迷惑駐車してんのは……！）

早く立ち去ってくれよ、俺これ以上遠山さんのプレッシャーに耐え

られる自信無い！）

遠山の苛立ちが頂点に達したその時、車から30代ぐらいの男が降りてきた。

遠山から発する苛立ちが殺気に変わる。

側でもろに殺気を浴びている輝夜は生きた心地がしなかった。

遠山を気にしながらも輝夜は男を注意深く観察する。

記憶違いでなければ、小学校の事件で遠山と一緒にいたはずだが。

主に遠山から醸し出された暗雲垂れ込める空気をものともせず、男は丸みのある顔に人懐っこい笑顔を乗せて話しかけてきた。

「やあ、こんなところでお会いするとは奇遇ですねえ警部さん。それとも…必然ってやつでしょうか」

意味深な言葉を紡ぐ男に、遠山の側にいる輝夜はどういう意味かと続きを待つ。

何も答えようとしない遠山を置いて、男は輝夜に眼を向けた。

にこりと笑いかけると、穏やかな口調で輝夜に語りかけてくる。

「こんにちは。突然の来訪で申し訳ないけど、星川輝夜君って人に関するんだ。

もしや、君が……」

「はい、俺が星川輝夜ですが何か？」

「そうか、君が！」

いやあー、子供の頃の写真と随分雰囲気が変わってたからわからなかったよ。

あ、そういえば紹介がまだだったね。私…いや堅苦しいのはやめておこう。

僕は速水元治。朝日山放送のレポーターをしているんだ。

決して怪しい者じゃないよ！信用できないのならテレビ局に直接問

「い合わせてもいい」

もつとも、その警部さんが証明してくれるとは思うけどね。
そつのたまいながら遠山へ面白がるような視線を向けると、絶対零度の眼差しで速水を睥睨した。

「あ、あのぉ、マスコミが俺に一体何のようですか？

別に俺、こう言っちゃなんですが割と大人しく平凡に生きてきたと思うんですけど……」

まさかマイスマンであることを嗅ぎ付かれた訳じゃないよな？

いやいや絶対ないだろ、そんな隙を見せるようなことはしてないし！

遠山の速水に対する空気を何とかしたかったのと、秘密がばれたのではないかという焦りもあって質問してみた輝夜だったが、正直後悔した。

質問を受けた速水の眼が獲物を見た猛禽類の如く光ったからだ。

「いやいや、君が平凡な人生を？ありえないことだよ、星川君。ましてや、母親のあんな最期を目の当たりにした君が」

心臓の裏に刃物を突き付けられたかのように、輝夜の心臓が跳ねあがった。

どくどくと心拍音だけが頭に響いてくる。

遠山も速水の口にした事に、衝撃から眼を見開いていた。

こめかみから嫌な汗が伝うのを感じながら、輝夜は乾いた唇を開く。

「…何故、貴方がその事を？警察でもない貴方がどうして…っ」

「それが僕らマスコミの仕事だからね。

で、本題に入らせてもらうが、君は神魔と関わったことがあるのか

い？」

「あつたとしたら何なんですか」

こちらの気も知らず、ずけずけと聞いてくるこの男に苛立ちを覚える。

自然と素っ気ない態度になるのも当然だろう。

硬化した輝夜の態度に敏感に気付いた遠山は彼を庇うように前へ出た。

「おい、お前……」

「お前ではなくて速水ですよ」

「わかっとるわ！」

さつきから取材だか何だか知らんが無神経にも程があるぞ！

ただでさえ、彼は傷を負ってるというのに……」

「おや、では貴方は違うと？」

僕と同じく仕事のために訪ねてきた貴方は、彼の古傷を疼かせるようなことはしていないと？」

鋭い指摘にはつとした顔で遠山は言葉を詰まらせた。

確かに速水の言うとおりだ。

やっていることは、こいつと何の変わりもない。

そんな自分に嫌悪し、ぐつと唇を噛み締める。

畳みかけるように速水は言いつのつた。

「なら黙って見逃して頂けますね？」

僕だって、当時からあの事件の真相を突き止めたいと願っていたんですから！

それにこれ以上、国家の思惑に振り回されたくないんでね……。

頼む、星川君。どうか当時の話を聞かせてくれないか？
君の記憶がこの先多くの人を救うことに繋がるかもしれないんだ！
！」

真摯な眼で訴えかけてくる速水に、当初は身勝手な奴だとは思わなかった輝夜も少し考えを改め始めようとしていた。

一呼吸置き、この熱きリポーターの正義感に応えようとした時、腕のマイスブレスレット（略してマイスブレス）からけたたましい発信音が鳴りだした。

「すみません！

ちよつと電話なんで、また後でっ」

「あつ、星川君……」

速水が呼び止める間もなく、輝夜は駐車場の死角に入ってしまった。慌てて通信を受ける。

「もしもし、こちら星川ですが」

《僕だ、輝夜！》

「智史か！一体、どうした！？」

《大変だ、ここから南西の港団地付近が神魔に襲撃されている。至急、現場に急行してくれ！》

「了解！俺が来るまで頼んだぞ」

任せておけという言葉を最後に通信を切り、一旦速水と遠山の元へ戻る。

やっと戻ってきた輝夜を見て、口を開きかけた速水に輝夜は言葉を封じるよう先に用件を伝え始めた。

「すみません、速水さん。

突然ですが、外せない用事が入ってしまったのでお話はまた今度に
願います！」

「星川君……っ」

「ではっ、急いでのでまた今度で！」

「遠山さんも失礼します！」

「あ、ああ……」

言うが早いか身を翻すと、僅か1分足らずで袴姿のまま自転車に乗
った輝夜が現れ、啞然とする遠山と速水を後目に土煙を上げながら
現場へと急行した。

目的地へ到着した輝夜は適当なところに自転車を止めると、逃げ損
ねた人達の元へ走った。

「大丈夫ですか！？こちらはまだ安全なので、慌てず避難してくだ
さい！」

「あ、ありがとうございます…っ」

戸惑いながらも輝夜の助けを受けた女性は一礼し、子供と共に安全
な所へ走り去っていった。

続いて老齢の男性を助け起こし、最後に男の子を母親の元まで送り
届けたところで一息つく。

念のため辺りを見渡すが、至る所瓦礫の山になっており生存者の確
認が難しい。

それでも一応細かく確認するが、獣神としての勘がここはもう大丈
夫だと告げていた。

「このエリアは大丈夫そうだな。」

よし、早いところ智史達と合流するか」

道を塞ぐ瓦礫^{がれき}の山を何とか潜り抜け、その道中に一般人が逃げ遅れてないか確認していく。

だがここまで跡形もなく崩れた瓦礫の中に人が紛れ込んでないかを確認するのは正直困難だった。

「あゝくそっ！このままじゃ埒が明かねえ！

……どこか適当な場所で変身するか」

辺りを見渡すと、瓦礫だらけの中に半壊してはいるが隠れるには申し分ない所を見つけた。

周辺に人影がないことを確認すると、変身の構えを取る。

「獣神覚醒！」

全身が紅い焰に包まれ、姿形を変えていく。

焰を勢いよく四散させると、ミスレッドへと変身を遂げた輝夜が現れた。

異常に良くなった聴覚を頼りに、智史達の元へ向かいながら逃げ遅れた人がいないか確認していく。

「うん、やっぱりこの姿が一番だな。

こういう時は獣神で良かったって思っぜ。あらよつと！」

軽く跳躍し、障害物を飛び越えていく。

ひたすら獣神の気を探り走りつづけていると見覚えのある人影が見えてきた。

大きく声を張り上げて呼びかける。

「おおーい、マイルスブラックー！」

「ん？マイルスレッドか……！」

智史の方も輝夜に気付くと直ぐに駆け寄ってきた。

「どうだ、俺がいない間に神魔は現れたか？」

残念そうに智史は首を横に振る。

「……そうか」

「僕達で周辺をしらみつぶしに探しているが、こっちの動きを予測してか少しも姿を現さない」

「くそっ、どうにかおびき出せないのかよ！」

「歯がゆいのは僕らも一緒だ。

もうすぐみんなが戻ってくるから、また改めて作戦を考えよう。

焦りは禁物だぞ」

苛立つ自分を諫める智史に、思わずフツと笑みを零す。

ほんと、そうゆう所は出会った頃から変わらない。

「わかってるよ。

ほんと、お前って世話焼きだよなあ。

特に俺に関しては」

「君が危なかつしいからだろうっ。

自覚があるなら、もう少し落ち着きを持てよ」

「へいへい、了解であります」

「真面目に答える！

ったく、すぐ子供みたいな態度で……——」

小言スイッチが入ってしまった智史に、しまったと思いながら早く

みんなが来ないかと辺りを見渡す。
智史の小言は長い上にしつこいのだ。

「だいたい君は単純な行動が目立つ！
戦士として戦う以上、それ相応の自覚を持ってもらわなければ……
って聞いているのか、輝夜！？」

さつきから他のメンバーが来ないかときよるきよる見渡しているの
を咎められ、首を竦める。

「わかってるつての、いちいち言わなくてもよお。
これでも変身する場所をちゃんと考えたりしてるんだぜ？」

「当たり前だろ、それぐらい。」

まあ……いい。わかってるのならな。

それに君の望む通り、他のメンバーも来たことだしね」

わかっていたのかと輝夜は思わず顔を引きつらせる。

それにニヤリと策士のような笑みで応えた。

西側の建物から残るメンバーがやってきたところで、智史は彼らの
方へ向き直る。

「状況はどうだい、イエロー」

「ずーっと探してるけどさっぱりだよ。」

奴ら、私達が来るのを見越して隠れてるって感じがする。

そっぴや、レッド来てたんだ」

「今さつきだけだな。」

俺も来る途中で隈なく確認したが、神魔の屍鬼ですら見かけなかつ
た」

「そんなはずない！

逃げ遅れた人が言ってたけど、化け物が突然現れて襲いかかってき

たつて…。

ブルーとホワイも聞いてただろ!？」

輝夜の言葉に愕然とする世那は2人に確認を取る。

勇人と沙夜子も黙然と頷いた。

何か嫌な予感が輝夜の胸をよぎる。

「なあ、これって神魔が俺達をおびき寄せるための罠なんじゃないのか？」

俺達が現場に来た時、さっきまで暴れていた神魔がいなくなってたんだろ。

これじゃ正に…」

「飛んで火に入る夏の虫ってわけじゃのう」

「!!」

突如声が降ってきた方へ振り向くと、崩壊した建物の上に神魔四天王のダキニが佇んでいた。

相変わらず豪奢な十二単に身を包み、自慢の鉄扇で口元を覆う。

「ダキニっ、またお前か！」

何が目的で貴様らは人間を襲うんだ!？」

険のある声音で輝夜が問い詰めれば、ハッと嘲笑で返した。

「ククッ、理由などいらぬ。

わらわ達にとって、人間の苦痛、悲鳴、恐怖こそが史上の喜びじゃからな。

そもそもこれは我ら神魔から驕り高ぶる人間への復讐!!

我らをこのような境遇に陥れた人間どもへの正当な行為じゃ」

あまりに身勝手な言い分に、遠山達といった時まで感じていた神魔への怒りが火を噴いた。

両親を殺された憎悪が、輝夜の視界を真赤に染めていく。

「ざけんじゃねええ——っ、人の親を殺しておいてよくも！！元はと言えばお前らが人間を滅ぼそうとしたからだろ！被害者ぶってんじゃねえよ……ただのっ、殺人鬼のくせに！！」

言い放った瞬間、身も凍るような殺気が突き刺さってきた。普段は人を見下すその眼が今は冷たい怒りに燃えている。

「被害者ぶる、じゃと？

笑わせるでない、天龍王！！

フンッ、人に転生してからは中身まで傲慢で凡庸な人間に成り下がったか！

よもや忘れたわけじゃあるまい、我ら神魔と人間の戦いの元凶を！」
「何の……ことだっ」

乾いた喉から擦れた声が零れ落ちる。

そうだ、自分は何も知らない。

天龍王だったころの自分自身も、その時何があつたのかも何一つ。

雲行きの怪しくなってきた状況に、智史達も緊張感から身体を強張らせる。

勇人に至っては、前回の借りを返さんとはかりに負けじと殺気を放っていた。

痺れを切らし、とうとう勇人が啖呵を切る。

「おい、狐女！

さつきから訳のわかんねえこと言ってんじやねえ！

原因がどうだか知らねえがなあ……、それを今の俺ら人間にぶつけんなー！」

「何もかも忘れた奴がほざくな、鳥獣王！

本来の守護獣神としての在り方を忘れた貴様らが言えたことか！？人間どもさえ、人間どもさえあんな事をしなければ……我らとて、共存を選んだというのにつー！」

悲鳴にも似たダキニの叫びにマイスマン達は声を失くした。

ダキニと対峙する輝夜と勇人の背中に冷たいものが走る。

怒りと困惑でない交ぜになる心を抑え、輝夜は詰問した。

「……どういう意味だ？

その言い方じゃまるで、人間が神魔を迫害していたように聞こえるぞ」

「まるで、ではなく、迫害していたのじゃ。

思い出せぬのなら思い出させてやろう天龍王、いやマイスレッド！

この世にあの時の地獄を再現することであー！」

おもむろに鉄扇を掲げたダキニに輝夜達は臨戦態勢を取る。

鉄扇を横に一振りすると、扇の先から赤紫の光線が辺りに迸った。

「いでよっ、テッキンシンマー！」

赤紫の光線を浴びた瓦礫が浮き上がると一か所に集まり始め、やがて鉄筋コンクリートのボディを持つ人型の魔物へと変わった。

「なっ、まさかこいつを作るために団地を破壊してたってこと！？」

「許せない……っ、人の生活をめっちゃめっちゃにして！」

「ほほっ、まだまだじゃ。

本番はここからぞ！」

怒りに震える世那と沙夜子の様子を面白がると、ダキニはさらに神魔獣にエネルギーを注ぎ続ける。

過度なエネルギーを浴びた神魔獣はみるみる内に輝夜達の背丈を追い越していき、最終的には10階建てビルに相当する程の巨体になって膨れ上がった。

「ゆけ、テツキンシンマ！」

愚かな守護獣神どもを踏みつぶしてしまえ！」

「グオオオオオオッ！！」

辺り一帯に響き渡るほどの咆哮を上げ、地面を揺らしながらテツキンシンマが接近してきた。

慌てて五人それぞれがテツキンシンマの足から逃れるが、奴が暴れまわる度に地面が揺れるため、思うように動き回ることができない。

「くっそおお！！」

このままじゃ、何もできねえ！」

「だがレッド、むやみに突っ込んで命取りだぞ！」

「わかってるっ、けど……」

「ブラックの言うとおりよ。」

ここは遠距離からテツキンシンマに攻撃を仕掛けて倒しましょう！」

沙夜子の機転にみんなが頷いた。

先に世那と勇人が動く。

「なら私にお任せっ。」

奴を囲って、みんなでフルぼっこだ！

麒麟光舞陣！！」

「お前一人に良いカツコさせるかよ。
鳥人化！」

世那が光の大鎌でテッキンシンマの周りに封じの紋様を描いてる間に、鳥人化した勇人が囷になり紋様から逃がさないよう足止めする。彼らの攻撃にテッキンシンマは目から光線を放ち、抵抗しだした。輝夜達も腰のホルダーから光線銃を取り出す。

「俺達もやるぞっ、マイスレーザー！」

「喰らえ！」

「テッキンシンマの弱点を探るわよ！」

様々な箇所へ攻撃を仕掛け、どの部分に一番反応があるかを探っていく。

彼らの奮闘を冷静に観察していたダキニはフツと口角を釣り上げた。

「無駄なことを…… テッキンシンマ、そちの本気を見せてみよ！」

「グウウウウ……」

唸り声とともにテッキンシンマの背中から無数の棘がボコボコと浮き出す。

一際大きく口を開け吠えると同時に、その棘が輝夜達の方へ飛んできた。

「チツ、絶・龍炎刃！！」

焰の刀を召喚し、横に掲げて焰のシールドを作り出す。

テッキンシンマの攻撃は三人に当たらず、シールドの前で全て弾かれた。

見ていた世那が鋭くテッキンシンマを睨みつける。

「こいつつ、よくも三人を!!」

一層力を込めて光弾を放ち、シンマを攻撃しながら紋様を完成させていく。

止めとばかりに勇人が召喚した武器で、コンクリートの身体に僅かながらも傷をつけた。

さすがに頑丈な身体といえど、度重なる五人の猛攻に手も足もでなくなる。

敵が動けなくなった隙を突き、世那が紋様を完成させた。

「よし、今だよ!封印発動!!」

ダンツと鎌を振り下ろし、光の力を発動させる。

準備よく残る二人も武器を召喚し、フォーメーションの構えを取った。

「用意はいいか、イエロー!」

「いつでもOKだよ、レッド」

「よしっ、これで決めるぞ!

エレメンタル・シューウウーット!!」

五人の力を力を込めた光の渦がテッキンシンマを直撃する。

凄まじい光の奔流で敵の姿がかき消され、やがてその影すら飲み込んでいった。

光が収まるとともに、テッキンシンマのいた所は白い煙で見えなくなる。

「終わったようだな」

ほつとした声で智史が口を開いた。

他のメンバーもその一言で少し気が緩む。

だが輝夜と勇人だけはその先にいるダキニを意識していた。

「まだだ、ブラック。」

奴が、ダキニがまだ残っている……！」

「あの狐女をとっ捕まえるまで気が抜けるかよ！」

勇人にとっては前回の借りを返す千載一遇のチャンスなのだ。

このまま見逃すわけがない。

神魔が両親の敵と知った輝夜に至っては、神魔と名のつく者達を引き裂いてやりたい衝動に駆られていた。

そんな二人の胸中が手に取るようにわかったダキニは醒めた眼で睥睨する。

「わらわが憎いか天龍王、鳥獣王よ。」

お前達がわらわに向かうのは勝手だが、余所見をする余裕があるのかのう……？」

「何？」

直後、テッキンシンマのいた場所からレーザー光線が飛んできた。何も防いでいなかった五人はそのまま直撃を受ける。

「うわあああー!!」

「きゃあああ——!!」

身体の装甲がひび割れ、その場にうずくまる。

痛みに呻きながらも身体を引きずり起こし、攻撃の飛んできたところを見やった。

その姿に一同、愕然とする。

「馬鹿な……っ！」

確かに攻撃を受けて消滅したはずなのに!？」

たまらず叫ぶ輝夜にダキニは嗤いだす。

「アツハハハッ、愚か者めが！」

テッキンシンマは我らが使いし古の術をもって創られた者。

守護獣神としての力も記憶も錆びついた貴様ら如きが敵うものか！

！」

「くっ……、ほざけえええ——っ!!！」

「待つんだ、レッドっ!!！」

智史の制止も聞かず、深手を負った状態で輝夜は龍炎刃を手にダキニ目掛けて駆けていく。

「龍牙雷翔おおっ!!！でええいやあ!!！」

ダキニの目前に迫ったところで跳躍し、袈裟がけに切り伏せようと刀を振り上げた。

「危ないっ、レッドおお——!!！」

「遅いわ!!！」

「っ!!！」

怒りに囚われていた輝夜は背後に迫っていたテッキンシンマに気付けなかった。

そのまま横殴りにテッキンシンマの拳を受け、瓦礫の壁に叩きつけられる。

「ぐはああ……っ！」
「レッドー！」

そのまま力なくその場に滑り落ち、倒れ込む。

先程まで握っていた刀は術者の衰えとともに焰となって掻き消えた。

「存外あつけなかったのう、マイルスレッド。
さあて、次はお前達の番じゃぞ」

ダキニの意思に呼応するようにテッキンシンマが残る四人の方へ振り向いた。

立ち向かおうにも満身創痍で動くこともままならない彼らには一ツしか道は残されていなかった。

力を振り絞り、何とか全員立ち上がる。

「みんな、ここは一旦退却しよう。」

僕がレッドを抱えるから、みんなはどうか退路を開いてくれ」

「わかったわ、ブラック。」

イエロー、ブルー、私達は2人を守りながら逃げるわよ！」

「わかったよ。」

いくよ、ブルーー！」

「チッ、ここは引くしかないか」

そう吐き捨てると、三人でテッキンシンマ達の注意を逸らし、その隙に智史が輝夜を抱え連れてきた。

「ほう、逃げ出すか。」

まあよい、倒すのは次への楽しみとして取っておこうぞ」

ダキニの勝ち誇った台詞を背に浴びながら、マイルスマンは必死でそ

の場を離れて行った。

初めての敗北という屈辱に苛まれながら……—。

第4話 動き出す齒車！奇跡の武装転神 パート2（後書き）

マイスマン、初めての敗北。

やっぱね、戦隊だからこういう展開だってあるんです。

だいたいこの後パワーアップがお約束ですが。

第4話 動き出す齒車！奇跡の武装転神 パート3（前書き）

新年最初の更新にして、携帯ページ初の10ページです。
長あっ！！

本格戦闘は次の話で。

第4話 動き出す齒車！奇跡の武装転神 パート3

週明けの月曜日ほど憂鬱なものはない。

まして、あの激戦の後なら尚更だ。

土曜日、帰ってきた輝夜の惨状を目の当たりにした祖父母は言葉を失っていた。

物凄い陰相で詰め寄られたが、不良にやられたの一点張りで無理やり誤魔化した。

なるだけ身体に触れさせないよう、あれこれ言い訳を繰り返せた自分を褒めてやりたい。

怪我を見られたら人間の力で殴られたものでない事がばれてしまう。触らせないことには成功したが、武道に通じた祖父は薄々感づいてそうだった。

わかってる、それがどんなに無茶な言い訳かって……。

天気は嫌味な程の五月晴れだった。

都立星倫学園高等学校では連日の神魔騒動を余所に、スケジュール通り滞りなく授業が行われていた。

当然、輝夜達3-Aの生徒達も例外ではない。

これさえ終われば放課後、バイト代わりに研究所で一つ働きしに付ける。

二日前の激闘にも関わらず、輝夜達五人が学校に来れたのは奇跡的だった。

一日挟んだだけとはいえ怪我がだいぶ引いていたのは、バトルスーツによる保護と獣神としての治癒力の賜物に違いない。

それでも一番重傷だった輝夜は、今も制服の下に包帯で肋骨とわき腹付近を保護していた。

少しでも動くと鈍い痛みが走る。

油断すると、痛みと共にダキニの高笑いが甦つてきそうだった。

いけない、いけない！こんなんじゃ駄目だっ！

神魔への怒りを振り払わんと、がむしゃらに好きでもない授業にかじり付いた。

六時間目の今、3・Aは日本史の授業中だった。

ちなみに担当は彼らの担任鬼がわら……失礼、鬼嶋先生である。

あの外見だが体育ではなく日本史だ。そう、日本史なのだ。

大切なことなので二度言わせてもらった。

「この頃から婦人運動の機運が高まり、平塚らいてう等によって結成された青鞥社が……——」

カリッと鬼がわらの白チョークが止まった。

長年の教師生活で鍛えた、『授業聞いてねえごはいねえがリーダー』がある一定方向でピンピン反応する。

照準を合わせた先にはいかにもオタク風な眼鏡男子が一名。

「星川あ、またぼんやりかあああ……！」

握りしめていたチョークが音を立てて砕けた。

そりゃあもう格闘漫画ばりに。

やべえっ、鬼がわらが久々にキレた！

智史達を始め、クラスメート達は一斉に顔を引きつらせる。

そしてちらりと問題の主を盗み見た。

「うわっ、ブラックホール！」

誰が言ったか知らないが、実に的を得た言葉だった。

事実、鬼と化した鬼がわらでさえもその様子にぎょっと眼を剥く。

無理もない。

厭世感を漂わせ、来る者全てを拒むオーラを放っていれば誰も近寄れまい。

というか、近寄りたくない。

やるせなさで静かな怒りで歪む横顔が、普段ノーテンキな輝夜とかけ離れすぎているため正直怖いのだ。

窓の外をただ意味もなく見つめ、眼鏡越しの虚ろな眼で青空を仰ぐ。

あの時、智史達がいなければ……、ダキニがあっさり見逃さなければ俺は死んでいた。

何をやってるんだ、俺は！！

父さんと母さんのことで暴走するなんざ、みつともねえ。拳句、みんなの足を引っ張ってしまった。

獣神の記憶も戻ってないのに俺、役立たずだ。

情けねえ……。

授業を忘れ、シリアスモードに入ってしまった輝夜の席へ鬼がわらがやってきた。

やばいつ、久々にくるぞ！

今のうちに耳を塞いでおけっ、早く！といった空気がクラス中に伝染する。

みんな自分のことのように身を小さく竦めた。

耳栓の準備も抜かりない。

智史と世那、沙夜子も恐る恐るこの成り行きを見守る。

とうとう鬼がわらが席の側まで来たが、相変わらず傷心で呆けている輝夜は気付きそうもない。

ラストチャンスとばかりに鬼がわらはゴホンツと大きく咳払いした。果たして……――？

「駄目だ…俺はっ、俺はあああ……っ！

コスモレッド、俺は一体どうしたらいいんですか!？」
「……………」

自分で考える、特撮バカが!!

クラスメート達の胸中を同じ思いが駆け抜けた。

駄目だ、もう完全に鬱の極みまでいつちまってる。

事情を知ってる智史達だけは、愛するヒーローの下敷きにすぎる輝夜に頭を抱えた。

何も知らないクラスメート達の脳裏に死亡フラグの文字が躍る。

クラスメートの予想通り、鬼嶋はこめかみの血管を浮き上がらせ、ふるふると震え出した。

駄目なのはお前の授業態度じゃボケええッ!!

最後の理性でもって、鬼がわらは胸中だけで激しく叫ぶのに留める。

それでも、いつもと違う輝夜を多少は気に掛けているのだろう。

無言で持っていた教科書を彼の頭上に軽く振り下ろす。

ポスツと軽い音が響いた。

普段は拳骨の鬼がわらにとしては珍しく加減した方だ。

あいつにしては破格の措置だな。

でもやっぱりお仕置きするんですね、鬼がわら。

仁王像のような担任に、これまた全員が同じことを思ったが恐いので口には出さない。

叩かれたショックでやっと鬼がわらに気付いた輝夜は目を見張って驚いた。

「あつ、鬼がわら!」

NGワードをいとも簡単に解除してしまった輝夜に、鬼がわらはグ

リンと血走った眼を向ける。

いつ命知らずがここにいいー！

智史達及び、クラスメート達の顔からサァーッと血の気が引いた。口を滑らせた輝夜自身もガクガクと震えだす。

「だああーれが鬼がわらじゃボケナスがあああー——！！」

クラス全員が固く眼をつぶる。

ある者は耳まで塞いだ。

その直後、ゲエィィィンツと激しく打ち下ろされる音が教室から廊下まで鳴り響いた。

「ああ、いつてえ…何もあそこまで殴るこたあないだろっ」

拳骨を喰らった頭を擦りながら、HRまで終わった輝夜は智史と共に下駄箱まで歩いていった。

呆れた顔で智史はグリツと言い放つ。

「君が授業を聞いてなかったうえに、鬼嶋をあのだ名で呼ぶからだろ。」

いくらなんでも気が抜けすぎなんじゃないのか？」

「……わかってる。」

それでもっ、みんなに迷惑かけたことが忘れられないんだ」

「輝夜……」

「ハッ、一応自覚はあるのかダメガネ」

左の職員室側廊下から、鞆を肩に下げた勇人が歩いてきた。

何も言えず黙りこむ輝夜を馬鹿にするように口元を釣りあげる。

しかし、いつもと違い眼は笑っていなかった。

「星川、てめえがヘマしたお陰でこっちは退路を開くのに余計怪我するはめになった。」

この落とし前、どう付けるつもりだ？あ！？」

抑えられた勇人の怒りがひしひしと伝わってくる。

いつもなら言い返す輝夜も、今回ばかりは自分に非があるため何も言えなかった。

嫌な奴だが迷惑をかけたのは事実。

きちんと謝らなければならない。

静かに勇人に眼を向け、輝夜は頭を下げた。

「俺のせいで、傷を負わせて……すまなかった。
謝って、どうにかなることではないが」

まさか素直に謝ってくると思わなかったのだろう。

勇人は眼を見張って驚く。

それでもその口から出てくるのはあくまで憎まれ口だった。

「当然だろうっ、馬鹿が……！」

そういう殊勝な態度取るからにはわかってんだろっな？」

「……覚悟は、できている」

「ほう……。なら話は早い。」

お前、しばらく出勤するな。足手纏いだ」

「そんなんっ！」

突然の言い渡しに輝夜のみならず智史も顔色を変える。

何か言いかける智史を睨みつけ、勇人は非情にも切り捨てた。

「自分で言っただろう？覚悟はできると。」

人に迷惑かけたんだ、このぐらい当然だよなあ？」

冷酷に顔を歪め、憎たらしい輝夜を打ち負かす材料ができたことに悦びを覚える。

皮肉にもその表情は勇人自身が嫌悪していたダキニを思い起させた。輝夜のミスを挙げ足に取る勇人の魂胆に気付いた智史は厳しく言い渡す。

「空蓮寺、残念ながら君に輝夜の処遇を決める権利はないよ。司令官は僕の父だからね……」

さっきまで笑っていた勇人の顔から表情が消えた。気に食わないという態度を隠しもせず智史の言に噛みつく。

「結城い、お前、相変わらずこいつに甘いな。」

ここまで庇うなんざ、ただの親友にしては行き過ぎだろ？

こんな奴ほっときやいいじゃねえか。

前々から言おうと思ってたが、お前は黙ってても人が付いてくるタイプだ。

なのに、星川とつるんでるようじゃ余りに勿体ねえ！

もうちょい友達選んだほうがいいぜ？」

輝夜本人を前にして、平然と突き刺すような言葉を並べていく。日頃の輝夜ならば、拙い言い回しであったとしても言い返しただろう。

だが彼は拳を固く握りしめるだけだった。

輝夜との友情を否定された智史は勇人に冷やかな視線をよこす。

「話がずれてるぞ、空蓮寺。」

僕は今そという話をしてるんじゃない。

だいたい、僕が誰と付き合おうが勝手だろ。
それが任務とどう関係があると言っただ？」

どこまでも輝夜を庇う智史に、勇人の苛立ちは頂点に達した。
荒々しく拳を壁に叩きつけると、猛獣のような獰猛さを眼に宿す。

「お前がそうやって甘やかすから、こいつはロクなことしねえんだ！
この間もこいつが突っ走らなけりや少しはマシだったのに……
っ」

容赦ない責めに輝夜は黙って唇を噛み締める。
なお言い返そうとした智史を遮るように、輝夜が口を開いた。

「……わかった。次の戦いには出ない」

「輝夜！？何を言ってるんだ！

今、君が欠けたら奴らに対抗できなくなるんだぞ！！

それと空蓮寺っ、私情で戦ってたのは君もだろう！？

今回は輝夜が暴走したが、君だってそうだった可能性は十分ある
んだぞ！」

「チッ……！！」

痛いところを突かれ、思わず舌打ちする。

確かに神魔相手に冷静さを失ったのは輝夜だけじゃなかった。

事実、勇人のダキニへの敵対心は今も胸の奥で渦巻いている。

「今、大切なのはチームワークだ。

とにかく、テッキンシンマに対抗する手段を考えなければ僕らに勝
ち目はない。

そのためにも僕らがバラバラじゃ駄目なんだ！

仲間割れしてる場合じゃないぞ!!」

「仲間……ねえ？」

俺は自分と同等か、俺以上に優秀な人間でなければ認めらんねえなあー。

お前と香月、白鳥ならわかる。見た目も中身も優れてるからな。だがこいつは別だ。

とろいダサオタク風情が俺と横一列にいること自体気に食わねえ」

「その輝夜に喧嘩で負けたのはどなただったかな？」

黒さを滲ませた微笑を浮かべる智史に、寒気を感じた勇人は顔を引きつらせる。

日頃の優しげな風貌が、今は凍えるような威圧感で彩られていた。

勇人の背筋に冷たい汗が流れる。

傍から見ていた輝夜でさえも鳥肌が立っていた。

「……お熱い仲で結構だな」

精一杯の揶揄で皮肉ると、ちらと輝夜に眼を向け、そのまま生徒会室の方へ歩いて行った。

勇人の姿が完全に見えなくなってから、智史はやっと輝夜に顔を向ける。

憂いを含む親友の眼に、彼は言い知れない焦燥を感じた。

今度は僕が輝夜の力になる。

純粹なまでに自分を信じてくれた彼のために。

出会った頃の事を思い出しながら、ある決意を込め、智史は真摯に語りかけ始めた。

「あいつの言うことは気にするな。

獣神戦隊としては僅かな間だけど、互いに助け合ってきたからこそ神魔に打ち勝ってきたんじゃないか！

僕は……君が守護獣神で、本当に良かったと思ってるよ。

知らないだろ？そうなる前から、僕はずっと君に救われてたんだ！
君が欠けたら意味がないんだよ……！」

「……ごめんな、智史。」

気持ちは嬉しいんだが、少し、一人にしてくれないか？」

「待ってくれつ、今回の事は何も君一人だけの責任じゃない！
ましてや、神魔が両親の敵だったんだらう？

平気でいられるわけがないっ」

黙りこくつたまま唇を噛みしめ、輝夜はきつく拳を握りしめる。

自分のせいで余計な怪我をさせたのに、智史は責めるどころか気遣
うばかりだ。

その優しさが輝夜の胸には痛かった。

「智史……お前、優しすぎるよ」

「っ！」

儚げに微笑む親友の姿に智史は声を詰まらせる。

一陣の風が智史の側を吹き抜けた。

智史が声を掛ける間もなく、輝夜はすでに彼の側をすり抜けていた。
慌てて呼びかけるもすでに遅く、輝夜は学校を後にした。

苦しい……。

そう思っただのは久々だった。

いつそのこと、責めてくれた方が楽だったのに。

優しかったのは何も智史だけじゃない。

世那や沙夜子もダキニと対峙した時の輝夜がおかしかったことを氣
に掛け、ずっと昼休みもさり気なく気遣ってくれていたのだ。

その時は叔母の家で鍛えられた作り笑いで、何とかいつも通りの振

りをしてみせた。

だがちよつとでも油断したら駄目だ。
すぐに顔や行動に出てしまう。

「俺……何やってんだろ？」

返す人間もないのに問いかける。

憂鬱な時ほど時間の感覚が無くなるのか、あつという間に研究所前まで辿り着いていた。

どんな時でもバイトを休むことは無かったが、今回ばかりは初めて休みたいと心底思った。

それでも生来の生真面目さと責任感から、億劫そうにプレスを門のインターフォンに掲げる。

獣神の玉に反応し、特殊センサーが光を発した。

それと同時に頑強な鉄門が左右に開いていく。

その間を通り抜け、いつものように研究室にまで入って行った。

スクリーン一面に映し出されたマイスマン専用メカの最終確認を終え、結城博士は眼元のコリをほぐしていた。

後は彼らが獣神の玉を掲げて起動させてみるだけだな。

チーム一丸となって仕上げた大事業の完成に、結城博士と研究所メンバーは満足げに微笑んだ。

「やりましたわ、博士！」

これで智史君達も以前より戦いやすくなるでしょうね」

「いいや、これからだよ日向君。」

これでやつと神魔族と並んだに過ぎないんだ」

「そうは言っても、対等に渡り合えるだけ凄いことだと思いますが」

「君たちはまだ、神魔皇帝と対峙したことがないからな……」
「えっ？今何か仰いませんでしたか？」

囁くような独り言を耳聴く聞かれるも、結城博士は口元を上げただけだった。

秘密にしないで僕達にも教えてくださいよおくと、あちこちから声が上がる。

また今度だと笑いながら、博士はパンパンと手を叩いた。

「さあ、今日は通しのメンバーだけ残って、他は各自の部署を見回った後解散！」

そろそろ輝夜君が来る時間帯のはずだから、私はここに残ろう」

「了解！結城博士、お疲れ様でした」

「お疲れ様です」

口々に声を掛けて行きながら研究員達は第一研究室を後にしていく。通しのメンバーである日向と桐嶋だけが残った。

最後に眼鏡の研究員が出て行こうとした際、輝夜と鉢合わせした。研究員が笑いかける。

「君、星川君だね？」

ちようど良かった！今、君達のメカが完成したんだ。

中で博士達が待ってるよ」

「あ、はあ……。わかりました」

そのままスキップでもするように去って行った彼の背を見送ると、入れ替わりに中へ入った。

結城博士、桐嶋助手、日向助手の三人が輝夜の来訪に気付く。

「おお、輝夜君！」

そろそろ来る頃だろうと話をしていたところだよ。
そういえば智史はどうしたんだい？
いつも一緒に来てただろう？」

何の屈託もない博士の笑顔が胸に突き刺さる。

勝手に一人で先に来たとは言えず、思わず視線を逸らした。
いつもと様子が違う輝夜に気付いた二人の助手はさり気なく聞き出そうとしてみた。

「どうしたの、輝夜君？」

何か学校であつた……？」

「……いえ、別に何もないです。

ちよつと、調子が悪いだけで」

「そうかい？」

さつきから元気がないように見えるけど。

誰かと、喧嘩でもしたのかな？」

「っ……それは」

——お前、足手纏いだ。

勇人の言葉が反響する。

その通りだ。こんな調子じゃ、神魔に勝つことすらできない。

神魔皇帝への怒りと自己嫌悪の狭間で心が乱れてバラバラになる。

打ちひしがれた輝夜の姿から、何かを引きずっていることを結城博士は感じ取った。

一緒に落ち込むことはできるが、この子は同情程度で立ち直りはするまい。

ならばと博士はからりと明るい笑顔を浮かべ、輝夜の手を引いた。
いきなり手を引かれ、驚いて博士を見る。

「さあ、せっかく来てくれたんだ！

我々の研究成果の第一被験者になってもらおうかな？」

「えっ、あ、博士っ、俺ちよっと」

「さあさあ、遠慮せずに！」

「桐嶋さん！？待ってください、俺っバイトしに来ただけで……」

「大丈夫よ、これも立派なバイトだから。」

ひとまず、ちゃっっちゃっと中央の柱から降りるわよ」

三人から笑顔で押し切られ、以前獣神のホログラムが浮かんでいた円柱の方へ引きずられていく。

柱の前にある小さな三角柱の台の前に来ると、博士が赤色の丸ボタンをポチッと押した。

地割れのような音が響きわたり、床下が僅かに振動する。

振動が治まると、割れ目すらなかった柱の正面が自動ドアのように右へスライドした。

なるほどあのボタンは扉の解除装置だったようだ。

「輝夜君、私の後をついてきてくれ。」

桐嶋君と日向君にもこの実験に立ち会ってほしい」

「もちろん、喜んで参加させていただきます！」

「奇跡の最初の目撃者になるかもしれないんですもの」

未だ意気消沈している輝夜に対し、二人はかなり乗り気だ。

柱の中へ全員入り込むと自動でドアが閉まった。

そのまま地下へ音もなく下りていく。

乗り込んだ先はエレベーターだったわけだ。

周囲が透明であるお陰で、地下要塞の全貌が明らかとなった。

「自衛隊の格納庫か何かか？」

この間、智史と白鳥が一緒だった時は全体がわからなかったけど、

しつかりした要塞みたいですね。

そういえば、第一研究室から入ったのも初めてだ」

特撮好きな輝夜の興味に良い意味で引っかけたようだ。

少し元気を取り戻しかけてる彼に、結城博士は次々と答えていく。

「サンダーバードのような秘密基地に憧れててね……」。

ちようどそんな時にここの責任者に任命されたもんだから、はりきって色々やってしまったよ。

妻と智史で固まって子供っぽいと言うもんだから、家じゃ自分の口マンを語れなくてねえー」

少年のような茶目つけのある瞳で、博士は自慢の基地をくるりと眺めまわす。

気質的に通じ合うものがあるのか、輝夜も博士に倣^{なら}って眼で追ってみた。

銀灰色の鉄筋があちらこちらに張り巡らされているかと思えば、冷たさを感じさせないデザインで統制されている。

例えるなら、子供が親に買ってもらった秘密基地ばりの内装といったところか。

ライトグレーやペールブルーのようなシャープだが柔らかな色合いの中に、赤やオレンジをポイント使いすることで安全に考慮したデザインに仕上がっている。

床は透明感のある薄いライトブルーのパネルで覆われていた。

光源が床下に埋められているのか、時々さざ波のような光の紋様が生まれる。

基地にあるまじき幻想的な光景に輝夜はほっと息をこぼした。

「綺麗だなあ……」。

光の海みたいだ」

「光の海、か。」

ずいぶんと詩的な表現をするね。

実際はそんなロマンチックな代物じゃないんだが……」

「と、言いますと？」

好奇心に満ちたきらきらした眼で、話の先を促す。

ふと、ほんの僅かだが苦いものを含んだ表情を見せ、博士は苦笑した。

同時に、チンツという独特の音を響かせ、エレベーターが地下へ到着する。

エレベーターから降りると博士は説明を始めた。

「このパネルは、対神魔用探知機と迎撃機能を備えた云わば兵器なんだ。」

やっと完成にこぎ着け、ここだけじゃなく研究所の床全てをパネルに変えたのさ。

君が智史と共に初めて研究所に来た時のことを覚えてるかい？」

「はい。確か神魔兵が突然現れて、それで何とかしなきゃと思ってたらいつの間にか変身してて……」

「そうだ。本当はああいう事態に備えてこれを設置していたのに、試運転でミスが発覚！」

結果、君がいなければ我々は死んでいた……」

結城博士の話に輝夜はハツと眼を見開いた。

これは今の自分と同じではないか。

先程のあの顔はおそらく自責の念からだろう。

何かに気付いた輝夜の様子に、博士達は優しい眼差しを向けた。

「なあ、輝夜君。」

人というものは不思議だと思わないか？

命にかかわりかねない失敗を起こして、やっと人の役に立つことができるし、物も作り出すことができるようになる」

「俺は……」

「君が前回の戦いを引きずっていることはわかっているよ。責任を感じていることもね。」

だが輝夜君、君は若い。若い頃は皆、過ちを犯すものだ。私のような大の大人でも、だ」

博士と輝夜の視線が交差する。

僅かに桐嶋と日向を見れば、二人も強く頷いた。

「そうよ、輝夜君。」

もしそれでも自分を責めずにいられないのなら、みんなを守ること
で責任を果たしなさい」

「みんなを……守る？」

でも俺は、みんなを守るところか……」

激情に駆られ、ダキニを倒そうとしたことが脳裏に蘇る。

己の人生を捻じ曲げた神魔への憎悪は深い。

また怒りに我を忘れてしまいかもしれない。

「俺が行ったら、またみんながっ」

「大丈夫だよ、輝夜君はもう氣付いたんだから！

今度はきつと、自分をコントロールできるよ。」

それに……君が傷付き苦しんでいる時は仲間が支えてくれてたはず
だよ？」

「あ……」

そうだ。自分が悩み苦しんでいる時、智史達は精一杯支え、励まして
くれていたじゃないか。

勝手に、一人で戦っているつもりになっていた。

今度は自分の番だ。

みんなが悩み苦しむ時は自分が支えになる。

決意を改め、輝夜は三人の眼を真っ直ぐに受け止めた。

明らかに雰囲気の変わった輝夜に、博士達はもう大丈夫だと安心する。

応えるように輝夜も微笑みかけた時、突如、獣神の玉が強烈な熱を放ち紅く輝き出した。

「熱ッ、何だいきなり!？」

「博士ッ、エネルギー測定値が有り得ない数値をあげてます!」

獣神の玉の異変と共に、桐嶋が右側に設置されてある測定機を指さした。

慌てて日向がその側に駆け寄る。

「300を超えたプラスエネルギーだわ……」

これ以上は測定不能です!」

「まずい。輝夜君っ、一旦ブレスを外すんだ!」

血相を変えた博士が指示するも、凄まじい光と熱に阻まれ取り外すことができなかった。

緋色の光が要塞一杯にまで膨れ上がる。このまま限界を超えてしまうのかと誰も危惧した時、光の膨張が止まった。

要塞に溢れた光はそのまま急速な勢いで、獣神の玉の中に収まっていく。

最後の光が入っていった時、玉から一本の紅い光線が飛び出していた。

光線は要塞の中のある格納庫に向けて伸びている。

「何だ？俺にそっちに行けって言うのか？」

光に導かれるままに輝夜は走り出す。

博士達も慌てて後を追った。

辿り着いた先には、前回来た時に見せてもらったジェット機……というには大きめの輸送機が佇んでいた。

機体そのものは赤を基調に、双翼の部分は白と黄色いラインで縁どったスマートなデザインだ。

機体のコックピット近くに装着された紅いクリスタルが、プレスから伸びる光線で繋がっている。

「これって博士が俺達のために作ったメカ？」

俺の玉に反応したってことは、じゃあこの輸送機が俺のメカってこと！？」

「どうも……そのようだな。」

見てごらん。パワーオーラとの波長が整ったのか玉の光がいつも通りに戻っている」

「あつ、ほんとだ！

もしかして博士達が言ってた実験ってこれの事だったんですか？」

前回のことで照らし合わせて出した推理だったが、博士達は首を横に振った。

むしろ意外な事態だったからか、未だに困惑している。

軽く頭を振って、結城博士はメカに視線を向けた。

「驚いたよ、こんなことは実験中にもなかったと言うのに。」

パワーオーラと獣神の玉の関連性については未だ研究が必要のようだ」

「実験つて、まさか智史の玉を使つて？」

「そうだ。ただ、一つとして同じ玉がないように、結果も同じとは限らない。」

今回の実験は君に何らかのマシンの操縦席に乗ってもらい、できるのなら起動してもらうまでをやってもらうつもりだった」

「結果としては、いずれかのマシンとの適合性を調べる段階まですつ飛ばしちゃったけどね」

笑いながら日向が付け加える。

続けて桐嶋が後を継いだ。

「という訳だから輝夜君、早速だけど、この機体に乗ってみてくれないかな」

「それはいいんですが、どうやって乗れば……」

「機体の側面からコックピットに入れるように段差が付いてるだろう？」

そこを登れば適合者のみ、天井が開いて中に入ることができるよ」

「わかりました。じゃあ……早速」

想像以上の大きさに圧倒されながら、輝夜はそろそろと近づいていく。

幼少の頃に憧れていたジェット機を前に、わくわく感と緊張で身体が震えた。

これから戦隊シリーズのメカみたいなのを自分が乗りこなさなければならぬのだ。

震える手を叱咤し、ゆっくりと段差に手を掛ける。

一瞬のことだった。

紅い機体から、電流に似た凄まじいエネルギーが急激に身体へ流れ込んできた。

余りに強すぎる力に縛られ、輝夜はその場で硬直する。

眼前に火花が迸ると、視界が大きく揺れて白い光が爆発した。

咄嗟に眼をつぶり、強い光から眼を守る。

光が徐々に収まってきた頃、ゆっくりと輝夜は瞼を開いていく。驚くことに、眼の前では見たこともない不思議な光景が広がっていた。

見知らぬ異国の、それも遙か大昔の人間がしていたであろう衣服を纏った人々が戦っている。

アイヌや琉球の民族衣装とギリシャやケルトの衣装を混ぜたような和洋折衷な服装だ。

「何故だ、俺はさっきまで地下要塞にいたはず……！
ここはつ、一体どこなんだ!？」

《ここは貴方の記憶》

「誰だ!」

《私は天龍王により残されたパワーオーラ。
貴方の力の一部であり記憶。
それを今、返す時が来ました》

「返すってどうやって」

輝夜の問いに答えるように眼の前の光景が移り変わる。
そこには見覚えのある姿の戦士達が立っていた。

「あれ……?」

智史? 香月さんに空蓮寺、それと白鳥か?」

皆、輝夜にはおなじみのマイスマンの格好だ。

ただし、普段は頭部に被っているマスクは無く、全員素顔をさらしている。

やはり神だからか、人間の時とは髪も眼の色も違っていた。

その中で紅い色だけが見つからず、きよろきよろと辺りを見渡す。

見つけた！

今前線で戦い、黒い瘴気を浄化している。

後ろ姿しか確認できないが、間違いなく自分だろう。

腰よりも長い真紅の髪をなびかせ、一心不乱に刀を奮う様はまさに龍神の如く。

「カッコイイなあ。

とても俺の前世とは思えないぜ」

感心しながら見てみると、残った黒い瘴気が集まり出して大きく膨らみ始めた。

「！これはテッキンシンマの時と同じ……っ」

獣神達の背丈の数十倍にまで膨れ上がった瘴気は黒い大鬼へと変貌した。

「ティダッ、武装転神だ！」

智史の前世らしき獣神が天龍王に呼びかける。

無言で頷くと、天龍王ことティダは自身の身体よりも大きいマシンに似た物体へ手を伸ばした。

手を触れた途端、ティダの身体は紅い光となり、その機体と一体化していく。

驚いたのはそこからだ。

何の変哲もない機体がどこに割れ目があったのか、有り得ない箇所

から折れ曲がり変形していく。

腕、胴体、足……極めつけは顔だ。

まるで戦隊ものや、車から変形するロボットの変形シーンを見ているようだった。

「武装転神！ティダリオン！！」

機体と融合したティダは巨大な人型ロボットへ変形を遂げた。

呆然と立ち尽くす中、輝夜の耳元で声が響いた。

《さあ、これで大切な記憶はお返し致しました。

また、私と共に戦いましょう。

マイ・マスター……》

「えっ？またってどういう……」

再び強烈なエネルギーが押し掛かる。

白い光の渦の中、紅いロボットが焰の剣を召喚するのを僅かに見た。

光が収まった時、輝夜は地下要塞に戻っていた。

第4話 動き出す齒車！奇跡の武装転神 パート3（後書き）

最後にちよこつと出ました、武装転神。

次は現代で実行します。

取りあえず主人公は鬱脱出！

次はぶつちぎるぜ！！

第4話 動き出す齒車！奇跡の武装転神 パート4（前書き）

今回、長くなりそうでしたのでパート5でロボ戦に突入します。

第4話 動き出す齒車！奇跡の武装転神 パート4

視界の霧がゆつくり晴れていく。

それと共に、今、自分がどこにいるのかをはっきり思い出した。

そう、ここは地下要塞。つい先程、結城博士達に連れられてここに来たのだった。

神魔に対抗できるメカとの適合性を測るために。

手のひらからは金属の冷たさが伝わってくる。

いまだ、輝夜は輸送機の段差を掴んだままだった。

今のは夢だろうか？

それにしてもやけに現実味があったような。

しばし考え込んでいると、後ろから博士達が声を掛けてきた。

「どうしたんだい、輝夜君？

乗るのが不安なら、また今度でもいいが」

どうも記憶の中にいた時間帯はカウントされてないようだ。

慌てて輝夜は首を横に振った。

「あつ、いいえ！

ちよつとボオーっとしてただけで。

今すぐ、ただちに乗りますんで、ハイッ！」

ゆつくり段差に足を掛け、上に向かい交互に手足を動かして登っていく。

コックピット搭乗口にまで来ると博士の言った通り、スライド形式になっているドアが自動的に開いた。

ちょうど車の窓ガラスが車体に吸い込まれ、収納されるのと似てい

る。

内部の取っ手に手をかけ、座席に座った。座席はライトブルーの大きなもので、座り心地は固くもなく、かと言って柔らかすぎず丁度いいぐらいだ。

座席に腰かけるのを機体が確認したのか、何の前触れもなく座席そのものが右に移動し始めた。

「わわっ、いきなり何だよ！」

慌てた輝夜は動こうとするも、シートベルトが勝手に装着されてしまったせいで抵抗できなくなる。

動き続ける座席はやがて機体の中心付近まで来たところで動きを止めた。

ほつと一息ついたのも束の間、今度は上へ座席が昇っていく。

蒼い照明で照らされた機械の壁を何とはなしに眺めていると、ようやく視界から蒼が消えた。

と同時に座席の上昇が止まる。

しばらく待ってみても動き出す気配がなかったので、ここが本当の操縦席なのだと気付いた。

薄暗いため、はっきりとは言えないがけっこう中は広いようだ。

手前にはパソコンに似た小さな操作パネルが詰め込まれていた。

そのすぐ右側には銀色の逆三角形の枠の中に、左上から時計回りに黄色の三角、青の四角、赤い丸型のボタンが堂々と主張している。

本格的な輸送機の割には随分子供向けのわかりやすいデザインだが、かえって操縦の知識のない自分にはこれぐらいが調度いいのかもしれない。

思わず輝夜は口元が綻ぶのを抑え切れなかった。

これから自分はこの機体と共に大空へはばたくのだ。

憧れが現実になろうとしている今、興奮のあまり心臓が激しく高鳴

る音が頭に響く。
実験を忘れ浸りきっていると、中の通信機器を通して結城博士の声が飛んできた。

「おーい、輝夜君！

喜ぶのはいいが、実験を忘れてもらっちゃ困るよー！」

博士の声に現実に取り戻された輝夜はドキリとし、肩をはねさせた。

「あつ、いけね！

すいませんっ、つい嬉しくて忘れてました」

「ははっ、まあ気持ちはわかるがね。

では早速説明に移るが、手前右側に逆三角のパネルがあるのはわかるかな？」

「はい、三角とか四角と丸の三つだけボタンが付いてるのですか？」

「そうそうっ、それだよ！

その中の一番手前にある……何だったかな、赤い丸ボタンを押してみてくれ」

「はい！……これだよな？」

間違いなくそのボタンなのだが、なにせ初めての操作なため不安でしょうがない。

そんな彼の心情を察するように、博士達は励ますように笑いかけた。博士達の笑顔に、輝夜もぎこちない笑みで精一杯応える。

ええいつ、男だろ輝夜！？

覚悟を決める！

意を決して彼は力を込めボタンを押した。

突如、機内が白い明かりでいっぱいになり、エンジン音が唸りだす。

正面のフロントガラス側ではそのガラスよりも手前に謎の平面画像スクリーンが正面と斜め右上、斜め左上に表示された。

現れた画像が外の景色を見るのに邪魔になることはなく、変わらず博士達の姿は確認できていた。

輝夜を囲むように現れたスクリーンには象形文字、もしくは楔文字に似た訳のわからない言語が映し出されている。

歴史には自信があつたが、それでもこんな言語は見たことがなかった。

「博士え、何かボタン押したら変な言語が出てきたんですけど…」

「変な言語？　もしか幻妖帝国神魔の文字じゃないか？」

「幻妖帝国って、それが神魔達の国家の正式名称ですか。」

でも、何でその文字がマイスマン専用メカのスクリーンに？」

そう、おかしいのだ。

マイスマン専用にしてパワーオーラの付いたメカが、何故敵である神魔の言語を有するのか？

一呼吸置き、結城博士は話し出した。

「君達にはまだ伝えてなかったが、本来守護獣神とは神魔も含めた地球上のあらゆる命を守る神のことだ。」

かつての神魔族は天使、精霊、妖あやし、人間の四種族による他民族国家だった。

彼らは互いを思いやり、種族間の違いを超えて共存共栄の社会を築いていた。

その平和を見守り、時に国の元首である神子みこへ助言を行ってきたのが守護獣神ことマイスマンなのだ」

守護獣神が神魔一族の崇める神だった……。

とても信じがたいことであつたが、同時に輝夜はダキニの言葉を思い出していた。

——人間達が裏切つた。

もしそれが本当ならば、神魔族は人間側に付いた守護獣神達から見捨てられたと思つてゐるのではないだろうか。

否、そんな感情など通り越してゐるはずだ。

憎悪に顔を歪め叫んだダキニの姿が脳裏に焼き付いて離れない。

絞り出すような声で、輝夜は苦悶する。

「それじゃ、ダキニ達が俺達を憎むのは、守護獣神なのに人間の味方しかなかったから……っ！」

「では、大人しく殺されるつもりか？」

人間が悪いのだから、我々は殺されても仕方ない？

そうじゃない！例えそれが事実だとしても、それは物事の一面を見ただけに過ぎないんだ！！

私は神魔の歴史を知る者から真相を知らされた。

人間と他の種族との間で内乱を起こすよう仕組んだ者がいたと！

「仕組んだ？一体、誰が」

「それは君達守護獣神が一番よく知つてゐるはずだ」

知つてゐるはず……か。

結局はまた前世の記憶を探らなければならないのか。

自分達の記憶が頼りなのはわかるが、博士も大切なことを隠してゐるような気がしてならない。

こちらだけ情報提供し、あちらは何も伝えないのは不公平ではないのか。

フロントガラスの向こうでこちらをじつと見つめる博士を、彼もまた黙つて見返した。

しばし無言のやり取りが続く。

やがてフツと緊張を解き、博士の雰囲気がいっもの穏やかなものに

戻った。

「とにかく、今は神魔の真実を探っている場合ではないな。一刻も早く、君にはそのマシンを使いこなしてもらわなきゃならない。少々前置きが長くなったが、その画面の文字を適当に読んでみてくれ」

そんなにいい加減な方法でいいのだろうか？

しかしメカを作った当事者の言うことだ、信じてやってみようと口を開いた。

その先のことは博士を除く全員が驚嘆した。

「えーっと……紅き^{ほむ}焰^{えん}の王——ティダリオン。

ここに記すものは、汝^{なんじ}の真名^{まな}なり。名は呪^{おし}にして魂の鍵。

扉を開きたくば、汝の真名を唱えよ」

読み方を知らないはずの輝夜が神魔文字を解読した。

それは、結城博士が神魔を知る者から教わった解読法で解いた文と一字一句違わぬものであった。

二人の助手は我が耳を疑った。

一番驚いている輝夜に至っては、信じられないという面持ちで画面をひたすら凝視している。

だが更に驚くことが彼を待っていた。

画面から聞き覚えのある声が語りかけてきたからだ。

《マイ・マスター、どうぞ画面の指示に従って下さい》

「!? なっ、この声、もしかやパワーオーラか!」

《ご名答です。さすがは我が主。》

ですが時間を掛けている暇はありません。
偽りの神魔が侵略を開始しています」

「はっ？偽り……だと？」

テロと聞き、博士達は眼元を鋭く引きしめるが輝夜は別の言葉が気に掛ってしまった。

偽りとはどういうことなのか。

輝夜の会話を気にしながらも博士達は地下要塞の巨大画面のスイッチを入れる。

神魔の居所を自動察知してか画面上で、街中で暴れまわる屍鬼達とテッキンシンマの姿が映し出された。

恐怖を顔に貼りつかせた人々が、あちこち散らばるように逃げ惑っている。その中には神魔達をしきりにカメラで映し、命懸けの実況を続ける速水達レポーターの姿もあつた。

その光景を見ていた輝夜の眼が強張る。

拳銃を構えた警官の姿も見えたが、神魔相手にはこけおどしにすらならない。

ほんの僅か、博士は輝夜の様子に気を留めたが、すぐに他のマイスマンに向けて現場へ急ぐよう指示を出した。

再び、パワーオーラは話を続ける。

《偽りの者については、いずれ真実を思い出すことでしょう。

今は奴らから全ての命を守ることをお考えください。

さあ、マイ・マスター。真名を唱えて……》

「真名つて、前世での名前のこと？」

それとも今の名前？」

《今の名も真であることに変わりはありませんが、あくまでそれは人間として生きるための楔。

真名は魂を表すものです。神としての貴方なのです》

「うーん、よくわかんねえけどあのRPGの勇者みたいな名前がそ

うなんだな。

じゃあ、言っぞ。

……—ティダリオン！」

力強い声で、輝夜は解呪の音霊かいじゆ おとだまを放った。

音の振動がコックピット内、そして通信機を通し、地下要塞中に響き渡る。

しかし、何も起こらない。

結局何の意味があったのだと、パワーオーラに内心愚痴をこぼす。音の余韻さえも消えかけたその時、腕のプレスが再び高熱を放ちだした。慌てて見れば宝玉が真紅に光り、それに応じて機体に付けられたパワーオーラも同じ色で輝いている。

紅いパワーオーラの光はどんどん増していき、ついには幾筋もの光線となって、残る四つの機体のパワーオーラへと飛んで行った。

またの不思議体験に、博士達も画面から輝夜の方へ慌てて向き直った。

光の入った四つのパワーオーラは漆黒、黄色、白、蒼の輝きを見せる。

しばらくすると、無人である機体からエンジン音が聞こえてきた。エンジンまで掛かったことで、博士達は更にぎょっと眼を見開く。

「馬鹿な……まるでマシンが生きているかのようだ！」

今日の事は何もかもが予想外すぎる！！

輝夜君、それに乗っついていて何もないか？

もし気分が悪いようなら今すぐ降りても……」

「博士！俺なら大丈夫ですから。

それに、これはパワーオーラの指示でしたことです」

遮るように言葉を挟むと、その内容に驚いた博士が泡を食ったように問い詰めだした。

「何！？パワーオーラが自我を持っているだと！？」

「少なくとも俺の場合は。」

それより博士っ、俺にこの機体を貸して下さい！あと残り四つの機体も。

これがないとテッキンシンマには勝てないんです！！

お願いします、博士！！」

何らかの確信を持った発言に結城博士は心を動かす。

恐らく輝夜のパワーオーラが教えたのだろう。

それでも、飛行機を操縦したこともない彼に任せてもいいのだろうか。

君達はどう思つかと首を向けた途端、博士ははっと息を呑んだ。

日向と桐嶋が輝夜に同意するように、強い決意を込めた瞳で彼を見ていた。

彼らの決意に遂に博士も腹を決めた。

「よし、わかった。マシンの使用を許可する！

ただし現場は住宅街だから、くれぐれも一般人を巻き込んではいけませんぞ！！」

「……っ、はい！

ありがとうございます！

いくぞ、パワーオーラ！！」

勢いよく命じると、澄んだ声が真つすぐに輝夜の頭に届いた。

《御意。輝夜様、ひとまずマイスマンの姿にお戻りください。

そうすれば、貴方様の脳内に直接、マシンの操縦方を送り込むことができますので》

「わかった。獣神覚醒！」

紅い焔に包まれると瞬時に火が四散し、マイスレッドの姿へと変身した。

「さあ、パワーオーラ！

早速、頼むぜ！！」

応えるように、輝夜の脳内へ光の信号が送られてくる。

普通は理解するのに時間がかかることでも、不思議と獣神に関わる情報はすると頭に入った。

本来の獣神の能力をフル活用し、彼は未知の技術を自分のものとし吸収する。

「へえ……だいたいこんな風にすりゃいいんだな。

おーっし、いつけえええ——！！」

アクセルを踏み、一気に眼の前の操縦桿を押し倒す。

そのまま基地の中を滑るように滑走し、発進用出口へ進んでいく。出口へと続く滑走路にまで差し掛かると、徐々に速度を増していく。その勢いのままジェット輸送機は滑走路を滑り切り、遂に大空へと羽ばたいた。

輝夜が五つのマシンを引きつれて現場へ急行している頃――。

住宅街の中心部で屍鬼が暴れまわり、市民は混乱の中で逃げ惑っていた。

急ぎよ連絡を受け、変身した智史達四人が現場へ来た時、そこはデッキンシンマと屍鬼達により蹂躪された後だった。

未だ怪我を負ったせいで逃げ損ねた人達をマイスホワイトとマイス

イエローが介抱する。

二人が市民を安全なところに逃がしている内に、ミスブラックとミスブルーで屍鬼達を迎え撃った。

「ブルーツ、まずはテッキンシンマの前に屍鬼を殲滅せんめつするぞ！」

「言われなくとも！」

智史の指示に勇人が応える。

輝夜不在の中、智史が中心になって戦隊メンバーに指示を出していた。

そんな彼らの活躍を偶然目撃した速水は、慌ててカメラマンに映すよう求めた。

ちょうど今は現場を中継している時、チャンスだ。

「見てくれっ、彼らだ！早く映して！！

——こちら、現場の速水です！

みなさんっ、見えますか！？今、我々の前に正体不明の戦士ミスマンが現れました！！

現在、神魔と激しい攻防を続けている模様です」

夢中になって速水はミスマン達の姿を伝える。

命知らずな中継を行う速水達に気付いた世那は怪我人を沙夜子に任せ、すぐさま彼らの元に跳んで行った。

堪らず世那は怒鳴りつける。

「何やってるんですか！？

今、神魔が向かって来てるってのに……！

早く避難してくださいっ、庇いきれませんっ！」

突然例の戦士がやってきて興奮したのも束の間、黄色の戦士に怒鳴

りつけられた速水達は啞然とそのマスクを見つめる。
だがそこはプロ。

すぐさまショックから立ち直り、彼女にインタビューを試みた。
勢いと間違った情熱のままに速水はマイクを向ける。

「初めまして、私、旭日山放送の速水と申します。
一つお伺いしたいことがあるのですが、貴方がたは一体何者なんですか？

何故、警察や自衛隊でさえも敵わない神魔と戦うのでしょうか？」

「は？えっ、いきなりそんなこと言われても……。」

使命だからとしか言いようが……って何言わせてるんですか！

ほらっ、そんな特攻野郎みたいなことしてないでさっさと逃げる！
！」

危うくペースに乗せられそうになった世那だが、戦闘中であることを
を思い出し突っぱねる。

しかし速水も、はいそうですかと引き下がる性格ではない。

特に九年前の事件に執着していることもあり、神魔と関わっている
マイスマン取材することで何かを掴みたかった。

なおも世那と速水達との間で膠着状態が続く。

速水との口論に夢中になっていているうちに世那は気付けなかった――
背後に屍鬼が迫っていることに。

「危ないッ、イエロー！」

焦燥を帯びた沙夜子の声が耳朶を打つ。

素早くマイスレーザーを取り出すも、すでに敵は爪を振り下ろした
後だった。

「イエロー――！！！」

駄目だ、間に合わない！

遠くから走ってきた智史と勇人が諦めかけたその時。

耳元で破裂したような激しい音が轟いた。

ぐらりと屍鬼の身体が僅かに倒れる。

その隙を突き、世那がレーザーで止めを刺した。

屍鬼の肉体が灰塵に帰す。

突然のことに身体を強張らせていた速水は遅れて薰ってきた硝煙の匂いのする方に顔を向けた。

「遠山警部、貴方が……」

拳銃を構えたまま進み出た遠山が不機嫌そうに鼻を鳴らす。

「フンッ、誰かと思えば貴様等か。ここは避難命令が出ていたはずだ。

ヒーローごっこも大概にするんだな」

最後の一言は世那に向けて放たれたものだった。

マスク越しに睨みつけているため相手に表情はわからないはずだが、世那から放たれる無言の怒気だけはごまかせなかった。

それに気付いてか、遠山は皮肉めいた笑みを浮かべる。

「おっと、これは凶星だったかな？

だが今言ったことを訂正するつもりはない。

確かにお前達ミスマンの活躍によって、神魔による被害は最小限に食い止められてきた。

だがな……はつきり言って得体の知れない連中に背中を預けるほど俺達は甘くないぞ」

静かだがドスの利いた声音に、肝の据わった世那でさえも身体を強ばらせた。

この刑事は自分達のことを信用していないのだ。

それどころか神魔と同じように見ているのかもしれない。

そう思うと哀しくなったが、いつの間にか側に来ていた沙夜子から肩に手を置かれ我に返った。

「仕方ないわ。

誰もが手放して私達を受け入れてる訳じゃないのよ」

「ホワイト……」

わかってもらえない切なさに胸を締め付けられるが、それは自分だけではない。

沙夜子や智史、勇人だつてきついのだ。

少し視線をずらせば、屍鬼を倒し終えた智史、勇人がこちらを見ていた。

輝夜ならこんな時、なんて言うだろう？

今はここにいない大切な仲間の姿を思い浮かべる。

その笑顔が浮かんだ時、言うべき言葉が浮かんできた。

再び顔を上げ、遠山に視線を合わせる。

「そうですね、わかりましたっ。

例えば貴方達が信じてくれなくても、私達は最後まで神魔と戦いますから！

だからっ、いちいち嫌み言うなあ——っ、この石頭!!」

「ちよつとイエロォっ!？」

すいません、彼女に悪気はないんです！

ただちよつと、いや、かなり口が悪いだけで……」

慌てて智史がフォローに入るも時すでに遅し。

石頭呼ばわりされた遠山は米神を引くつかせ、わなわなと拳銃を握った手を震わせていた。笑っちゃいけないとわかっているが、速水と勇人は俯いた姿勢で笑いを噛み殺す。

目敏く気付いた遠山はギンと鋭い眼で睨みつけた。

肩を竦めて速水はやり過ぎすも、近くで上がったスタッフの悲鳴に一転険しい顔に様変わりする。

世那達四人と遠山もすぐさま臨戦態勢に変わった。

彼らの眼に飛び込んできたもの、それは元凶であるテッキンシンマと美しき神魔ダキニであった。

パサツと鉄扇を広げダキニが妖艶に微笑む。

「フフツ、こうしておれば来ると思っておったぞマイスマン。

……おや？一人足りぬと思えば、マイルレッドがおらんのう。

奴はどうしたのじゃ？よもや、怖気づいて逃げたわけではあるまい」

余裕を見せながらも鋭く詮索してきたダキニに、智史達はグツと言葉を詰まらせる。

ここに来る前、智史はあらかじめ世那と沙夜子に学校での出来事を話していた。

当然世那達は勇人を問い詰めるも、勇人は輝夜への嫌悪を隠しもせず二人をあしらうだけだった。

大変なことになったと智史は危機を感じた。

今眼の前には前回敗北したテッキンシンマと幹部であるダキニがいる。

まともにぶつかっても今の自分達では勝てないだろう。

せめて輝夜がいれば……五人の力で何か打開策が打てたらうに！

マイスマンからの返事が返ってこないことに何か勘付いたのかダキ

二はこれ以上にない程に口元を綻ばせた。

「なあーるほどお、そうかそうか！
貴様ら、仲間割れか」

凶星を突かれ世那の肩が揺れる。

そうでないメンバーも心臓の裏に刃を当てられたような気になった。
一方、遠山と速水も思わぬ事実に見張り、マイスマンの方を見つめた。

衝撃から醒めないうちに、ダキニが鉄扇を振り上げる。

「行け！マイスレッドのいない今こそ好機。
テッキンシンマよ、奴らを踏みつぶせ！！」
「グオオオオオ——！！」

赤黒い光に包まれるとそのままテッキンシンマの身体が大きく膨れ上がっていく。

巨大化したテッキンシンマはダキニの操る鉄扇の動きに合わせて、マイスマン達に襲いかかってきた。

「来るぞ！！みんな二方向に分かれ、奴の動きを止めるんだ！」

素早く智史が指示を飛ばす。

それに合わせ世那と沙夜子が動いた。

勇人は一応耳には入れるものの、独断専行でダキニに向かっていった。

「何してる、ブルー！テッキンシンマはこつちだぞ！」

咎める智史を無視し、勇人は巨大手裏剣を召還する。

目指すはダキニ。

そのまま一気に加速すると、ダキニまで二メートルに迫ったところで跳躍し手裏剣を振りかざした。

「この間の借り、返させてもらうぜ！
神風螺旋驚撃！！」

勢いよく投げ放たれた手裏剣はダキニの胸元めがけ、吸い込まれるように飛んでいく。鋭く回転する刃が目前に迫ったにも関わらず、ダキニは五月蠅いハエを追い払うかの如くそれを鉄扇で振り払った。

「チツ、こいつバケモンかよ……」

渾身の一撃をいとも簡単に打ち砕かれた衝撃に、勇人の背を冷たい汗が流れた。

勇人がダキニを前に緊張を走らせる中、すぐ後ろから3人の叫び声が上がった。

はつと振り返れば世那と沙夜子がテッキンシンマに首を掴まれ、奴の足元には焼け焦げた姿で転がる智史の姿があった。

「イエロー、ホワイトツ！！」

おい、ブラック！

しつかりしろ！！」

「フツ、ほんとに学習能力がないとは。

前はレッド、今度はお前か。

我らを憎むのは勝手だが、感情を抑えず無鉄砲に飛び込むだけしか能がないのなら、わらはおるか神魔一族を倒すことはできぬぞ」

「……っ、俺をあいつと一緒にするな！！

あんな……弱い奴とっ」

そつだ。つい最近まであのダサオタクは俺の言いなりだったじゃね

えか！

なのにマイスマンになってから急に変わりだした。

俺の方が強いはずなのに、何故あいつが俺と横並びになってる！？
怒りに震える勇人にダキニは鋭く突き付けた。

「お前には覚悟がない。

その点、レッドは命懸けで我らを倒さんとしている。

眼に、気迫に命の焰を感じる……。

憎たらしいことに変わりはないが、敵ながら天晴れな奴よ。
じゃが、お前は違う。ただわらわと喧嘩しに来ただけよ」

喉から言葉が出なかった。

自分の心の中を覗いたのかと思うほど明確な指摘だ。

敵からですら輝夜以下と言われ、動揺する勇人の隙をダキニは見逃さなかった。

瞬時に勇人の懐に入り、左手から衝撃波を放つ。

庇うことすらできず、直撃を受けた彼の身体は後ろの瓦礫の山ま
で吹っ飛んだ。

「ああっ、何てことを……！」

余りの惨状に速水は戦慄する。

轟音を立て、瓦礫の山が崩れ落ちた。

うつ伏せで勇人は呻き声を上げる。

人間レベルを超えた戦いにただただ圧倒されていた遠山は今の
で我に返った。

すぐさま勇人の元へ走り、身体に被る瓦礫を手で取り除こうとする。

「おいつ、しっかりしろ！！」

聞こえるか!？」

「つつつ……、耳元で怒鳴るなよ、おっさん。

……声、でけえんだよ」

弱々しいながらも憎まれ口を叩いた勇人に、遠山は胸をなで下ろす。

「それぐらい言えるなら大したもんだ。

ほら、掴まれ!

肩ぐらいは貸してやる、貸付きでな」

「ハッ、さすが国家の犬!

一々いやらしいぜ」

再び遠山の額に青筋が浮かぶ。

が、上から飛んできた光線に慌てて伏せた。

すかさず速水が二人をその場から移動させる。

三人は攻撃してきたテッキンシンマとダキニの方へ顔を向けた。

テッキンシンマは上から世那達を勇人の側に叩き落とす。

ニイと冷たくダキニが嗤った。

「これで貴様らも終わりじゃな。

トドメじゃっ、テッキンシンマ!!」

テッキンシンマの両眼から破壊光線が放たれる。

五人は迫り来る力の波を受ける覚悟で、固く眼をつぶった。

ダキニが、テッキンシンマが歓喜の表情に打ち震える。

その時、ダキニの視界にいたテッキンシンマが倒れた。

衝撃で大地が大きく揺れる。

否、倒されたのではなく、光の雨に貫かれ倒されたのだ。

五人を呑み込もうとしていた破壊光線もその雨に掻き消され、ダキ

二は愕然とする。

「なっ……何なのじゃ、今の力は!？」

テッキンシンマもその力もマイスマンを上回るよう作られたはず。

……なのに!」

思い通りにならぬ怒りを込め、ダキニは空を仰いだ。

そして……見た。

真紅に燃える一つの戦闘機が縦横無尽に蒼空を駆け抜け、旋回する様を!

戦闘機は鷹のように雄大に駆けながら、蜂の如く紅いレーザーをダキニ達目掛け次々と降らせていく。

「あああああ——!!」

あちこちから飛んでくる攻撃に、敏捷なダキニでさえ避けきれず地にひれ伏した。

その隙に勇人達は傷付いていた智史と沙夜子、世那を助け起こす。訳が分からないながらも、自分達の窮地を救ったものが何なのか五人は確かめる。

すると五人の視線に気付いたかのように、紅い戦闘機は彼等の元へと近づいていく。正体不明の機体に警戒した遠山は懐の拳銃に手を伸ばした。

その手を速水が制し、黙って首を横に振る。

予想外の強い力に、遠山も渋々手を離す。

戦闘機はなおも近付いていき、もう少しで五人に接近するところで着陸した。

上空ではおもちゃのように見えた戦闘機だが、間近で見ると相当な迫力だ。

戦闘機の下から機械音を響かせ操縦席が降りてきた。
そこに座っていた人物に全員が驚いた。

「マイスレッド!!」

中でも勇人と遠くでうずくまっていたダキニは信じられないような
眼をしていた。

「何故……仲間割れをしていたのではなかったのか？」

掠れた声で呟いたにも関わらず、勇人の耳にはしつかり届いていた。
ダキニを気にしながらも、勇人は座席から降りてきた輝夜から眼を
離せない。

「すまない、遅くなった!」

開口一番、軽く頭を下げた輝夜に世那が檄を飛ばした。

「遅すぎだあー!」

二十分以上遅刻する奴がどこにいるんだよ!?

でも、来てくれて……ありがとう。嬉しかった。

というわけで、注意はここでお終い!

だから、変に気負うんじゃないよ」

「イエロー……」。

心配いらない、俺ならもう大丈夫だ。

ありがとな、色々」

「……っだから、あんたのためじゃなくって戦闘に色々と支障が」

「はいはいお二人さん、今は戦闘中だから後にしよーねえ」

いつもの学校モードに入りそんな空気を智史は慣れた手綱さばきで

軌道修正する。

その後ろでは黒いオーラを滲ませた沙夜子がニッコリと微笑んだ。
輝夜と世那の背がビクツと揺れる。

一応戦闘中ということで自重した輝夜はメンバーにこの戦闘機のことと乗ってきた経緯を軽く説明した。

自分達の機体はどこにあるのかと尋ねる智史に輝夜はちらと勇人に眼を向ける。

先程からずっと黙って見ていた勇人は、その視線に誘われるように輝夜の前まで進み出た。

「次の戦闘には参加しねえんじゃなかったか？」

開口一番、不自然なぐらい静かな口調で本題を切り出す。

これにはとうとう智史が怒りを見せた。

「いい加減にしろッ!!」

いつまで子供じみた喧嘩を続ければ気が済むんだ！」

「今はお前とは話していない。

すっこんでろ、ブラック」

「何だとッ!？」

「ブラック!!」

いいから、これは俺とブルーの問題だ。

ブルー、これでいいんだろう？」

その問いに、いいからさっさと言えと顎で促す。

揺るぎない眼差しで輝夜は真っ直ぐに勇人を見据えた。

「確かに、戦わないことが一番良い責任の取り方だと思っていた。
だが、どこかで納得できなかった。

これは逃げてるだけじゃないかって！

……神魔を憎む気持ちは今も変わらない。

正直、今も目の前にいるダキニを八つ裂きにしたいさ」

ピクツとダキニの耳が反応した。

勇人は気怠げに輝夜の言を一蹴する。

「で、どうしたらそれが戦う理由に変わるんだ？

相変わらず神魔相手に暴走するの？

言つとくが、てめえの気まぐれに付き合つてやる義理はねえぞ」

相変わらずの態度に世那が何か言いかけるのを、左手で輝夜が制した。

そして、真意を見極めんと鋭く問い詰める勇人の視線を彼は受け止める。

その姿にはもはや自己嫌悪も迷いも見えなかった。

「俺は俺のなすべきことをするために戻ってきた。

ただ、それだけだ。

落ち込んだところで自分の失態を贖^{あがな}えるわけじゃない。戦士である

以上、俺は一人でも多くの命を守り抜く！

それが……俺の、ミスレッドの覚悟だッ！！」

焰のように燃え盛る強い意思に勇人は気圧される。

そして唐突に理解した。

自分が見てきた輝夜は彼のほんの一部にしか過ぎなかったことに。

一見弱々しく見える姿がただの見せ掛けでしかなかったことに……

――。

「……その言葉、忘れねえからな」

輝夜の決意が揺るぎないものであることを確信した勇人はそう言い捨て、ダキニに視線を戻した。

心なしかその横顔に浮かぶ表情はすっきりとしたものだった。

「っ……おのれ、天龍王。

どこまでもわらわの邪魔をしおって！」

漸く立ち上がったダキニは怒りで身体を震わせる。

戦線に戻った輝夜を迎え、五人揃ったマイスマンは再び神魔族と対峙した。

ビツと指を指し、輝夜は久々に派手な啖呵を切る。

「残念だったな、神魔！」

俺はもう二度と戦いを放棄しないッ！！

母さんと父さんが最後だ。

こんな辛い思いをするのも、させるのも！

もう……これ以上、お前達神魔に誰も殺させやしない！！」

勇人は息を呑んだ。

これがダキニの言っていた自分との覚悟の違いかと。

ずっと脳天気でも何も考えずに生きてきたと思い込んでいた。だが——本当は。

「人の表しか見てなかった俺よりは、大人かもしれない」

自嘲するように微かに勇人は呟いた。

それは誰に聞かれるともなく風に消える。

「何が殺させやしないだ！？」

神魔を裏切った獣神崩れがあッ!!」

ダキニの表情が歪んだ。

憎悪に眼をギラつかせ、勢いで手から稲妻を放つ。

「龍牙雷翔!!」

瞬時に償還した焰の刀に雷を纏わせた輝夜は間髪入れず、ダキニの攻撃を相殺した。

「どうした、この程度では俺を殺すことはできないぞ。

それともスタミナ切れか？」

「ッ……黙れ!!」

テッキンシンマ、いつまで倒れておる!?

わらわの忠実な下部ならば、さっさと奴らを殺してしまえ!!」

「グルル……ッ」

獣じみた唸りを上げ、テッキンシンマはその巨大を起こした。

不穩に揺らめく赤黒い眼孔から幾筋も光線が放たれる。

「ぐうッ、これじゃ……また、あの時の繰り返しだ!」

水の槍で光線を防ぐ智史が息も絶え絶えに喘ぐ。

「どうすればいいの!？」

テッキンシンマには私達の攻撃がきかないのに」

傷が癒えない状態で戦う沙夜子にも濃い疲労の影が見えてきた。

一般人の遠山、速水も非力ながら瓦礫を投げつけたり銃を打つなど応戦している。

その時、彼らの頭上から声がした。

「全員、ここから離れろおお!!」

慌てて退避すれば、紅い輸送機に機上した輝夜がテッキンシンマ目掛けて紅いプラズマを放った。避ける間もなく、そのプラズマはテッキンシンマの胴体に穴を空ける。

「嘘じゃ！」

あれは人間共の文明で破壊できるものはないというのに……まさか!?!」

眼を見開きダキニは愕然とする。

もしわらわの思い違いでなければあの力は――。

狼狽えるダキニを後目に輝夜は仲間らに指示を出した。

「みんな、マイスブレスを掲げて上を見てくれ！」

第4話 動き出す齒車！奇跡の武装転神 パート4（後書き）

ヒーローは遅れてやってくる。
これを地でいきましたね。

いいところで切って申し訳ないのですが、ページ数が増大して読みにくくなることを考えこうしました。
次回で完全に第4話完結です。

番外編 夏祭り準備（前書き）

今回は主人公と親友の日常編になります。

番外編 夏祭り準備

眩しいほど冴え冴えとした蒼い空。

浮かぶ入道雲とそれにアクセントを加える鮮やかなヒマワリ。
どれを取っても完璧な夏の風景だ。

——ただ一つ、白い巨塔いや、白い校舎を除いては……。

夏祭り準備

「あー……あちいいい！」

誰でもいい、ガリガリ君買ってきてー！」

汗ばむ首をなんとかしようとする髪を振り払い、輝夜は体育館の天井を仰いだ。

「我慢しなつて。

僕だってしんどいんだからさあ。

かれこれ二時間は同じ体制のまんまだし」

そう零す智史は先程からずっと正座のままだ。

黙々と白い横断幕に、『第五十八回 星倫夏祭り』と大きく筆で書き綴っていく。

七月になると、必ずこの高校では地域ぐるみの夏祭りが催されていた。

よくあることだ、学校のある地域だと。

ただ高校生だからか、他と違うのは自分達の手で御輿を一から作り上げていることだった。

でもって現在、輝夜と智史達のクラスはその御輿作りの担当に無理やりされたため、この暑い中トンカチを振るうことになったということだ。

「くっそ鬼瓦！マジで恨むぞ……」

なんでこの熱気の中、俺らだけトンカチ組なんだよっ」

「仕方ないよ……御輿作りに一番乗り気なのが鬼瓦なんだから。

ハアア、今だけは女子が羨ましい……。あっただけ教室で涼んでんだからっ」

ホントだよなと力強く同意する。

脳裏には可愛い女子達（一部除く）の艶やかな夏服姿……透けた下着とか、見えそうで見えない絶対領域とか！

けしからんっ、もつとやれ！！

「今、スッゴくやらしーこと考えてなかった？」

呆れ混じりに突っ込まれ、慌てた輝夜は振り下ろしたトンカチを親指目掛けて叩きつけてしまった。

「アダアアアッ！」

「あーあ……やっちゃったあ。

そんなに慌てるってことは、やっぱり凶星だった？」

「……い、いや？別にそうって訳じゃ……」

「狼狽えなくなっただけいいって。

むしろ慌てる輝夜見るの、スッゴい面白いし」

「この悪趣味」

ぼそりと呟けば、すっかり聞いていた智史の笑顔に黒さが滲み出した。

背後からも後光ならぬ障気がだだ漏れた。

こいつの本性知ったら、後ろでキヤーキヤー騒いでる女子達はどんな顔すんだろうな……。

ドス黒い気をもろ身体中に受けまくり、輝夜は遠い眼になる。

「何かスツゴク失礼なこと考えてなかった？」

「……いいや？気のせいだろ」

何だかんだでこの腹黒オーラに慣れていたのもあり、キラキラと輝く爽やかさでもって華麗に受け流した。

平凡通り越し、ただの奇人変人やトロイキモオタ扱いされていてもやはりあの智史の親友。

あの黒い圧力を前に爽やか笑顔を作れる神経は並みじゃない。

もつとも平凡と見せかけて、そうやって受け流す動じない強さがあるからこそ智史は彼に惹かれた訳だが。

初めて出会った時も彼は智史の腹黒い一面を見抜きつつ、それでも飄々とした態度を崩さなかった。

皆、『いい子』じゃない本当の自分を見せた途端、裏切られただけのイメージと違うだの勝手なことを言ってくるのが常だったというのに。

そこからだ、輝夜に興味を持ったのは。

どうしても気になり、聞いてみたことがある。

イメージ通りじゃなくておかしいと思わなかったのかと。

彼は横目でチラリと智史を映すと直ぐに視線を空へ戻した。そして一言。

——「イメージって、周りが勝手に作って盛り上がってるだけのものか？」

んなもん、俺は知らん。

その証拠に俺は結城のことを王子だとか優等生っぽいと思ったことではない」

淡々とした口調で紡がれる言の葉に、智史の口元は綻んだ。

でもって一拍置き……大爆笑。

釣られて輝夜も大爆笑。

気付いた頃にはいつもつるむ仲になっていた。

「ホント、輝夜はあまり周りに本性みせるなよ。

せつかく悪い虫が付いてないのに、あつという間に群がられるからさー」

「あー、お前の言ってる意味はよくわかんねえけど、取りあえず気をつけるわ」

本当にわかってなさそうな親友に、智史は苦笑を浮かべ呟いた。

「これは自覚させるところから始めなきゃな。

あーでも、それはそれでライバル増えそうな予感……」

輝夜の一番の親友ポジションは譲れないからなあー。

にこやかな笑顔の裏で黒いことを考えながら、相方に気付かれないよう一人呟いた。

その呟きを拾うのは入り口から吹き抜ける風のみ。

番外編 夏祭り準備（後書き）

久々の更新が番外編……。

すぐにでも本編が載せられるよう、とにかく書くのみです！

ロボット……難しすぎる。

第4話 動き出す齒車！奇跡の武装転神 パート5（前書き）

や・・やつと終わっ、た。

第4話 動き出す齒車！奇跡の武装転神 パート5

意味が分からないながらも、輝夜の言うことにつられ全員上空を見上げる。

そして我が眼を疑った。

「うそ……黄色いスポーツカーが、空を飛んでる！？」

素つ頓狂な声を上げ、しきりにスポーツカーを指差す世那。
驚いてるのは智史、沙夜子、勇人もだった。

「馬鹿なつ、今の科学力ではドリル戦車、いやドリル潜水艦？が宙に浮くわけないのに……！」

「そもそもどこから拝借したのかしら、この救急車」

「……もつと他に突っ込みどころがあんだろっ！　なんでアイツが他のメカまで引き連れてんだ！？」

下でギヤアギヤ騒いでいると、上から声が降ってきた。

「おい、騒いでないでブレスを掲げてくれ！　気持ちにはわかるが今は戦闘中だろ？」

「あ、ごめんなさい！」

はたと我に返った沙夜子が軽く頭を下げる。世那、智史も頭を掻き、ごめんごめんと軽い調子で謝った。こんなことで狼狽えていた自分が恥ずかしかったのか、勇人のみ顔を赤くしそつぽを向く。

……マスクで全然見えないが。

軽く咳払いし、勇人はさっさとブレスを着けた手を上に掲げた。智史達も次々と上に掲げる。

「よしっ、エネルギー転送！」

輝夜がボタンを押すと、輸送機に付いてるパワーオーラから四色の光が智史達のプレスにそれぞれ飛んでいった。光の宿ったプレスはそのまま装着者と、その光に対応するように光る機体と呼応し出す。

またしても驚くメンバーを余所に、機体がいきなり装着者を吸い込み始めた。

「えっ、うそお！？ 待つて待つてえええっ、まだ心の準備が……っ！」

いきなり宙に浮き出す自分の身体に世那は一際慌て出した。無理もない、彼女は高所恐怖症なのだ。隣で悲鳴を上げる親友を後目に、沙夜子は落ち着き払って流れに身を任せていた。

「大丈夫よイエロー、落ち着いて？ レッドのことだもの、きつと危ない真似はしないはずよ」

「……だと、いいけど……」

顔も身体も強ばらせ、世那は諦観する。そのまま世那は黄色のスーツカーに、沙夜子は一回り大きな救急車の中へと吸い込まれていった。

一方、智史と勇人は女子組と違い、ワクワクして機体に乗る過程を楽しんでいた。

「へええ、博士も粋なことするじゃねえか！ こんなオモシロ機能付けるなんてな」

「……まあ、今回ばかりは良い税金の使い方したんじゃない？」
「お前つて、親父さんに対して異常に手厳しいな……」

よく無駄遣いするからだよと返したのを最後に、二人も機体の内へ入っていった。

コックピットで全員が機上したことを確認した輝夜は、そのまま内線で次の指示を出す。

「全員いるな？　よし、なら操縦席の目の前にある赤いボタンを押してくれ。」

そして叫ぶんだ！　自分の真名を名乗り、武装転神と――！」

『武装転神！？』

聞き慣れぬ言葉に全員が聞き返す。

まあ、それもそうかと輝夜は思い返していた。自分自身パワーオーラの導きがあったから、すんなりロボ変形の仕組みを理解できたのだから。

だが解せない。みんな俺より先に前世を思い出してるはずなのに、何故武装転神のことは知らないんだ？

《それは貴方が関わっている記憶だから。だから彼等は思い出せなかったのです》

「おまつ、パワーオーラ！　それよりどういう意味だ！？」

自身の思考を読み取ったパワーオーラに驚くが、それ以上にまたまた意味深な事を伝えてくるそれに輝夜は勢いで問い詰めた。

だがパワーオーラは残念そうに光を瞬かせる。人間だったらうなだれて首を横に振っていただろう。

《申し訳ありません。貴方の記憶の大部分は他の守護獣神と違い封

印されているため、これ以上詳しくお伝えすることができないのです。

ただ言えることは、貴方が記憶を取り戻すことに私も、他の守護獣神も貴方に関する記憶を思い出すことができるということなのです。』

思わぬ事実には輝夜は黙り込む。通信機越しに聞いていたメンバーも考え込んでいた。

同時に何故輝夜だけ記憶が無かったのか、そして記憶があるにも関わらず彼の姿だけが影になって見えなかったのか納得した。冷静になった智史が話を切り出す。

「という事はこの武装転神、レッドに先頭切ってやってもらわないと僕等はできないってことか」

「そうね、それにこれからの戦いでもきつとレッドがキーになる。

…… やっぱり、星川君は特別だったのね」

「え？ 何か言ったかい？」

「う、ううんっ、何でもないの！ それよりも、今はレッドの動きを待ちましょう」

いつもの調子で打ち消す沙夜子の声に、智史は何か言いたげに口を開きかけ閉じた。微かに呟いた沙夜子の声は聞き取れなかったが、どこか寂しげな響きが気に掛った。

もしかして香月さん、輝夜のこと……。

そう思った途端、言い知れぬざわめきが胸の内に広がる。

胸を締め付けるような感覚にうろたえた智史は、慌てて輝夜のいる輸送機を見た。幸い輝夜に二人の声は聞こえてなかった。パワーオーラと対話するのに精一杯だったからだろう。

最後に二言三言話し、輝夜は再び無線に出た。

「すまない、時間がかかった！ 今から俺が武装転神を実行するか

らみんなも真似てくれ！」

「真似るってどうやって？ それに真名って何のことだよ」

「早い話が獣神だった頃の名前を名乗ればいいんだ。ま、今からやってみせるからさ。」

いくぞ……武装転神、ティダリオン！！」

カチリとパワーオーラから鍵が外れたような音が響く。

ついで紅い光が溢れる程に輝きだし、輝夜の乗る機体ごと包み込んだ。

「な、何なんだあの光は！？ 一体何が起こってると言っただ……っ？」

にわかに信じがたい超上現象にまたもや出くわした遠山は狼狽えることしかできない。

「オオーツ、こっ、これは一大スクープだ！！ カメラっ、カメラはどこだ！？」

慌ててカメラを探すも半壊したそれが瓦礫に押しつぶされた様を見て、速水は酷く落胆した。

「ああああ……せつかくのトクダネがああああ！」

「そんなこと言ってる場合か！？ おい、見ろっ！！」

促されるままに空を見上げれば、紅い光を放っていた輸送機が今度は紅蓮の焰に包まれ燃えだした。

「まずいつ、機体が炎上してるぞ！ 何をあいつらはチンタラしてるんだ！？」

非常事態に険しく眉を跳ね上げ、遠山は何もしようとしないマイスマン達に苛立つ。

しかし智史達も手をこまねいて見ていた訳ではなく、機体进行操作しようとしたができなかったのだ。おそらく主な操作の解除をレッドが担っているからに違いない。

中にいるマイルレッドは無事なのか！？

メンバーと遠山達は蒼白な顔で事態を見守るしかなかった。

その様を見ていたダキニは口に孤の字を描く。

勝った……！ 所詮、生まれ変わりとはいえただの人間。

守護獣神の力など使いこなせる訳がなかったのだ。

勝利を確信したダキニは悠々と空を仰ぐ。

せめて憎つくきマイルレッドが墜落する様でも拝んでやろう、ありがたく思え。

歪んだ笑みを貼りつかせ、テツキンシンマと共に輸送機を見定めた瞬間、ダキニは我が眼を疑った。

「あ……りゅ、龍神……？ 馬鹿なっ、先程までは人間どものガラクタだったはず……！！」

彼女の眼に飛び込んできたもの、それは巨大な焰の龍に変化した輸送機だった。

龍がその身をくねらせると纏う焰の燐粉が宙を舞い、神々しい後光となって周囲を照らしていく。

その背に纏う天使の翼は黄金の光を放ち、天から地上へ雨の如く降り注いだ。

「綺麗……。あれが、レッドの獣神としての姿だと言うの？」

ほうと溜息を洩らす世那に、同じく沙夜子も余りの美しさに眼を逸らせずにいた。

眼を見張って驚嘆していた智史と勇人は、降ってきた黄金の翼が自分達の身体の傷や痛みを治していることに気が付いた。

「これは……治癒の力？」

「俺達の傷をあつという間に治しちゃった。これが、武装転神の力なのか？」

「いやっ、まだまだ！」

天使の羽根が降り止むと、今度は焰が形を変え蠢き出した。

焰は再び輸送機の形に戻ると、初めにコックピット付近の上部のパーツだけ分離し出す。それから残った下部が胴体となり、縦に真っ二つに折れ曲がり始めた。

そのまま後ろ側に折れ曲がった機体は白い腹部のパーツを反転させ、紅い光を放ちながら龍の紋様を浮かび上がらせる。紋様の黄金色の龍が燦然と煌めいた。

左右の翼はそれぞれ分解し、一旦、宙で待機状態に移った。

それから本体である機体から、元から収納されていたかのように足のパーツが現れる。両足揃うと足先部分が前に折れ曲がり、小さな車輪付きの黒い足に変わった。

次に離れていた左右翼が翼の下から腕を伸ばし、余った翼を斜めに上げて変形させていく。翼を持った腕が胴体に接合すると最後にコックピット部が飛来し、頭の上から被せるように胴体の上部に填まった。

「ちいいッ、このまま完成させぬ……！」

「させるかッ！ 武装転神、クラミカツチ！！」

解呪のキーワードと共に、智史のドリル潜水艦が漆黒の光を放ちだす。余りの強い閃光にダキニも攻撃の手を止めざるを得なかった。その間に、渦を巻いた波がドリル潜水艦に絡みつき、その姿を全て覆ってしまう。

それは輝夜の時と同様に自身の獣神である玄武の姿へと一時変化し、再び元の潜水艦に戻ると変形し始めた。

「こうしてらんない、私らも武装転神だ！ 武装転神、ティンリン！！」

「ええ、守り抜いてみせるわ！ 武装転神、セレステル！！」

「あいつらだけにいいカツコさせるかよ！ 武装転神、アウステル！！」

それぞれの機体が黄、白、蒼に輝くと獣神の姿に変化し、再び機体の姿に戻り変形し始めた。

智史達の機体の変形している間に、輝夜の輸送機の変形が最終段階を迎えようとしていた。

上部に収まったコックピットから焰が吹き上がり、赤龍の顔を模した兜を身に付けたロボットの頭部が姿を現す。

その眼にはエメラルド色の美しい光を湛えていた。鋭い形の眼に命の光が宿ると、ロボの口元から勇ましい声が朗々と流れた。

「転神完了！ 天龍王ティダリオン！！」

焰と見紛うほどの紅色を全身に纏い、龍神が人型に変化したような姿の巨人は真っすぐテッキンシンマへと指を突きつけた。

「そこまでだッ、神魔一族！！ このティダリオンがいる限り、こ

の星の秩序を乱させはしない!!」

突きつけた指を納め、輝夜改めティダリオンは武術の構えを取る。

その頃、時を同じくし研究室でモニターに映し出されたティダリオンの指を見て、結城博士達は仰天していた。

「なっ、何なんだあれは!? 何故、ジェット輸送機がロボットに変形を!?!」

「えっ? 博士が秘密に設計してたんじゃないんですか!?!」

「あんなもの、今のロボット工学で作れるわけがないだろう! 一体、何がどうなってるんだ……?」

驚愕の余り呆然と口を噤む博士に、助手二人もただ黙ってモニターを眺めるしかなかった。

一方、対峙したティダリオンとテッキンシンマとの間では早くも戦闘が始まっていた。一つは他の獣神達の変形が完了するまでの時間稼ぎもあるだろう。

テッキンシンマの攻撃を待たずにして、ティダリオンは拳に焰を纏わせ殴りかかった。予想以上の素早い動きに、避ける間もなくテッキンシンマはその面に灼熱の一撃を受け倒れる。

「テッキンシンマ!! おのれ天龍王ッ、桜花連扇げ……くッ!」

すかさず攻撃に回ろうと鉄扇を振りかざすも、横から飛んできた水撃が彼女を襲った。

凄まじい水流がダキニを壁に強く叩きつける。

濡れた髪を振り乱しながら鬼気迫る眼で振り返るが、避ける間もなく光の雨が容赦なく降り注がれた。

幻想的な光景であつたが、触れただけで全身を切り刻んでいくそれは血生臭さを連想させるには十分だ。

強烈な刃の雨はダキニの美しかった衣装を無残に引き裂き、一瞬にしてボロ布へと変えてしまった。

顔にもいくつか裂傷を負い、白い頬には幾筋も赤い線が走っている。

強か全身を打ちつけられながらも神魔としてのプライドからか、震える身体で這いつくばったまま顔だけでも上げた。

そこには仁王立ちで黄色、漆黒の二体の巨大ロボが立ちはだかつていた。

麒麟の兜姿で佇む黄色のロボが威嚇するように手を構える。

「私らがいる以上、ティダに手は出させないよ！」

「いい加減、覚悟を決めるんだな。ダキニー！」

ドスの効いた声音で玄武の兜姿のロボが唸るも、ダキニはそれでもなお挑戦的な態度を崩さなかった。

「フンツ、いくら武装転神したとてテッキンシンマは全身が固い鎧。覚醒して間もないお前達が相手になるものかつ」

「そうかもな。だが、五体の獣神の力が一つになれば……」

「大いなる力に変わる！　そうでしょう、アウステル？」

突然割り込んできた声に反応すれば、クラミカツチ達の背後から新たに白と蒼のロボが進み出てきた。

蒼いロボを見た瞬間、マイスブルーの武装転神化だとわかったダキニはギリツと奥歯を噛み締めた。

憎しみの籠った眼で何か毒づいてやろうと桜色の唇を開く。

だがそれを遮るように、彼女の背後でティダリオンの鉄拳がテッキンシンマの脳髓に炸裂する音が響いた。

土煙と共に轟音を立て、テッキンシンマの身体が大地にめり込む体制を戻し、ゆっくり顔を上げたティダリオンのエメラルドの眼がダキニを捉えた。

ひっと引きつるような声が彼女の喉から漏れる。

重い地響きを立てて近づいてくるティダリオンに、徐々にダキニの顔は凍りついていく。

ダキニの真正面まで迫った時、厳粛な声でティダリオンは告げた。

「これで最後だ、ダキニ。お前は俺達を甘く見過ぎていた。勝つための執念、そして全ての命を守り抜く覚悟がお前の力を凌駕りょうがしたのだ。

わかるか？　これが守り抜くことの強さだ——！」

「嘘じゃ！　お前達の思い……執念が、わらわの憎悪を凌駕したと？　みつ、認めぬ！　認めん、認めんぞおお——ッ——！」

ダキニの爆発的な怒りが周辺の大地に次々と地割れを引き起こしていく。

憎悪のままに鉄扇を振り払った先には何とテッキンシンマが——。

「待て！　悪足掻きはもう止める——！　これ以上、何をするつもりだ！？」

「知れたこと！　極限までテッキンシンマの力を引き出すのみよ——！……ただし、貴様らを倒せば灰となるがのう。

だがそれでもいい、貴様らさえ倒せばそれで……！」

無理やり膨大な力を与えられたテッキンシンマの身体は所々ひび割れ始めていた。

だが、ひび割れの間からマグマのように粘着質な赤いエネルギーが垣間見える。

苦しみか怒りからなのか鉄筋コンクリートの野獣は大地を震わす

咆哮を轟かせ、自分を打ち倒したティダリオンへ牙を剥いた。

自動車並みの速度で一気に突進してくる。

反応の遅れたティダリオンは受け止める間もなく直撃を受けた。

「グッ……！」

腹部に突進を受けたティダリオンは向かい側のビルへ突き飛ばされた。

「ティダアア——アッ！」

急いでクラミカツチが駆け寄り、助け起こす。

幸いビルには避難命令が出ていたため無人だった。

息つく間もなく繰り出された破壊光線を寸で避けると、他のメンバーが攻撃を放って応戦した。

先に上空に飛んだアウステルが、両隣に竜巻を巻き起こしテッキンシンマへと放つ。

勢いよく、風が刀のように野獣を切り裂いた。

抵抗しようとするも風が四肢を拘束し、思うように動かすことができない。

機を逃さずティンリンが両手で三角形をかたどり、そこから三角形の光を発した。

無数の三角の光がテッキンシンマに当たり、衝撃を与えていく。続いてセレステルの掌から白い砂塵が螺旋状に放たれ、テッキンシンマの身体に小爆発を起こした。

焦げるような音を立てながら、奴の胸部は所々炭化している。

これほど効果的な攻撃にも関わらず、それでもテッキンシンマが倒れる様子はなかった。

ふと先程から動きを見せないダキニが気になり、アウステルはちらと視線を走らせる。

意外にも、彼女は最後に攻撃を放った場所から一步も動いていなかった。

その面は常から病的な白さだったが、今はそれを通り越し蒼白な顔色になっている。

呼吸はぜいぜいと乱れ、まともに息継ぎすらできていなかった。いくら神魔四天王が一人とはいえ、あれだけの力を使ったからだろう。

酷い衰弱ぶりだ。

——今なら、完全に倒せる！

確信したアウステルはダキニにも竜巻を放とうと手を向けた。

瞬間、右手を凄まじい激痛が襲う。

痛みの正体はどこからともなく飛んできた黒い雷だった。

雷は再びアウステルに黒い瘴気を放つ。

とつさに避けて再度ダキニに眼を向ければ、その傍らに先ほどの黒い雷が蠢いていた。

横に縦にと雷は伸びていき、徐々に暗緑色のアンドロイドへと変貌を遂げていく。

完全に形が定まった時、メタリックな装甲だけで覆われたような髑髏に似た顔のアンドロイドがそこに現れた。

口元だけをマスクで覆ったような風貌は、髑髏というより中世ヨーロッパの兜についた覆面を思い起こすかもしれない。

「……ミクトラン、何故？」

「Dr・アスラの命だ。命を粗末にするなとな」

「え……」

あの冷徹な男が？

期待していなかった助けに動揺するダキニを一瞥し、ミクトランはアウステル達へ右腕を構えた。

無機質な機械音を立て、右腕はガトリング砲の小型版へと形を変える。

「何だ、こいつはっ!？」

このロボットも神魔の一味なのか？」

新たな敵に緊迫するティダリオン達だったが、前方のテッキンシンマにも気を配っているためアウステルに任せるしかない。

アウステルも戸惑ったのは一瞬のみで、すぐさま胸のパーツから風車手裏剣を召喚した。

宙を滑るような動きで、一気にダキニとミクトランの眼前に迫る。

「遅い。やはり、かつての動きには遠く及ばぬか」

「なッ!？ いつの間にッ」

優勢だったはずのアウステルの動きより先に、ミクトランの火砲が火を噴いた。

何とかぎりぎりで防いだが、顔を上げた時には二人の姿は忽然と消え失せていた。

「クソッ!! また逃げられたか……!」

三度も仕留めそこなった自分の無力さに苛立ちすら覚える。

悔しさを堪え、今は残る障壁たるテッキンシンマを倒さんと彼は一目散に仲間の元へと向かった。

アウステルが駆け付けけると同時に彼の目に飛び込んできたものは、

ティダリオンが右足を振り上げ、テッキンシンマの横腹をえぐるように蹴り飛ばした瞬間だった。

だが、パワーアップしたことで彼の攻撃を受けても軽く踏みとどまっている。

続けざまにクラミカツチが掌から激しい水流を巻き起こすも、霸気だけで弾き飛ばされてしまった。

「どうする！？ このままじゃ手も足も出ねえぞ！」

焦燥に駆られたアウステルが声を荒げる。

「何とかしたいが、今の僕達には武装転神以外手は……」

「そんなつ、せつかく強くなれたのにこんなやつて！」

こんなところで……こんなところで私らは終われないのにつ……！」

自らの無力さに誰もが苛立ちと絶望を感じていた。

ティダリオンは思う。

自分の記憶さえあればすぐテッキンシンマを倒せたのに……！

いつも、いつも肝心な所で足を引っ張るのは俺。

もう、足手纏い^{まと}にはなりたくない。

何か、何でもいいっ！ 奴を倒せる方法はないのか！？

「ティダ……」

縋るようにセレステルはティダリオンを見つめる。

他のメンバーも残る望みを彼にかけていた。

策の尽きた彼らを敵は待つてくれない。

こうして悩んでる間にも神魔獣は次なる一手を放とうとしている。

背中の棘から稲妻を発生させ、それをエネルギーにテッキンシン

マは口から何かを放射しようと動きを見せた。

——もう、待ったなしだ。

重い決心を胸に、ティダリオンは胸部から小型版の拳銃を召喚した。

「みんな、すまない！

がむしゃらな戦法になるが、地道に奴の体力を削るぞ！

これしか……方法が無いんだ」

重く吐き出された言葉に、仲間達は何も言えなくなった。

わかっているのだ、一番辛いのが指令を出す輝夜だと。

仲間を盾にしないため、ティダリオンは自ら一歩前に出る。

悲壮な覚悟で全員が気を張り詰め、手に神力を込めた。

その時だ、足元から太い怒鳴り声が彼らの耳に届いたのは。

「何をうじうじしてるんだ、貴様らはああああ——っ！！！！」

余りにも喧しいその声に全員呆気にとられる。

見れば顔を真っ赤にして怒鳴り散らす遠山と、彼の両脇を捕えて必死で落ち着かせようとする速水だった。

「おいっ、マイスマン！！

さっきから何をやってるんだ！？

お前ら、（自称）ヒーローなんだろう！

だったら単体で攻撃してないで、子供のおもちゃみたいに合体してさっさと倒せ！！」

「……合体、子供のおもちゃ……………」？

何か重大なひらめきを手繰り寄せるようにティダリオンは遠山の

言葉を繰り返す。

「何だ？ お前ら戦隊ものやってんだろ？
だったら日曜朝の戦隊ものみたいに五体で合体して倒せるんじゃないのか？」

「あ——っ、それだ——！」

突然叫んだティダリオンに遠山含む全員がびくつと肩を揺らす。
周りの様子に気付かず、彼はそのまま頭を抱えて嘆き出した。

「うわああ——っ、俺としたことがああ——！！」

何が特撮に於いては知らないことはないだっ！

一番、特撮いや戦隊オタクとして忘れちゃならないことを……！
すいません、歴代レッドの皆さま——！

これじゃ俺……まさしくレッド失格ですね」

「はあっ、オタク！？ レッド？

一体、さっきから何を言ってるんだこいつは。

おいっ、その黒いロボット！

お前もこの紅いやつの仲間なんだろ。

なら、何が言いたいのかこっちにもわかるように訳せ！」

ティダリオンのオタク魂に火を点けてしまったことに気付かず、
遠山は困惑気味だ。

クラミカツチはそつと隣の親友を見ると、諦めたように首を横に
振った。

「すいません、こうなった彼は誰にも止められないんです。
それに長い付き合いですが、僕にも彼の言っていることはわからない
時がありますし」

要するにこつちの世界に戻ってくるまでそつとしとけということだ。

お手上げ状態な常識人二人を余所に、速水だけは吹き出しながら笑い続ける。

人が必死な時に不謹慎な奴め！

苛々の解消のために遠山は軽く速水の脇腹を肘で突いた。途端に身体をくの字に曲げて悶え出す。

ざまあみろ。

ちらと浮かべる腹黒い笑顔に、ティダ達だけでなく同じ腹黒属性のクラミカツチでさえも引いた。

「……いいのかよ、仮にも警官が」

引きつりながらもツツコミを入れるアウステルに内心彼らは賞賛を贈る。

「細かいところは突っ込むな。

あの人は色々厄介だぞ。俺、あの人の殺気だけで涙目になったもん」
「やっと戻ってきたのかよ。」

取りあえず戦闘中だけはその妄想を自重しろ」

色々な葛藤に蹴りをつけ戦闘モードに戻ったティダリオンに、アウステルの容赦ない突っ込みがきた。

「うつ……」

思わずたじろぐがいつまでも敵をスルーできず、慌てて意識を切り替える。

「わっわかってる、今はテッキンシンマを叩くことが先だからな。」

「一か八かだが、合体やってみるぞ!!」

今、無理やりまとめたよねというティンリンの呟きを咳払いで一蹴する。

「いくぞ!……獣神大覚醒!!」

勢いでやったことだが、無意識にティダリオンの口から呪文が流れ出していた。

そのことに驚く間もなく、急に自分の身体が紅く光り出す。皆も同じく、各々の色をした光を放ち出した。

そのまま全員ふわりと浮き上がると各々の身体のパーツが分解していく。

その一つ一つがブロックのように組み合わさり始めた。

しかもただ組み合わせるだけじゃない。

分解した各々が変形し、腕や足など身体の各部位のパーツに変わっていくではないか。

発破を掛けた遠山と速水も、どこかテレビで見る特撮作品でも見てるような気分で眼の前の不思議な光景を呆然と眺めていた。

分解したパーツは、見えない磁力で引き合わされているかのように何の違和感なく結合していく。

徐々にそれは先ほどよりも大きな巨人の姿へと変わり始めていた。実のところ、変形時間は人の眼で追えないほど早い。

だが普段から動態視力を鍛えてる速水はそれを物ともせず、冷静にその様を解説した。

「あ、最終段階に入ったようです!」

飛行形態に戻ったティダリオンが滞空状態で胴体部に近接し始め

た。

両翼をしまいこむように折り曲げ、擦じるように腹部を回転させると、翼を象った金色の装飾の真ん中に紅玉が詰め込まれたパーツに形を変える。

そのまま胴体部にある窪みと違和感なく接合し、最後に接合したパーツから紅い兜に金色の羽根飾りが付いた頭部が姿を見せた。

レモンイエローの眼に強い輝きが溢れ出す。

「完成！ 武装降臨、獣神大帝！！」

ロボの口元からマイルスレッドの勇ましい声が辺り一面に響き渡った。

ずっと眼を離さず見ていた速水が根っからのレポーター根性で早速食いつく。

「おい、マイルスレッド！

またさつきみたいにロボに変身してるのか！？」

他の皆はどこに？」

「速水さんですか。

俺達はコックピットにいます！

合体したことで精神体でなく実体で操作できるようになったようです」

「場所は？」

「それは秘密です。

敵の前で自らの弱点を晒す戦士はいませんから」

そう言い、身体ごとテッキンシンマの方へ向ける。

気のせいとか何の感情も映さないはずの獣神大帝の眼に厳しい色が見えた。

「ここからは、奴らの独壇場だ」

しばらく様子を見ていた遠山が静かに速水を制した。
速水も人知を超えた戦いを前に黙然と頷く。

暴走し掻き毟るように頭を振る神魔獣をどう倒すかと、輝夜は操縦レバーを引きながら距離を詰めていた。

その脇では智史がミサイルの照準を合わせ、いつでも打てるようスタンバイしている。

しばらく息をつめて見張っていると神魔が動き始めた。

無茶苦茶に腕を振り回しながら、先程よりも素早く迫ってくる。

また突き飛ばされるのでは危惧した沙夜子だったが、勇人と二人で足部のモーターを最大限動かしたため踏ん張ることに成功した。

「やつ、やつたわ、私達！」

「すげえ……、さっきより馬力が全然違う。」

「アクセルがとても軽いぞ！！」

「ナイスフォロー、ブルー！」

「フツ、そっちもな」

めずらしく互いに眼を見合せ笑い合う。

なおも暴れるテッキンシンマに今度は世那が動いた。

「こんにやろおー！！」

見てなつ、メガトンパンチ！」

勢いよく繰り出された鉄の拳が神魔獣の頭部に直撃した。

痛みに悶え、地べたに転がる。

それでも獣神大帝の足元を引っかけようとしたため、ロボの右腕からミサイルを大量に降り注いでやった。

「やれやれ、おいたが過ぎる悪い子にはお仕置きだよ」

フフフツと微笑む智史にすぐ隣の輝夜はそろりと距離を取る。

心なしが智史以外、遠山と速水も含め青ざめていた。

そんな空気をものともせず……というより判断できない神魔獣は、狂気の雄叫びを上げながら獣神大帝に飛びかかってきた。

「くるぞ、レッド！」

「ああ、これで決める！」

言うが早いか、手元の液晶パネルを指先でも踊らせるかのように触れていく。

「来いつ、一の太刀！」

獣神大帝の胸部の宝玉が白く輝いた。

光は強弱をつけて激しく明滅を繰り返す内、一際大きな光を放つと龍を象った柄をそこから浮き上がらせていく。

そこに手を伸ばすと、鞘から抜き出すように刀を掴み出した。

そのままブンツと音を立てて振り上げ、敵を仕留めんと狙いを定める。

神魔獣も身体から蒸気を吹き上げながら爪を研ぎ、獣神大帝を迎え撃つつもりだ。

一切の躊躇無く獣神大帝から動いた。

刀を構えたまま滑るように突進する。

機を逃さずテッキンシンマの爪が獣神大帝を貫いた。

「っ……マイスマン!!」

速水の悲痛な叫びが轟く。

だが遠山はおいと速水に呼びかけた。

「獣神大帝が、神魔の後ろにいるぞ」

「何だつて!？」

いや、しかしさっきまで間違いなく神魔の前にいたのに」

テッキンシンマに貫かれたはずの獣神大帝は何故か無傷でその背後にいた。

刺されたはずの獣神大帝の姿は揺らぎ初め、空気中で溶けるように消えていく。

「どうだ？ 陽炎の舞いは。」

幽玄を現すこの舞いはどんな者であれ、その実体に触れることは敵わない」

静かな輝夜の声が耳朵を打つ。

左手に構えた刀を神魔獣の首にピタリと当て、その眼が強く煌めいた。

「とどめだ！ 剣神の舞い・龍の咆哮!!」

刀の先から金色の焰が吹きあがり、一気に刀身全体へ纏わりついていく。

そのまま舞うように刀を一閃振り抜いた。

刀に宿る焰が金色の龍となり、剣戟と共にテッキンシンマの身体を切り裂く。

首から腹部まで斜めに抉り取られた神魔獣はしばし佇むものの、やがて限界がきたのか大爆発を起こし消し飛んだ。

刀を下ろし威風堂々と空を仰ぐ獣神大帝を、赤と黄金の夕日が真

っ赤に染め上げる。

激戦は幕を閉じたのだ。

翌日、無事に学校に来れたことに輝夜は密かな感動を覚えていた。あの後、ロボの状態から分解し、戦闘機などに戻った状態で全員研究所へと去って行った。

後ろから遠山と速水が何かしら叫んでいたが、こちらの正体を教えるとかそういうことを言ってたような気がする。

本当にメカを引きつれて来て良かった。

教室では昨日のマイスマンと神魔獣との戦いが話題になってるようだ。

そんな中、輝夜だけは珍しく智史達とも離れ廊下に出ていた。

丁度今は昼休み。いくらでも遊べる時間だ。

智史は昨日の戦いで疲れからか授業中でも船を漕いでいた。

居眠りすることのない彼がそんなことをしていたため、クラスメイト達だけでなく鬼がわらも驚いていたほどだ。

当然、ただいまお昼寝中という訳だ。

世那と沙夜子も疲れていることに変わりなかったが、俺様会長×脇役平凡受けの新巻が出るとかで妙にみなぎっていた。

こういう時、女の方が遅いのだろうかと思ってしまう。

自分にはわからない……いや、わかったら危険だろう。

そんな会話には入らない方がいいと思い教室を出て今に至る。

ぼんやりと図書室まで行こうかと歩いていると前方から勇人と鉢合わせになった。

学校では慣れ合っつもりもないため、いつものようにそのまま通り過ぎようとする。

「俺は星川輝夜のことは認めねえ。

だが……マイスレッドのことは認めてやる」

驚き立ち止まる輝夜にフンツと鼻を鳴らし口端を釣り上げる。
やがて理解した輝夜も挑発的な笑みを浮かべた。

「奇遇だな。俺もだ、ブルー」

第4話 完

第4話 動き出す齒車！奇跡の武装転神 パート5（後書き）

初口ボ戦、遅刻しまくりですいません！！

やっと書き終わりました。

ほんと戦闘シーンとかメカニックや変形の描写は難しいです。

マジしにそうでした（脳味噌的な意味で）。

次は少し補足的な話を入れようと思います。

てか、思いつきり本編ですが。

更新できてない間も読みにきてくださり本当に感謝してます！！

ありがとうございます。

遅筆なのはなかなか治りませんが、せめて内容の濃いものをお届けできるよう頑張ります！

第4・5話 ブルーマンデー（前書き）

第4話祖父母視点とちよこつとその後。
叔母さん登場。

第4・5話 ブルーマンデー

輝夜が仲間と共に獣神大帝を駆り、テッキンシンマとガチバトルを繰り広げていた頃、こちらもガチバトルを終えて気が立っている祖母を祖父がずっと宥め続けていた。

話は朝に遡る。

——現在、月曜日の午前中。

週明けの学生もしくは働きマンがブルーなマンデーとうなだれる曜日だ。

もつとも、毎日が休みな御隠居やニートにとっては他の曜日と大差ないが。

しかしながら今回ばかりは久々にブルーな日になりそうだ。白いFAX付き電話の前で輝夜の祖母、百合子ゆりこは憂鬱な顔で受話器に眼を落としていた。

憂鬱の原因は孫の輝夜にあった。土曜日、友人からの用事で帰ってきた孫の惨状は今でも忘れられない。

「輝夜！？ 一体どうしたっ、その怪我は！」

血相を変えて問い詰める夫を百合子は止めようとしなかった。彼女も夫と同じ気持ちだったからだ。

彼が言わなければ自分が言っていた。心配する自分達を見て罰の悪い顔を見せた孫は大したことはないとはぐらかそうとした。

あまり触らせまいとしていたが、夫の見立てによると肋骨の何本かは折れてるだろうとのことだ。

あれやこれや問い詰めるも、不良にやられたの一点張りでのらりくらりとかわされ話にならない。

もしや神魔と関わっているのでは……？

考えすぎかもしれないが、現に彼女は息子夫妻を神魔に殺されている。更には孫のあの怪我だ。

百合子がそう思うには十分だった。

先手を打たなければ、と百合子は意を決して受話器を手を取った。丁度いい。今、輝夜達は学校に行っている時間だ。たしか、娘は今日休みなはず。

トゥルルルという呼び出し音がしばらく続いた後、もしもという娘の声が受話器越しに聞こえてきた。

「もしもし静香^{しずか}、私よ。大切な話があるの」

「何なの、母さん。私も忙しいの、手短かに話してくれる？」

驚くほどそつけない態度で、久々に電話に出た娘は返してきた。

本当は何も用事などないのだが、父母からの電話は必ずと言っていいほど孫のこと——当然、輝夜のこととも聞いてくるため、さつさと話を切り上げたかったのだ。

電話の向こう側で、静香は苛立ちから髪を荒々しくかき上げていた。

まったく、どうせ私達の悪口でも言ってたんでしょ。

ほんと恩知らずな子！

先手必勝とばかりに静香は、母へ輝夜のことを一方的にぶちまけた。

「で、大切な話つてのは？言っておきますけど、私達はあの子を引き取ってから十分出来る限りのことをしてやってるわよ。それにっいて、あの子が何を言ったか知らないけど」

「静香、輝夜はそんなこと一言も言っていないわよ。

それについても話したいことは山ほどあるけど今は後にしましょう。

輝夜がとうとう九年前の記憶を取り戻してしまったの。それで、史郎の死因まで思い出してしまつて……」

静香の周りで時が止まつた。

窓の外の騒音でさえも彼女の耳には入らない。息を呑む娘の様子が百合子にも伝わってくる。

「……………何ですって？あの子が、兄さんの」

「ええ、そうなの。だから貴方に、史郎のことを黙っててもらおうと思つて電話したの」

「別にあの子に言つつもりなんてないわ。言いたくもないっ！」

冷たく吐き捨てる静香に、祖母は憤りを抑えきれず咎めた。

「静香、どうしてそう輝夜に冷たく当たるの！？」

あれほど史郎と桐華さんを慕っていた貴方がどうして二人の子をつ

「それは母さんがよく知つてるはずよ。」

ましてや実の子でもないのに、愛せるわけないじゃない」

「わかつてる？ 輝夜には何の罪もないのよ！史郎のことも、桐華さんのことも全部っ！」

「でも、存在そのものが罪だわ」

「っ……………静香！！」

非情に言い放つ娘にたまらず百合子は怒鳴りつける。

そんな反応を予測していたのか静香は冷めた声で淡々と返した。

「あら、まぎれもない事実でしょ？」

罪深い存在だというのにここまで養つてやつただけでも感謝してもらいたいほどだわ。

じゃあ、もういいかしら？ 電話、切らせてもらつわ」

「待ちなさいっ、静香！ 静香あっ！！」

無情にも下ろされた受話器を置く音に、百合子はしばしその場で怒りに震えていた。

「どうした？ 朝から大声を出して」

珍しい妻の怒声を聞きつけた夫、大河が襖たいがから顔を出した。後手で閉めると、苛立つ妻を慰めるように側に寄り添う。

震える手で大河の服を掴んだ百合子は悲しげに吐息を洩らした。

「静香が、あの子のことを……輝夜を」

皆まで言い終わらずとも何の事かわかり、大河は眉を寄せる。

「まったく、静香にも困ったものだ！ あれは輝夜のせいではないというのに……っ！！」

「ええ、罪どころか全くの被害者なのよ！ あの子は結局、二度も親と死に別れて深い傷を負ったのに。」

実の娘ながら傷口に塩を塗りこむような真似をよくできるわ……」

それ以降、沈鬱な空気が二人の間を流れた。しばし考え込んでいた大河は暗い顔で俯く百合子に声を掛ける。

「なあ、百合子。私は思うんだが、静香は奴と輝夜を重ね合わせてるんじゃないのか？」

それは特大の爆弾だった。星川家の原爆と言ってもいい。

大河の発した内容に百合子はサーッと青ざめた。それから目に見えて震え始め、自身の腕を強く抑える。これは余り考えたくない予

想だった。が、これなら静香があれ程までに輝夜を嫌悪する理由がつく。

それにこの予想はそう遠く外れてはいないだろうと百合子の直感が告げていた。だがそれ故に認めたくない思いが強くなる。

瞬間、百合子は怒鳴っていた。

「馬鹿なこと言わないで！！」

忘れたの！？ あいつがどんな奴かつ、どれ程冷酷で残虐で人を人とも思わぬ外道か！！！

奴と輝夜が似てるですって？ そんなこと……あるわけがない！！」

珍しく妻の逆鱗に触れた大河は慌ててそれを打ち消した。

「もっ、もちろんお前の言うとおりだよ！

すまない、考えなしだったな。

私はただ静香がそんな風に輝夜を見てるんじゃないかと思っただけで、あの子をそんな風に見たわけじゃないよ」

「……当然です。何よりあの子は見た目も中身も母親似ですよ。優しく、慈悲深い彼女に。

まあ、確かに史郎に似た所も少なからずありますけど。真面目で気立ての良いところは桐華さんですけど、少々いえかなり熱血漢で正義感が強いところは史郎そのものですし。

あの男に似ているだなんて、万が一にも有り得ないことです！」

「わっ、わかった！ わかったから頼む、落ち着いてくれ！！」

ほとんど困り果てた大河は何とか妻をなだめ、やっとの思いでお茶の間まで引っ張り込んだ。

これが百合子と静香によるガチバトルの一部始終である。

そしてもうすぐ日も落ちるかという頃まで、朝の苛々を引きずったままの妻にいつにも増して大河は家族サービスをしていたという

訳だ。

互いに座布団に座った状態で、ほらと大河がお茶を出す。

「ごめんなさい。ちょっと、今日は感情的になりすぎていたみたい」
「無理もない。私らの大切な孫のことだ。」

史郎と桐華さんが亡くなった後、輝夜を見守るのが自分たちの役目だと思つて今日まで来たからな」

「ええ。それで、そのつ、神魔のことなんですけど」

「わかつてる。十中八九、あの子は関わつてるだろう。
あれほど言い聞かせていたのにな」

沈痛な面持ちで黙り込む夫を気遣わしげに百合子は見つめる。言
い知れぬ不安を押し流すように大河は一気に緑茶を流し込んだ。
ごとつと音を立て湯呑みを置く。

「いいか、百合子。絶対、奴の話だけは輝夜の耳に入れるな！
もし、あの子が聞くことがあつたら……」

「ええ、わかつてますとも！……問題は静香だけですね。
静香さえ口を滑らせなければ大丈夫ですけど」

「そつ、だな」

それが一番の不安なのだが、史郎の件に関してもあの態度なので
恐らく言うことはあるまい。

何かあつた時は我々でバックアップしようと話がまとまつたこ
ろで、玄関先からチャイムが鳴り響いてきた。

「はい、どちら様ですか？」

いそいそと百合子が玄関口まで来ると聞き慣れた声が返ってきた。

「ばあちゃん、俺！」

「あらあら、とうとうウチにもオレオレ詐欺が」

「違うって！俺だよ俺、輝夜だって！！」

「はいはい、わかってますとも。」

「さあ、お上がりなさい」

「ううゝ相変わらず質の悪い冗談を。」

「一応、おじゃまします」

先程まで話題になっていた孫の突然の来訪に、内心を悟られまいと祖母は殊更輝夜をからかった。今年十八になると言ってもまだまだ子供な孫は、心底顔をしかめて祖母のからかいに反応する。

それが百合子には嬉しくもあり、まだこの子が自分達の手が届く範囲にいることへの安心感にもなっていた。

それにしても百合子は輝夜を仰ぐ。土曜日に帰ってきた時はこの世の終わりのような顔をしていた孫が、今は清々しい顔をしているではないか。理由はどうかあれ孫が幸せそうにしているのが百合子と大河にとって一番嬉しいこと。

制服があちこち擦り切れているのに気が付いたが、きっとこちらが何を聞いても答えはしないだろう。

茶の間に入った二人はそのままいつもの定位置に腰かけた。

「じいちゃん、日曜日ぶり！」

「そんな言い方もあるかの。最近の若者言葉はちと難しすぎるぞ。ついていけないわい」

「いや、無理して付いてく必要ないんじゃない？」

俺だってオタクだけど、2ちゃん用語未だに完全には理解できないし」

それこそ理解する必要ないだろうと夫婦揃って仲良く突っ込む。

「うーん。だけどさあ、ついてけないってのも密かに寂しいって言うかある種の悲哀を感じるもんだぜ？」

「……ほんと、似てるようで似とらんう、あの二人に。どう間違ったらお前のような子が出来上がるもんなのか」

「そうねえ。史郎もヒーローものは好きだったけど、輝夜ほどはまりこんではいなかったしねえ」

「二人揃ってどういう意味だ、このヤロー。」

「フツ、たとえ世間やリア充から白い目で見られようと俺のヒーロー達への愛だけは揺るがねえよ！」

いかにもオタク度全開な台詞をはく孫に、大河は重くなるばかりの額を抑えた。

うちの孫、受験だいじょぶかな？

色々な不安がよぎる大河を余所に、基本来るもの拒まずで偏見のない百合子はニコニコと輝夜の話に耳を傾けている。

ほんと、お前は凄いや百合子。

思えば彼女との出会いはかなりエキセントリックだったような気がする。

いきなり、貴方はもし殿方としか恋愛できない世の中になったらどうします？

和服の似合う美人系ですか？ それともドレスの似合うキラキラ可愛い系がお好み？

はっ！ すいません、失礼なことを！

もしかして……抱かれる方が良かったとか？

そんなぶっ飛んだ質問をされたのが昨日のことのようだ。

正直、目の前の淑やかな日本美人の口からこんな言葉が聞けようとは夢にも思わなかった。

今でいうところの腐女子だそうだが（情報源は輝夜）、こういう孫のオタク的気質は口には出さないが確実に妻ゆずりだろう。

いつの間にか特撮から色ものにまで話を咲かせる輝夜と百合子を、

今日も大河は生温かく見守っていた。

例え仮初の^{かりそ}の平和だったとしても、
今だけはせめて安らぎを……。

第4・5話 完

第4・5話 ブルーマンデー（後書き）

最初シリアス、あとはギャグ。

本編でもそろそろギャグの比率を上げたい。

でもきつとシリアス成分多めになる。

輝夜のオタク気質はばーちゃんからでしたw

第5話 友情の危機！？ 世那の迷い パート1（前書き）

遅れてすみません！ 世那、初の主役回です。

第5話 友情の危機！？ 世那の迷い パート1

どこまでも暗く果てしない闇。辺りを見渡すには申し訳程度に並べられた燭台にのみ頼らなければならぬ。

決して燭台の数が少ない訳ではないのだが、この広間全体を覆う闇が僅かな光でさえかき消すほど深いため、全てを目視することは難しい。

そんな中、平安装束に身を包む異形の女はようやく癒えた頬の傷跡を指先でなぞっていた。

「おのれ、マイスマン！ よくもわらわに恥を掻かせおって……！」

マイスマンの武装転神化によって敗れた後、ダキニを待っていたのはアスラによる静かな叱責とヴァナルガによる嘲笑だった。アスラのことはまだわかる。神魔獣を造るのは彼なのだから。だがヴァナルガから馬鹿にされることだけは我慢ならない。人一倍プライドの高いダキニにとって、思いのほかこの敗北は深い傷を残していた。せめてこの悔しさを慰めようと愛する主の眠るこの場所へ来たが、目覚めぬ主の姿に尚更罪悪感が募りどうしようもない。

「っ……陛下、お許しを……」

みつともないほどに声が震える。そんな自分が堪らなく恥ずかしく嫌だった。

あのお方への恩義は一日たりとも忘れたことはない。人間による人種差別の嵐は幼いダキニから全てを奪い尽くした。

元々家族はなく霊山の岩から生まれた彼女だったが、山の民は授かり子として慈しみ大事に育ててくれた。目を閉じれば今も、長老

にして育ての親たるかか様の笑顔が脳裏に浮かぶ。

優しく、彼女を受け入れてくれていた村人達。慎ましく生きてきた彼らには何の非もなかったのに。

狐の民と呼ばれていた彼らの頭には、一様に狐の耳が生えていた。ただそれだけ、それだけの理由で彼らは虐殺されていた。

——我らは獣神、天狐^{てんこ}の民。この耳は神から我らへの守護の証だ。ダキニ、お前は天狐山の大岩から生まれた誉れ高き子じゃ。天狐族の誇りを胸に……強く、気高く生きよ！！

それがかか様の最期の言葉だった。自分を庇^{かば}い、凶刃の露と消えた育ての母の冷たくなっていく身体を感じながら、ダキニは目前に迫る刃に身をすくませた。

首筋に当たる金属の冷たさに、自身も死を覚悟し固く眼をつぶる。しかし、いつまで経っても動く気配がない。

恐る恐る眼を開いたその先に、世界中の夜闇を身に纏ったような黒い鎧の男が立っていた。ダキニを殺そうとしていた男は、逆に自分自身がその黒い男によって物言わぬ骸^{むくろ}に変えられていた。男の足元に転がる生首に、幼いダキニはひとつと喉元から引きつつた声を上げる。

男はダキニを何の感情も映さぬ眼で見下ろす。——この人は、何なんだろう。私を助けてくれたの？ それとも後で殺すつもり……？ 聞きたいことは山ほどあるが、話を切り出す勇氣は彼女にはなかった。

「おい、その娘」

声一つ上げる間も許さず首をはねた男は、先ほど人を殺したとは思えないほど落ち着き払った態度でダキニに声をかけてきた。思わず、びくりと肩が揺れる。

「私と共に来い、真の世界を見せてやる。偽りの平和をぶち壊す様

を、お前は私の隣で見ている。なに、不自由はさせない。私には必要なのだ、お前のような強き力と意思を持つものがな」

たった今出会ったばかりの人間に何を言ってるのか。お前に私の何がわかるというのだ！

母や仲間を殺された悲しみも相まって、憤りに任せ、ダキニは男に向かって叫んでいた。だが男はそれに怒るところか、どこか楽しげに唇を歪ませた。

「ああ、わからんな。なにせお前の言うとおり、顔を突き合わせたばかりだからな。だが一つだけ、私は知っている」

——お前の眼には焰が宿っている。全てを焼き尽くしても足りないほどの、熱く、冷たい焰がな。その眼が気に入った。だから私に寄越せ。お前のその眼に、私がこの腐った世を変える様を焼きつける……！

この言葉が、常世のような闇を持つ眼がダキニの心を捕えた。恐ろしく冷たく、人を無機物か何かとしか思っていないような非情な眼。だが、何故か信じてみたいと思わせる不思議な引力を放っていた。

「今度は……わらわが貴方様を助ける番なのにつ」

「ならばお前にその任を与えよう」

弾かれたように背後を振り向けば、濃紺の外套をひるがえ翻しながらアスラが近づいてきた。

「どういう意味じゃ？ 作戦を二度にわたり失敗したわらわに何故……」

「簡単なことだ。お前の陛下に対する忠義は本物。先の作戦の落ち

度を責めるより、その忠誠心を評価するのが何より陛下が求めることだと思っただけだ」

「わらわは、何をすればよい？」

「その前に、陛下への忠誠を違えることはないか？」

妙にもったいぶった確認にダキニの片眉が跳ね上がる。何だその言い草は！ わらわが陛下を裏切るとでも！？

眼に不穏な光がちらつき出した彼女に、即座にアスラは言い添えた。

「まあ待て、そういう意味で聞いたのではない。これからお前にやつてもらわなければならないことはそれだけの覚悟が必要なものだからだ。だからこそ、あえて聞かせてもらった」

「……………それは、とても厳しいものか？」

「人によるだろう。だがダキニ、お前にとってはこの上ない苦痛となるかもしれない。

それでも」

「わらわはこの方に一生分の命を救われた。計り知れない程の苦しみが何ぞ？ 故郷を滅ぼされたあの日に地獄を見たことに比べれば、どんな任務であろうと耐え抜いてみせる！！」

それが、今のわらわが陛下にできる唯一の恩返しじゃ」

自分の言葉を遮り、想いの丈をぶつけたダキニにアスラは軽く眼を見張る。しかしすぐに元のポーカーフェイスに逆戻りすると、わかったと静かにダキニを見据えた。

「お前の任務は二つ。一つは人間社会に人間として潜り込み、人間達の弱点を探ること。もう一つは人間に転生した守護獣神——マイスマンの正体を暴くこと。以上だ」

「なっ……………！」

思わず否と叫びそうになったが、陛下の顔が浮かんだため喉元に必死で抑え込む。アスラの顔には何の感情も浮かばない。憎たらしい程に落ち着き払ったその顔をねめつけながら、ダキニはようやく一言口に出した。

「何故……っ、何故、人間に化けてまでそうする必要がある!？」
「それが一番効率の良い方法だからだ。嫌ならやめてもいい、強制はしない」

さて、ここまで言われたからには流石のダキニも引き返すことはできなかった。いや、元より引き返すつもりもないだろう。持ち前の負けん気が顔を出し、いつもの高飛車な態度でアスラを見下す。

「フツ、そなた……誰に物申しておる？ ちょうど良い。不愉快な人間どもの中に混じらねばならないのは苦痛だが、奴らの生活圈を攻略する良い機会じゃ。せいぜいわらの働きを無駄にせぬようアスラ達には頑張ってもらわねばのうち？」

「それこそ誰に物を言っている？ 待っている、腕によりをかけて高性能な神魔獣を作ってやる」

ここでやつと微動だにしなかった表情筋が崩れ、アスラの顔が不敵な色で染められた。不覚にもダキニは色香すら漂うその笑みに当てられてしまった。赤くなりかける顔をすぐさま扇で隠す。

べっ……別にカッコいいなどとは思っておらぬ！ これは事故、そう事故じゃ！ あんな顔がほとんど陰になってる男に見惚れるなぞ決え……っして、有り得ぬ!!

一人で信号機のように赤くなったり青くなったりしているダキニを不可解な顔でアスラは見つめる。

まさか己のことで同僚が忙しく思い悩んでいるなどと、この少々

鈍感な男には理解できないのであった。

誰だって平穩無事に過ごしたい。きっとそれは万国共通だろう。
異論は聞かない。

……さて、まずは目の前に立ちふさがるケバケバしい魔女の群れを説明していただきたい。何故に俺は睨まれてるんだ？

「星川あ、あんた最近調子乗ってんじゃないのおゝ！？ 結城君だけじゃなく、世那ちゃんと沙夜子ちゃんにまでぺたぺたしてさあ！
！」

金髪ゆるパーマがバンつと派手な音を立てて机を叩く。やめてくれっ、シャーペンが落ちる！

「ちょっと空蓮寺君に勝ったぐらいで図に乗ってんじゃないよ！
だいたいそれだって運が良かっただけじゃん」

一見優等生つばい雰囲気の黒髪ミディアムヘア（しかししっかり化粧している）がドスをきかせた声でたたみかける。そこに、常日頃は男相手に猫なで声を出している可愛げはカケラもない。

取り巻き連中もそうだソーダーの大合唱を一齐に奏で始めた。もつとも……奏でるだなんて綺麗なもんじゃなく騒音大公害だが。ああ、うるせえ！ 鼓膜が破れそうだ。どうしてくれる。

余りのうるさに辟易し、思わず溜め息をつく。だが、目敏くそれを見つけた化粧お化け軍団はカツと顔に朱を昇らせた。

「ハアっ？ 何、その態度。呆れてものも言えませんか？」

「何様のつもりな訳、あんた。いい加減、分をわきまえろっつーの

「！！」

何が分をわきまえるだ。人が誰と仲良くしようが、喧嘩で勝とうがこっちの勝手だろうに。しかしそれを言って話が通じた試しは残念ながら……ない。

いい加減解放されたいのと争い事が嫌なのもあり、輝夜はゆるりと顔を上げ化粧軍団を見据えた。

眼鏡越しに伝わる言い知れぬ威圧感に彼女達是不気味さを感じ後ずさる。後ろから、うわっキモおい、なんて言葉が飛んでくるがあらえて聞き返さずスルーだ。

「あのさ、さつきから君らの言ってることマジ意味わかんないんだけど。俺が誰と仲良くしようが別にいいだろ。それは顔真赤にしてまで怒ることなわけ？ だいたい空蓮寺のことだつて先に仕掛けてきたのはあいつだ。こっちを加害者扱いすんな」

「っ……ほんと、もう一度『教育』し直すっきゃないね、この馬鹿は。みんなっ、このキモオタクに叩きこんでやろうよ！ 自分の立場ってやつをさあー！！」

いいねっ、やっちゃえやっちゃえーと後ろの女子達が小学生並みにはしゃぎだす。傍から見れば、今年運転免許が取れる年齢になるとは思えないほど恥ずかしい幼稚なものだ。だが誰も止める者はいない。

傍観者達はどこか胸に重しを入れたような気分になりながらも、自分には関係ないと言わんばかりに目を逸らす。もしくは視線さえ寄越さない。

それに気分を良くした厚化粧軍団は勝ち誇ったように輝夜を嘲った。しかし依然金髪パーマの機嫌だけは治らない。

完全に据わった眼に変わった金髪パーマは、自分の取り巻きの男に輝夜を痛めつけるよう顎をしゃくり指示した。どこか自分のこと

ではないように、遠いを通り越した虚ろな眼で彼はぞろぞろと集まってくる学ランの群れを眺める。思うことはどうやって争いごとを回避するかだ。

学校で問題を起こそうものなら保護者に連絡がいく。この保護者というのが問題で、真に残念なことにあの叔母夫婦だ。いやあもう、よりによって。連絡が行こうものなら即、大学進学はやめろだの、奨学金の保証人になってやらんだの、お前にいくら掛かったと思ってるんだといった言葉を機関銃の如く降り注いでくることだろう。だったら、残る手段は一つ。平和的解決法しかあるまい？

ああ……また智史たちにバレないよう早く逃げなければならぬのか。嫌だな、いつもいつも俺ばかり。俺のどこがいけないんだろ？ 精一杯すみっこへ方詰めるように大人しく生きてきたのに……。

頭の中で、いつも眼を付けれることへの不満と自問自答を繰り返す。自分には人から嫌われる疫病神がついているのではなかるうか？

人からゴミのように扱われることに、輝夜は顔には出さないものの心底精神的に参っていた。

友人たちにいつも守られているのはプライドが傷付く。さらに迷惑をかけたくないという両方の感情から板挟み状態だ。

結局、輝夜の思いついた平和的解決法は名誉ある逃走だった。いつものことだ、他に選択肢がないだけで。別にたこ殴りが嫌だったからというわけでは決してない。

問題を起こされたくないのはもちろん、眼鏡が壊されたら修理費でお金が飛ぶ。どんな暴力よりも貯金が減ることと、大学進学取り止めの方が輝夜にとっては最大級のダメージだ。

輝夜が色々試案しているうちにも、下卑たにやつきを抑えもしない金髪パーマの男が迫ってきていた。

取り巻きの男達が輝夜の胸倉を掴もうと手を伸ばしてくる。どうにか逃げようと腰を浮かせたその時、勢いよく教室の引き戸が開か

れた。

あまりに大きな音に全員振り向けば、クラスのお笑い担当の男子が異様に興奮した様子で喋り出した。

「うおおーいっ！ 喜べ野郎ども！！ 俺らのもんもんとしたムサイ青春に一筋の光が差したぞおー！！！」

何だ何だと教室内がざわめき出す。うるさく騒ぎ続ける男子の後ろから、相方がすかさず鋭いチョップを頭部に叩きつけた。その勢いで床へと沈んでいく。

「うるっせえ、タコ！ てめえは毎度毎度デカい声出さなきゃ喋れんのか！！ ああ！？」

「サーセン……」

びきびきとこめかみに青筋を浮き上がらせ、鬼もかくやなお顔に変貌した相方に怯んだ男子は大人しくなった。その様はチワワがふるふると震えてるようにしか見えない。

先程まで騒いでいたのが嘘のよう。その余波で輝夜いじめに勤しんでいたグループまでシン……と静まり返る。

彼も輝夜とは別の意味で目立つ存在だった。その理由は――

「委員長ー、少し落ち着こうぜ？」

「そうそう、こうおっかないとなあー」

傍観者グループの中でもムードメーカー的存在の男子がお笑い系に助け舟を出す。だがそれを委員長と呼ばれた男はすげなく跳ねのけた。

「あ？ さっきまで星川のことで騒いでた奴が何言ってやがる。言

つとくが見てただけっー言い訳は無しだ。わかったか？」

「うつ……！」

鋭い指摘に彼らだけでなく殆どのクラスメートがさつと視線を逸らす。当然だろう。知っていて見ない振りをしていた者、便乗した者それぞれが自分のやっていたことを十分わかつているのだから。

委員長の目立つ理由こそ、この容赦ない物言いにある。誰が相手であってもその態度が変わることはない。良く言えば公平な人物で、いじめグループに対しても他の生徒と違い怯まない。

そういう意味では輝夜に対して差別しない数少ないクラスメートだった。

しばらくクラスメートを見据えていた委員長は、漆黒の鋭い眼をいじめグループに向けることにした。さしものいじめグループも委員長が苦手なのか、男子だけ早々と席に戻ってしまった。当然だ、自分より腕っ節の強い奴に向かっていく危険は犯したくない。

取り巻きの女子もさっきまでの勢いが嘘のように大人しくなっている。しかし金髪と表面優等生だけはギツときつい眼で委員長を睨んできた。

「ちょっとお、余計なこと言わないでよ！ あたしらはこいつがしつこく世那ちゃん達に付きまとうから注意してただけで」

「教育と言って、自分の立場とやらをわからせるとか言ってなかったか？ それがお前らの言う『注意』か？ 随分、常識ないな」

反論する間もなく、バツサリと切り捨てられる。これにはさすがの二人も返す言葉を失くした。

黙って、しかし、ぎらぎらとした眼で輝夜を睨みつけると、そのまま憤然とした態度で教室を出て行った。後ろに数人の取り巻き女子も慌ててぞろぞろと付いていく。

委員長は二人が去った後、相方の首根っこを引きずり（本人は自

分で歩くと言っていたが）、輝夜を一瞥すると廊下へ出た。そこには、なんと世那が立っていた。委員長とお笑い系男子と世那の視線が絡み合う。

「ありがとう、二人とも。星川を助けてくれて」

そう、今回の騒ぎを計画したのは世那だった。

本当は自分の手で輝夜を助けたかったが、それをするとは後で彼が酷いめに遭う。助ける度に、後で再会した時に輝夜の制服が汚れていたり、口元が切れているのを何度も眼にしてきた。

だからこそ、クラスの中でも公平なこの二人に助け舟を頼んだのだ。

それにしても、とお笑い系が口を開く。

「星川も星川だよなあー。何でもところ……、強く言い返さないんだか。

綺麗な言い方すりゃ、優しすぎだな、あいつ。悪く言やあ、自分を抑えすぎ」

それは世那も常々感じていたことだ。輝夜も輝夜なりに言い返しているとは思うが、もう少しキツイ言い方をしてもいいはずだ。

世那から言わせれば、彼女達は友達面して自分達を利用しているだけに過ぎない。ステータスの一種として……。

そんな中で自分を他の生徒達のようにアクセサリー代わりとして扱わず、人間性を見てくれた輝夜のこととは沙夜子や智史と同じくらい大切に思ってきた。それなのに、肝心の本人が彼女達に強く出してくれない。

世那はそのことにいささか失望していた。結局のところ輝夜は、自分達のことをそこまで大切な友人とは思ってないのではないか？だからあの意地の悪い女子達にも、理不尽な暴力を奮う男子にも

抵抗しないのではないか？ 密かに、ずっと世那は思い悩んできた。

「どうして……どうして星川はやり返さないんだろ？ 私達のことだけじゃない。一番仲良い結城とのことだって、友達として釣り合わないって言われて。何で？ 悔しくないの、辛くないの？」

口に出すと止まらなくなる。堰を突いてばんばん飛び出す疑問に、聞いている二人は何とも言い難い顔で世那を見ることしかできなかった。

鉄砲のように飛び出る言葉とは裏腹に、声が萎しぼんでいたからだ。しばし考えて考え抜いた末、委員長はやつと慰めに近い言葉を絞り出した。

「星川は、たぶん迷惑を掛けたくないんだろう。自分が学校中でどんな目で見られてるかは、本人が一番わかってるだろうし。それにな、白鳥。俺ら男つてのはそりゃあプライドが高いんだよ。ああ、そうさ。友達に、しかも女の子に助けられてみる。プライド、ガタガタだ！」

これは思いもしない言葉だった。自分達女子もプライドはある。だが友達に助けを求めることを恥ずかしいと思ったことはない。しかし、男子の世界ではそういうわけにはいかないようだ。

あのヘラヘラしてるお笑い系男子ですら、いつもは見ない真面目な顔つきでしっかりと頷いている。

それでも世那は納得できなかった。抵抗してくれない悲しさは徐々に怒りへと変わっていく。

「だからって……なんにも話してくれないんじゃない意味ないだろ！！そんなに私達じゃ頼りないのかよ！」

「いやっそうじゃなく……」

「もういい！ 高梨達の脅しに屈して、自分から歩み寄ろうとしない奴なんてっ、ずうーっとこのまんまでいればいい！！」

委員長の説得も耳に入らず、世那は怒りを爆発させた。火山活動といい勝負かもしれない。頭から湯気が出るほどの勢いだ。

ちなみに高梨とは、あの厚化粧金髪パーマのことだ。表面優等生の方は藤野。この際、どうでもいい補足だが。

お笑い系男子は白鳥の尋常じゃない様子に眼を剥く。一瞬固まるものの、すぐにいつもの自分に戻り、何とか世那の機嫌を直そうと試みた。

「おいおいっ、白鳥っちゃん！ そりゃいくらなんでも言い過ぎっしょ！？ 星川の状況みりゃ、難しいってわかんじゃん」

「葛城は黙ってて！！」
かつらぎ

「はっ、はいいっ！！」

血管をぶち切れる寸前まで浮き上がらせた世那に、お笑い系男子、葛城は引きつりながら返事をするしかなかった。委員長も思わず喉元を硬直させる。

「しばらく、あいつとは距離を置く。それが星川の望みなんだろうし……っ！？」

勢いのままに吐き捨てる世那は、葛城達の方を見て言葉をとぎらせる。

急に眼を見開き固まってしまった世那に、二人も何事かと後ろへ振り向く。そこには輝夜がいた。心なしかしよげているように見える。眼鏡のせいか光の逆行で眼元が見えないが、おそらく相当困った顔をしているだろう。

最初はまずいことを聞かれ動揺していた世那も、すぐに平静を取

り戻した。

「そういうことだから、しばらく口きかないで。私もあんたには用事がある時以外話しかけないから」

用事とはマイスマン絡みのことだろう。つまり戦う時以外は関わりを持ちたくないと言われたのだ。

勇人からもそういう扱いを受けているだけに、親しみを持つている世那にまで拒絶されて輝夜は凍りついた。何か言わなくては。そう思うも意思に反して声が出てこない。

本当は一緒にいたい。みんなの中で笑っていたい。これが望みなのに、どうしてこうなってしまうんだ？

いつまでも何も言わない輝夜に今度こそ世那はがっかりした。一瞬、泣きそうな眼で輝夜を見る。

その視線の意味に気付いた輝夜ははっと彼女を見るが、輝夜の視線を振り切るように世那は走って行ってしまった。

結局、また俺は何も言えなかった。輝夜の胸に強い後悔が押し寄せる。自分の不器用な性格を今日という日ほど呪ったことはないだろう。

「何で、俺っていつも。白鳥に迷惑かけたくなかっただけなのに……」

すっかり意気消沈し、輝夜はぽつりとつぶやく。

始めは静かに見ていた委員長も、最後の一言には苛立ちを感じた。固く結ばれた口をゆっくり開く。

「落ち込むぐらいなら、もう少し高梨と藤野に強く出たらどうだ？ お前のそういうウジウジしたところが相手を図に乗らせるんだろ」「うーん、言い過ぎだけど俺も同感かなあ。何でも相手の都合を聞

いてやることは、優しさとはちょっと違うと思う。みんな結構人の好き嫌い激しいから、星川が好き嫌いを言ったところで別に何も無いと思うぞ」

厳しいながらも暖かい二人の意見に、軽く輝夜は眼を見張った。今までクラスメートに意見を求めたことがなかった彼にとつて、これは新鮮なことだった。ああ、今ちゃんと学生らしい青春送ってるな。

この状況からすれば少々場違いな思考だが、こうやって友達のとで悩み、相談に乗ってもらう相手なんて智史以外にいなかったのだ。正直、小さな感動を覚えていた。

「俺は……どうすればいいんだろう」

あと一步の勇気を振り絞り、プライドという重い鎧を脱ぎ去って輝夜は助言を求めた。必死な輝夜に委員長と葛城は間髪いれず異口同音に発した。

「さっさと白鳥の聞きたい言葉を言ってこい！」

それができたら苦労しない。そう思いながらも、何故かこの二人に言われるのは嫌いじゃなかった。

自分の心を裸にしてもぶつかっていく覚悟というか、心の準備はまだできていないがそれでも白鳥に自分の本当の気持ちを伝えよう。一度方針が決まれば気持ちが決まるのか、今の輝夜の顔は明るかった。

「そうだな。よし、勇気づけのために……」

「勇気づけのために？」

「コスモレッドの下敷きでリハーサルしてくる！」

そうじゃねえだろおおー！！ この一言で、委員長と葛城双方からハリセンクラッシュの洗礼をありがく頂戴することになった。そのハリセンの音は実にいい響きだったとだけ言っておこう。

その三人を角から見つめる少女が一人。少女は黒い右サイドポニーテールの髪を揺らし、また角へと隠れていく。そこから階段を下りて行き、誰も使っていない視聴覚室に入って行こうとすると後ろから声がかかった。

「天河さん、そこは次の授業の場所じゃないぞ。わからないことは俺が教えると言ったはずだけど？」

珍しく穏やかな態度の勇人が、やけに優しい口調で天河という少女を呼びとめた。少女は申し訳なさそうに謝る。

「ごめんなさい、空蓮寺君。何となくここかなと思って」

「別にいいけど、あんまり遠慮しなくていいからな」

「はい、ありがとうございます」

「ハハッ、別に敬語も使わなくていいから。転校してきたばっかで慣れないのはわかるから、わからないこととか困ったことがあればいつでも俺に言えよ？」

「あ、はい。ありがとうございます」

「また敬語になってるし」

笑いながら指摘すると、天河も困ったように笑い返す。深く吸い込まれそうな程、透明感のある黒い眼。知らず、勇人はその漆黒の世界に囚われそうになる錯覚を起こしそうになった。大きなアーモンド形の眼には黒いヴェールのような睫毛が品よく並び、その人形めいた面立ちに影を落としている。

こんなに美しいと思った女性は初めてかもしれない。確かに世那も沙夜子もずば抜けて美しいが、自分の求めているタイプではなかった。そんな時、彼女が現れた。

凜として咲いていながらも、どこか儂げなこの少女に一目会った瞬間から、勇人の心は奪われてしまった。

「その……天河さん、そろそろ移動教室だから一緒にいかないか？」
「あつ、そうでした！　お願いします、空蓮寺くん」

さり気なく一緒に行けるよう誘い、勇人は彼女と共に移動教室へ向けて歩き始めた。

どこか嬉しそうに頬を緩ませる勇人は気付かない。少女がもう一度、視聴覚室へ視線を投げたのを。

二人が去った後の視聴覚室、ここから黒い影が揺らめいているのを知る者は誰もいなかった。

第5話 友情の危機！？ 世那の迷い パート2（前書き）

かなり久しぶりの更新です。

今回は日常編と新キャラ登場編。戦闘はパート3で。

第5話 友情の危機！？ 世那の迷い パート2

昼休み終了直前、この時の勇人は実にも昇る心地だった。沸き立つ気持ちを無理やり押さえつけ、表向きは平静を保ちながら、横に連れ添う限りなく透明な少女を見つめる。

今日の朝、突然担任から時期外れの転校生がやって来たと聞かされた。

自分を信頼しきった担任から迎えと案内を頼まれ、勇人のテンションは急降下する。

何故、俺が生徒会長というだけで見ず知らずの生徒の面倒を見なければならぬ？

てめえが案内すりゃいいだろ、担任なんだからよ。

本当はそう言ってやりたかったが、表向きは生徒思いの良い会長で通しているため、イメージを守るために感じよく引き受けざるを得なかった。

職員室に一番近い正面玄関（教職員がよくお客様を出迎える所だ）まで、気だるそうな態度を隠しもせずに渋々歩いていく。別に問題ない、周りには誰もいないのだから見られる心配もない。

さて、肝心の転校生はどんな奴だ。間抜けか？ それともできる奴か？

いずれにせよ、つまんねえ奴だったら最初だけ優しく出迎えて、後はつまいこと放置しておこう。

相変わらず自己中心的な思考だ。輝夜がこれを知ったなら、凄まじい嫌悪の眼で睨みつけただろう。

しかし、ここには勇人を咎める者も、その思考を覗ける者もない。

ふああと生あくびを噛み殺し、ようやく問題の正面玄関へ足を踏

み入れる。

さて、どんな面をしてるか拝んでやるか。あのダ眼鏡みたいなのだったら即効距離を置く。

襟足を軽く搔き、ゆっくりと顔をもたげ、勇人は初めて正面玄関入口へ眼を向けた。そして……心底後悔する。

一瞬たりとも転校生を邪魔物扱いしようとしたことに。

「き、みは……？」

自分でも驚くほどもった声しか出ず、勇人は知らずのうちに焦る。すぐにいつものような威風堂々とした態度に戻ろうとするも、かえって焦れば焦るほど声が出なくなってしまう。

そんな勇人の様子を露知らず、彼の視線を一身に集める女子生徒は穢れを知らぬ真っ直ぐな瞳で見つめ返した。彼女の薄い眼鏡の奥から覗く黒目がちの眼に、じっと少女を見つめ続ける勇人が映しだされる。

「貴方が、生徒会長の空蓮寺君ですか？」

清流のせせらぎを思わせる涼やかな声が、味気ない玄関で場違いなほど美しく響き渡る。一流のピアニストがここで演奏しているかのようだ。

「あ、ああ、そうだ。とすると、君が今日から来た転校生の……」

「天河 穂乃歌ほのかです。今日は案内をしてくださり、ありがとうございます」

同い年同士であるにも関わらず、敬語口調だ。

もっと碎けた話し方すりゃあいいのに、緊張してんのか？

少女が今時珍しいくらいクソ真面目な態度なので、逆に勇人は冷静になる。

もつと堂々としてりゃいいのに。もったいねえよな、せつかく可愛いだからよ。

そう思いながら、再度勇人は視線を穂乃歌の全身に滑らせていく。雪よりも白い肌、それと対照的にどこまでも黒々とした濡羽色ぬればいろの髪が肩より下で絹糸の如く緩やかに広がっている。きっと触れればどこまでも簡単に指の間を滑り落ちていくのだろう。

在らぬ妄想を膨らませ、脳内に甘い痺れを感じながら、勇人は彼女から眼を離せずにいた。

「あの、空蓮寺君？ すいません、教室はどちらに……」

ずっと無言で見つめ続ける勇人に、穂乃歌はおずおずと尋ねる。

その声ではつと我に返り、勇人は慌てて口を開いた。

「あつ、わ、悪い！ 教室までは俺が案内するから大丈夫だ。なんか他に先生から言われてないか？」

「いえ、空蓮寺君の言うとおりにしていれば大丈夫だからと先生が言っていましたので」

あんのクソ教師め……面倒だからって俺に全部丸投げしやがったな！ だが今回だけは許す！！

穂乃歌に目で合図すると、とことこと小動物のように勇人の側へ寄ってきた。

神様、グッジョブ！ なんなんだこの可愛い生き物は！！ けしからん、もつとやれ。

クールな表情の裏で、脳内お花畑状態に陥った勇人はあえて顔を引き締め、教室へと移動した。

その後、教室で始まった自己紹介で男子諸君が歓喜の雄叫びを上げ、女子達が憧れと嫉妬双方の視線を穂乃歌に向けていたことは言うまでもないだろう。

大混乱を抑えるために……というより、嫉妬と独占欲から男子女子双方に射殺するような眼で威圧する勇人に、全員が顔を蒼褪めるという一幕も発生。

B組の新聞部員は密かに、謎の転校生に生徒会長ご乱心という見出しを翌日の校内新聞の一面トップに決めた。

ここまですが午前中の出来事である。

というわけで現在、勇人は幸せオーラ満開の笑顔を振りまいていた。

音楽室まで歩きながらにこやかに穂乃歌と話していると、前方から今一番会いたくない人間がやってきた。さっきまでの幸せオーラが嘘のように顔を歪める。

チツ、いいとこで邪魔しやがって。相変わらず目障りな奴だ。

勇人の前方からやってきた人物、輝夜はそんな勇人の気持ちを余所に、思い悩んだ顔で俯いている。

当然、そんな状態の輝夜が二人に気付くはずがなく、そのまま通り過ぎようとしていた。

気付かれたら気付かれたでムカつく。なんたって彼女をこのキモオタの視界に入れたくないからな。

だがこの俺様に気付かないとはそれはそれでムカつく！

「あの……すいません」

言い様のないジレンマに悩まされていると、何と穂乃歌の方から輝夜に話しかけてしまった。

突然、声を掛けられた輝夜は一瞬戸惑うも、側に勇人がいること
ですぐに勇人関係の人かと納得する。

内心舌打ちしたい気分の勇人だったが、穂乃歌の手前良い人でい
たいのでその衝動を押し殺す。

勇人の冷たい視線が気になるも、話掛けられた手前、無視するの
は失礼にあたるのであるだけ勇人を視界に入れぬよう努めた。余計、
殺気が増した気がするのはきっと気のせいだ。

「えっと、どうしたのかな？」

「私、天河 穂乃歌といいます。今日、B組に転校してきました。
あの……もしかして、どこかでお会いしたことありません？」

「え？ いや、悪いけど覚えてないなあ。多分、初対面だと思うけ
ど……。」

あつ、俺は星川輝夜。隣のA組だから、あまり話す機会はないかも
しれないけどよろしく」

「はい、こちらこそよろしく申し上げます、星川君。

さつきは変なこと言ってごめんなさい。私の知ってる人に似ていた
から、もしかしたらと思って」

思わぬ会話の流れに勇人の米神がピキピキと音を立てて引きつり
出す。

何だ、この『貴方が運命の人ですか』と言わんばかりの遭遇は！？
ざけんなよ、星川。何で俺が teme と天河さんを引き合わせるた
めのピエロにならなきゃならねえんだ！！

元から相手の感情に敏感だった輝夜は、勇人の機嫌が明らかに下
がりまくっていることをひしひしと感じ取った。今も穂乃歌が自分
に笑い掛ける度、勇人の顔がどんどん鬼のようになっていく。

こいつ、どうも俺がこの転校生の子と話してることが気に食わな
いようだな。

自分から話しかけたわけじゃないのに、八つ当たられるのはごめ

んだ。

天河さんには悪いが、早々に話を切り上げて退散しよう。

「あのー、天河さん。悪いけど、そろそろ授業が始まるからまたね。最初は戸惑うこともあると思うけど慣れると面白いよ、この学校。それに、困った時は空蓮寺に聞けばいいよ。何だかんだで一応生徒会長だしな」

「一応は余計だ、ダ眼鏡」

輝夜の嫌味に条件反射で口にした途端、穂乃歌が驚いた顔で勇人を見た。

ハッ、しまった！ ついいつもの調子で……。

輝夜を見れば、してやったりという顔で黒い笑みを向けてくる。

こいつ、わかっててやりやがったな！？

後でどう調理してやるのかと拳を握りしめるも、横から聞こえてきた愛らしい笑い声に思考が中断した。笑っていたのは穂乃歌だった。

申し訳なさそうに笑いを抑えようとするも、我慢すればするほど笑い声が止まらなくなっている。

「ごっごめんなさっ……ふふっ、あはっ、おっ面白いっ！」

思わぬ反応に、輝夜を締めようとしていた勇人の気が削がれた。

輝夜もきょとんとした顔で笑い続ける少女を見ている。だがその笑顔につられて彼もまた笑いだした。

笑顔の輝夜に、何かを思い出したような顔をして穂乃歌がその大きな眼を見開く。

「……いか？」

「ん？ どうかした、天河さん」

輝夜の問いに慌てて穂乃歌は手で口を抑える。

「何でもないです。そのつ、ただの独り言なので」

「独り言ねえー。あるあるっ、俺も授業中についつい言っちゃって、後で痛い視線を喰らったりとか」

「テメエと天河さんを一緒にしてんじゃねえ！ だいたい、お前みたいなの眼鏡が天河さんと話すこと自体が許せん！！」

「はあああ！？ 別に話掛けられたから話してるだけだし！

無理やり嫌がつてる子相手にしてるんじゃないし！ そうだよなっ、天河さん」

「はい、星川君の言う通りですよ、空蓮寺君。

それに、星川君と話してると何かほっとするというか、とても懐かしい気分になります」

輝夜相手に頬を赤く染め、幸せそうに語る穂乃歌に、勇人は色々な意味で絶望を感じた。

何でっ、よりによってこいつを選ぶんだ！？

こんな何処から見ても冴えない、キモい、二次元・特撮オタの男に魅力を感じるというんだ……？

しばらく二人が談笑し、星川がチャイムの音と共に慌てて立ち去るまで、勇人は呆然と立ち尽くしていた。

それをたまたま見ていたA組の新聞部部長は、B組の例の新聞部員と共にぐつと親指を立てる。

「いいねえ！ これぞ青春って感じ？」

「これも写真撮るときます？」

「いいや、んな野暮なことするのは大人のマスゴミだけで十分だぜ。俺らができることはただ一つ……」

『生徒会長と天河さんを見守り隊！！』

勇人の知らぬところで、微妙なファンクラブが結成された瞬間だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4725g/>

獣神戦隊マイスマン

2011年10月12日02時03分発行